

大鳳寺跡発掘調査報告

1987

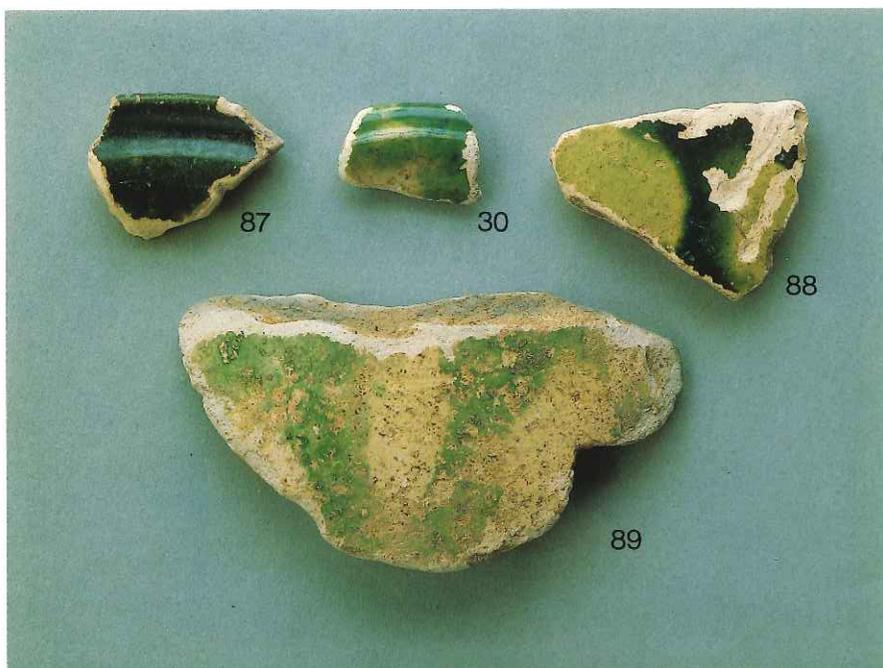
宇治市教育委員会



大鳳寺跡発掘調査報告

1987

宇治市教育委員会



鉛釉陶器

序

宇治市菟道にあります大鳳寺跡は、昭和46年に宇治市史編纂に伴い最初の発掘調査が行われ、瓦積基壇の発見により注目を集めた遺跡であります。

宇治市教育委員会では、昭和57年度より昭和61年度にいたる5年間、国より国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府より文化財緊急保存費補助金の交付を受け、大鳳寺跡の発掘調査を実施してまいりました。この調査は、当寺跡の周辺で開発が増加したのに伴い、この重要な遺跡の規模や内容を確認し、今後の遺跡保護の基礎資料を作成することを目的としたものです。

5年間の発掘調査の結果、大鳳寺は、今から約1300年前の白鳳時代に建立され、その規模は約112m四方に及ぶ大規模な寺院であったことがわかりました。また、その中にある金堂跡は、基壇の周囲を瓦で積みあげた瓦積基壇と呼ばれるもので、基壇の南辺と北辺に下成基壇を付設する珍しいものであります。

本書は、この5年間の発掘調査成果を1冊にまとめたものであります。本書が大鳳寺跡の基礎資料としてばかりでなく、広く古代宇治の解明に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた土地所有者の方々を始め、調査にあたりご指導を賜った調査指導の先生方や関係機関・各位そして調査に直接従事していただいた方々に対し心よりお礼申し上げます。

昭和62年3月1日

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

例 言

1. 本書は、宇治市教育委員会が昭和57年度より昭和61年度まで発掘調査を実施した大鳳寺跡の発掘調査報告である。
2. 本書に収録した発掘調査の次数は、第3次から第7次である。
3. 調査地は、京都府宇治市菟道西中である。
4. 発掘調査は、国から国宝重要文化財等保存整備費補助金を京都府から文化財緊急保存費補助金の交付を受け実施した。年度別の事業費は下記のとおりである。

年 度	事 業 費	国 庫 補 助 金	京 都 府 補 助 金	宇 治 市 負 担 金
昭 和 5 7 年 度	2,000,000 ^円	1,000,000 ^円	500,000 ^円	500,000 ^円
昭 和 5 8 年 度	3,000,000	1,500,000	750,000	750,000
昭 和 5 9 年 度	3,000,000	1,500,000	750,000	750,000
昭 和 6 0 年 度	3,000,000	1,500,000	750,000	750,000
昭 和 6 1 年 度	3,000,000	1,500,000	750,000	750,000
計	14,000,000	7,000,000	3,500,000	3,500,000

5. 第3次から第6次発掘調査については、各年度ごとに概要を報告した。しかし、若干不統一な部分があるため、本書でこれらを統一した。
6. 本書が使用する地区割りは任意である。南北を Y 軸、東西を X 軸とし各 1 m ごとの割付けである。Y 軸は磁北に対して 1°30′ 東へ傾く。標高は、京阪宇治駅の水準点（標高 18.90m）を基準とした。
7. 本書の遺物写真のうち軒瓦は高橋猪之介氏の撮影であり、他は杉本宏の撮影である。
8. 本書をまとめるについては、杉山信三氏及び山田良三氏のご協力をえた。
9. 本書に使用した図面のトレースは、古川小百合（仏教大学卒業生）・北村祥子（関西外国語短期大学生）が主に行ない、他は全員が行なった。
10. 本書の執筆者は、杉本宏（宇治市教育委員会）・猿向敏一（同囑託）・岸本展史（京都産業大学生）・八瀬正雄（龍谷大学卒業生）である。文責は本文目次に明示した。
11. 本書の編集は、宇治市教育委員会社会教育課が行ない、実務を杉本宏が担当した。

本文目次

第 I 章	大鳳寺跡の環境	1
第 1 節	地理的・歴史的環境 (杉本 宏)	1
第 2 節	第 1 次・第 2 次発掘調査 (杉本 宏)	5
第 II 章	発掘調査の経過	7
第 1 節	概 要 (杉本 宏)	7
第 2 節	調査組織 (杉本 宏)	10
第 3 節	調査日誌 (抄) (岸本展史)	13
第 III 章	遺 跡	20
第 1 節	遺 構 (杉本 宏)	20
第 2 節	遺構の時期と性格 (杉本 宏)	28
第 IV 章	遺 物	30
第 1 節	瓦 類 (杉本 宏)	30
第 2 節	土 器 類 (猿向敏一)	41
第 3 節	金属製品・その他 (猿向敏一)	53
第 V 章	考 察	55
第 1 節	伽藍配置と規模 (杉本 宏)	55
第 2 節	大鳳寺の変遷 (猿向敏一)	57
第 3 節	山城の白鳳寺院と瓦の文様 (八瀬正雄)	64
第 4 節	大鳳寺跡とその周辺 (杉本 宏)	71
第 VI 章	結 語 (杉本 宏)	76
	参考文献一覧	79
	別 表	82

挿 図 目 次

Fig 1	原始・古代の景観と遺跡	3
Fig 2	第1次発掘調査地点（昭和46年当時）	5
Fig 3	西中の地割りと調査地略図	8
Fig 4	現地説明会風景（第4次）	18
Fig 5	基本的層位略図	20
Fig 6	瓦積基壇使用瓦の割合	23
Fig 7	基壇と下成基壇断面図（南辺）	24
Fig 8	金堂基壇模式図	25
Fig 9	SA 701 土層断面図（第7次）	27
Fig 10	南山城地方白鳳寺院金堂の規模	28
Fig 11	軒丸瓦部分名称	30
Fig 12	川原寺の創建瓦	31
Fig 13	軒丸瓦の形式と出土量	32
Fig 14	瓦当面の粘土充填痕跡	34
Fig 15	丸瓦部接合面の接着強化	35
Fig 16	瓦当と丸瓦部のとり付け角度	36
Fig 17	軒平瓦部分名称	37
Fig 18	軒平瓦の形式と出土量	38
Fig 19	文字瓦	39
Fig 20	2種のタタキ原体	39
Fig 21	平瓦 B の成形台模式図	40
Fig 22	土師器杯・皿の口縁部形態	41
Fig 23	須恵器杯蓋の口縁部形態	42
Fig 24	灰釉陶器の高台形態	44
Fig 25	浄瓶実測図（第1次）	50
Fig 26	寺域南部地区遺物包含層出土土器実測図（第7次）	52
Fig 27	鉄製品実測図（第5次）	53
Fig 28	石製品実測図（第5次）	54
Fig 29	創建瓦出土位置略図	58

Fig 30	補修瓦出土位置略図	59
Fig 31	大鳳寺跡出土軒瓦等編年図	61
Fig 32	山城国の古代寺院	65
Fig 33	南山城地方の川原寺式	67
Fig 34	南山城地方の川原寺式の変化	68
Fig 35	山本瓦窯跡実測図	71
Fig 36	岡本廃寺の創建瓦	74

表 目 次

Tab 1	土師器杯・皿調整方法分類	47
Tab 2	宇治郡司一覧（9世紀以前）	72

図 版 目 次

遺構等平面図目次

PLAN 1	大鳳寺跡と周辺の遺跡
PLAN 2	大鳳寺跡の位置
PLAN 3	大鳳寺跡全図
PLAN 4	調査位置略図
PLAN 5	第3次 調査地全図
PLAN 6	第4次 第1・2トレンチ全図
PLAN 7	第4次 第3・4トレンチ全図
PLAN 8	第5次 調査地全図
PLAN 9	第5次 第1トレンチ全図
PLAN 10	第5次 第2・3トレンチ全図
PLAN 11	第5次 第4トレンチ全図
PLAN 12	第6次 調査地全図
PLAN 13	第7次 調査地全図

土層図目次

SECTION 1	第3次 土層図
SECTION 2	第4次 土層図 (1)
SECTION 3	第4次 土層図 (2)
SECTION 4	第6次 土層図

遺物実測図目次

ARTIFACT 1	軒丸瓦 1
ARTIFACT 2	軒丸瓦 2
ARTIFACT 3	軒平瓦 1
ARTIFACT 4	軒平瓦 2・鬼瓦 1
ARTIFACT 5	鬼瓦 2
ARTIFACT 6	平瓦 1

ARTIFACT	7	平	瓦	2
ARTIFACT	8	平	瓦	3
ARTIFACT	9	平	瓦	4
ARTIFACT	10	平	瓦	5
ARTIFACT	11	平	瓦	6
ARTIFACT	12	平	瓦	7
ARTIFACT	13	丸	瓦	1
ARTIFACT	14	丸	瓦	2
ARTIFACT	15	土	器	1
ARTIFACT	16	土	器	2
ARTIFACT	17	土	器	3

写真目次

PL. 1	大鳳寺付近航空写真 (昭和57年)
PL. 2	遠景 (1)宇治川と宇治市東部の丘陵 (西北から)
	(2)宇治川と宇治市東部の丘陵 (西南から)
PL. 3	近景 (1)南西から (昭和46年)
	(2)西から (昭和57年)
PL. 4	第3次 (1)調査前 (北から)
	(2)調査後 (北から)
PL. 5	第3次 (1)SD 301 検出状況 (北から)
	(2)SD 301 完掘状況 (北から)
PL. 6	第3次 (1)調査地南部 (北から)
	(2)調査地東拡張部瓦出土状況 (西から)
PL. 7	第3次 (1)調査地西拡張部 (東から)
	(2)SK 329 (南から)
PL. 8	第3次 (1)SD 301 土層 (南から)
	(2)調査地西拡張部土層 (南から)
PL. 9	第4次 (1)調査前 (西から)
	(2)調査後 (西から)
PL. 10	第4次 (1)第1トレンチ全景 (東から)
	(2)第1トレンチ SD 402 西端部 (北から)
PL. 11	第4次 (1)第2トレンチ遺構検出状況 (東から)
	(2)第2トレンチ南拡張部 SD 301 (南から)
PL. 12	第4次 (1)第2トレンチ東西部 (西から)
	(2)第2トレンチ南北部 (南から)
PL. 13	第4次 (1)第2トレンチ SD 402 上層 (北東から)
	(2)第2トレンチ SD 402 完掘状況 (北東から)
PL. 14	第4次 (1)第2トレンチ SK 401・SD 402・SD 404・SX 410・
	SK 411 (東から)
	(2)第2トレンチ SK 411 上層の土器 (南から)
PL. 15	第4次 (1)第3トレンチ全景 (西から)
	(2)第4トレンチ全景 (北から)

- PL. 16 第4次 (1)第4トレンチ SD 407 (東から)
 (2)第4トレンチ SD 407 土層 (東から)
- PL. 17 第5次 (1)第1トレンチ調査前 (西から)
 (2)第1トレンチ瓦の出土状況 (西から)
- PL. 18 第5次 第1トレンチ全景 (西から)
- PL. 19 第5次 (1)第1トレンチ SB 501〔金堂〕南辺 (西から)
 (2)第1トレンチ SB 501〔金堂〕南辺 (東から)
- PL. 20 第5次 (1)第1トレンチ SB 501南辺下成基壇東側 (南から)
 (2)第1トレンチ SB 501南辺下成基壇西側(南から)
- PL. 21 第5次 (1)第1トレンチ SB 501階段検出状況 (西から)
 (2)第1トレンチ SB 501階段完掘状況 (南から)
- PL. 22 第5次 (1)第1トレンチ SB 501南西端 (西から)
 (2)第1トレンチ SB 501南辺瓦積状況 (南から)
- PL. 23 第5次 (1)第2トレンチ全景 (西から)
 (2)第2トレンチ SB 501西辺瓦積 (西から)
- PL. 24 第5次 (1)第3トレンチ SB 501西辺瓦積 (西から)
 (2)第3トレンチ南壁土層 (北から)
- PL. 25 第5次 (1)第4トレンチ SB 501北辺検出状況 (北から)
 (2)第4トレンチ SB 501北辺瓦積 (北から)
- PL. 26 第5次 (1)第4トレンチ SB 501北辺下成基壇 (南から)
 (2)第4トレンチ SB 501北辺の断面 (西から)
- PL. 27 第6次 (1)調査前 (北から)
 (2)調査前 (南東から)
- PL. 28 第6次 (1)第1トレンチ全景 (西から)
 (2)第2トレンチ全景 (西から)
- PL. 29 第6次 (1)第4トレンチ SX 601 (東から)
 (2)第4トレンチ SX 601 (北から)
- PL. 30 第6次 (1)第5トレンチ SX 601 (北西から)
 (2)第5トレンチ SX 601 (南から)
- PL. 31 第7次 (1)調査前 (西から)
 (2)第2トレンチ瓦・礫の出土状況 (北から)
- PL. 32 第7次 (1)第1トレンチ (北から)

- (2)第1トレンチ (南から)
- PL. 33 第7次 (1)第1トレンチ東壁土層 (西から)
- (2)第1トレンチ東壁南端土層 (西から)
- PL. 34 第1次 (1)調査地 (昭和46年)
- (2)瓦積基壇 (SB 501 西辺)
- PL. 35 軒丸瓦1 (NM 01)
- PL. 36 軒丸瓦2 (NM 02, NM 03, NM 05, NM 06, NM 07)
- PL. 38 軒丸瓦2 (NH 01)
- PL. 39 鬼瓦・文字瓦 (文字瓦, OG 01, OG 02)
- PL. 40 第1次発掘調査出軒丸瓦 (1)NM 04
- (2)NM 01
- PL. 41 平瓦1 (1)平瓦 A
- (2)平瓦 A (隅切瓦)
- (3)平瓦 C
- PL. 42 平瓦2 (1)平瓦 A
- (2)平瓦 A
- PL. 43 平瓦3 (1)平瓦 Ba
- (2)平瓦 Bb
- PL. 44 丸瓦 (1)丸瓦 A
- (2)丸瓦 A
- PL. 45 土器1 (SD 402, SD 404, 寺域北部地区, SK 401, 金堂, SK 411)
- PL. 46 土器2 (1)寺域北部地区, SD 301
- (2)SK 401, SD 402, 寺域北部地区
- PL. 47 土器3 (1)SK 411
- (2)寺域南部地区, 金堂
- PL. 48 土器4 (1)寺域北部地区, 金堂
- (2)寺域北部地区, SD 402, SD 301, 金堂

大鳳寺跡発掘調査報告

第I章 大鳳寺跡の環境

第1節 地理的・歴史的環境

(大鳳寺の由来)

大鳳寺跡は、宇治市菟道西中を中心に広がる白鳳時代に建立された寺院跡である。当寺跡が「大鳳寺」と呼称されるのは、この付近が江戸時代には大鳳寺村と呼ばれ、その村名もかつてここに存在した寺名に由来するとされる伝承による。この大鳳寺村は、維新後間もない明治8年(1875)に隣接していた三室村と合併し菟道村となり、その村名を終えている。しかし、現在でも菟道西中一帯を通称「大鳳寺」と呼んでいる。

「大鳳寺村」が文献の中で最も古く確認できるのは、現在、天正13年(1585)の豊臣秀吉の朱印状の中に記載されるものである。また、『東寺文書』の中に仁平2年(1152)3月日付の「東寺御影供菓子支配状」の中に「大鳳寺」の寺名が認められ、これが宇治市の大鳳寺跡の事を記録したものである可能性が指摘されている。いずれにしろ、文献的には現在我々が遺跡名称として用いる「大鳳寺跡」が、当時の寺名と合致するか否かは証明できない。しかし、文化年間(1804~1817)に、このあたりを開墾した農夫が大鳳寺の名を刻んだ文字瓦を掘り出したという伝承と、上述した状況からは、当遺跡が「大鳳寺」の跡である可能性が十分に予測できるのであり、遺跡名称として、当面、「大鳳寺跡」を用いることに不都合はないと考える。

(地理的環境)

宇治市は、琵琶湖にその源を発する宇治川によって市域を大きく東西に2分されている。宇治川より西側を宇治市西部、東側を宇治市東部と呼び、大鳳寺跡はこの宇治市東部に含まれる。宇治市西部には低丘陵や台地がよく発達しているのに比べ、宇治市東部には標高300m級の山々が連なっており、対照をなしている。

宇治川は、現在、宇治市東部の丘陵ぞいを南東から北西に流れている。このような流路を決定したのは豊臣秀吉である。織田信長の本能寺憤死後、天下人となった豊臣秀吉は、伏見城(京都市伏見区)の築城を開始し、同時に宇治川に太閤堤と呼ばれる大堤を築いたのである。それ以前は、宇治川は、山間部より平野部に流れ出ると直ちに巨椋池と呼ばれる巨大な淡水湖に注ぎ込んでいた。

巨椋池は、山城の大池とも呼ばれ、昭和16年の干拓完了まで存在した。その範囲は、北は京都市伏見区、西は淀、東は現在の宇治川、南は宇治市西部の丘陵下段に及び、周囲16km

第I章 大鳳寺跡の環境

の巨大なものであった。宇治市西部の槇島町・小倉町などの水田・宅地の大部分は、巨椋池の干拓により出現したのである。

したがって、大鳳寺跡の所在する宇治市東部は、巨椋池東岸部とも呼べるのであり、その生活の主要舞台は、巨椋池と東部丘陵との間に形成された標高20～50m程の洪積段丘と、これを被う扇状地となっている。

大鳳寺跡の所在する菟道地区は、巨椋池東岸部の南端にあたり、東部丘陵より流れ出る戦川・大谷川・大鳳寺川によって形成された扇状地を中心に集落・田畑が展開している。この付近の標高は20～30mで、東から西に向かって低くなっている。

大鳳寺跡は、菟道地区の北西部に所在し、小字は西中である。西中の範囲は、南北約200m、東西約100mの長方形であり、四周を道が走っている。地形的には、東北から西南に向けて低くなっており、東北部で標高33m程、西南部で標高26m程である。このように東北に高くなるのは、西中が東側より張り出している標高50m程の丘陵の南端部にあたるためである。西中の現在の土地利用状況は、東側字界の南北道路沿いと、南・北側字界道路沿いに民家があり、他の部分は畑・栗畑・竹林となっている。民家は、それぞれ土盛りによって、平坦地を確保しており、民家周囲では旧地形を判別し難い。後述する金堂基壇は、北半分が竹林、南半分が畑となっている。基壇部分は現状でも周囲より0.5～1m程高い。しかし、他の諸堂については、現地形よりその位置を判別することはできない。

（歴史的環境）

菟道地区は、旧山城国宇治郡宇治郷にあたる。宇治郡は、京都市の山科盆地（山科区・伏見区）と宇治市の宇治川東岸部を含んでおり、菟道地区（宇治郷）はこの最南端である。では、宇治川東岸部の縄文から奈良時代までの歴史を遺跡を中心に概観しよう。

現在、このあたりで最古のものは、隼上り古墳群（Fig 1—13）の3号墳近くから出土した縄文土器片と石槍^{文55}であり早期まで遡る。縄文晩期では、寺界道遺跡（Fig 1—4）から2基の貯蔵穴と土器・石器が発見されている。弥生時代の遺跡は羽戸山遺跡（Fig 1—11）^{文40}がある。後期の高地性集落である。縄文・弥生時代については、近年、このような遺跡が発見・調査されているものの、まだこの時代の様相を理解するには程遠く、多くを今後の調査に期待せねばならない状況にある。

古墳時代についても、まだ今後の調査により明らかとしなければならない点が多い。しかし、今に残る古墳からその様相は概ね理解できる。現在、最も古い古墳は二子山古墳（Fig 1—17）である。宇治橋の東側の丘陵頂に2基が南北につらなっているものであり、北側を北墳、南側を南墳という。北墳は直径42mの円墳で、鏡・三角板革綴衝角付冑・長方板革綴短甲など豊富な金属製品が出土している。南墳は一辺36mの方墳で、鏡・三環鈴を始め、鉾

留式の短甲・衝角付冑、多量の武器を出土している。時期的には前者が中期前葉、後者が中期後葉である。後期初頭では二子塚古墳 (Fig1-3) がある。推定される墳丘の全長が105mの前方後円墳で、二重の周壕を備えている。この時期では京都府下最大の古墳である。直径30mの円墳である瓦塚古墳 (Fig1-7) もほぼ同じ時期である。二子塚古墳の東側の丘陵上に木幡古墳群 (Fig1-2) がある。現在、宮内庁が宇治陵として管理している。ここには、総数120基の円墳が密集している。かつては二百数十基だとい^{文55・59・60}う。山城地方最大の後期群集墳である。後期群集墳で内容が明らかなものに隼上り古墳群 (Fig1-13) がある。3基の横

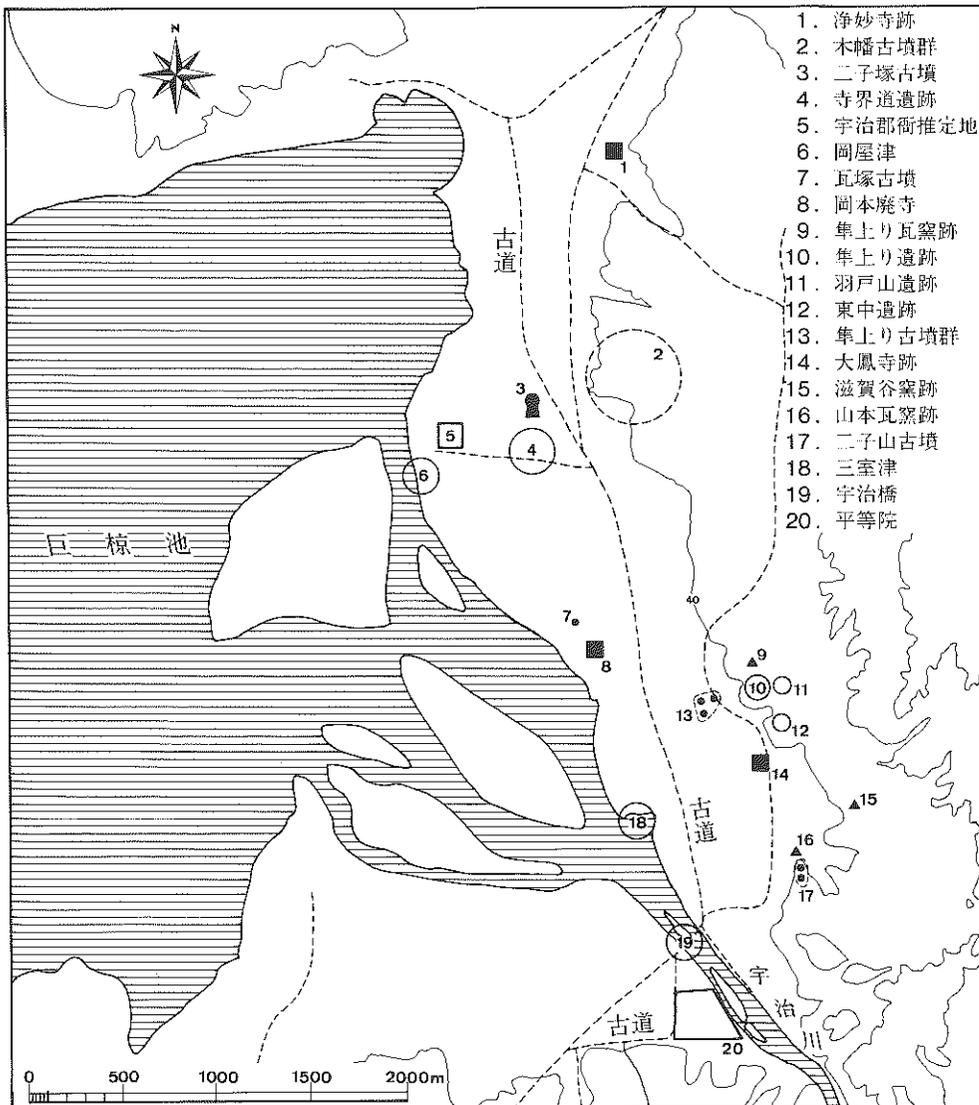


Fig 1 原始・古代の景観と遺跡

第I章 大鳳寺跡の環境

穴式石室墳からなり、墳形は円墳である。年代的には6世紀後半から7世紀前半である。遺物で注目されるものに、1号墳より出土した須恵器の特殊扁壺がある。古墳時代で宇治に關係する伝承に菟道稚郎子伝承がある。『記・紀』によれば、彼は仁徳天皇の弟であり、宇治に宮を造り住んでいたとされる。現在、菟道稚郎子墓は宇治橋の北側に宮内庁が比定している陵墓があるが、その内容は不明である。今後、この伝承の背景を考古学的に追究する必要がある。

飛鳥時代の遺跡として注目されるものに隼上り瓦窯跡 (Fig 1-9) ^{文44}がある。4基の瓦陶兼業窯と付属工房が発見されている。豊浦寺の創建瓦窯である。昭和61年6月9日付で国の史跡に指定された。隼上り瓦窯跡の南側に広がる隼上り遺跡 (Fig 1-10) ^{文44・56}は、飛鳥時代から奈良時代を中心とする集落跡である。出土遺物や地形的な状況より隼上り瓦窯跡や大鳳寺跡と關係の深い遺跡と考えられている。

白鳳時代では、ここに報告する大鳳寺跡の創建瓦窯である山本瓦窯跡 (Fig 1-16) ^{文1}がまず挙げられる。大鳳寺跡の南約500mの丘陵斜面に位置し、全長5m程の有階有段地下式の登窯である。白鳳時代寺院では、岡本廃寺 (Fig 1-8)がある。大鳳寺跡の北西約1kmのところであり、宇治郡岡屋郷域内である。瓦積基壇の金堂、掘立柱建物の構堂などが見つかり、法隆寺式伽藍配置が推定される。出土した瓦は、創建瓦が法隆寺西院式の系譜を引くものと川原寺式の系譜を引くものの2者である。しかし、大鳳寺跡とは瓦には直接的な關係は認められない。集落跡では先述の隼上り遺跡の他に東中遺跡 (Fig 1-12)が大鳳寺跡周囲の遺跡としてあげられる。寺の北東300mの低丘陵上に位置し、白鳳時代から平安時代にかけての住居跡が見つかる。また、大鳳寺南側の平野部分でも須恵器片が散見でき、集落の存在が予測できる。現在、宇治市では大鳳寺周辺が最も遺跡密度の高いところとなっている。これは、近年、大型の開発がこの地域を中心に行なわれているために事前調査によって次々に新しい遺跡が見つかる状況もあるが、現状から考えて、かつてはこのあたりが巨椋池東岸部での一つの中心的地域であったことは十分に予測できる。

なぜこのあたりが一つの中心的地域となりえたのか。この問いには地の利がまず挙げられる。交通の要衝という点である。現在、宇治東内の橋寺に「宇治橋断碑」(重要文化財)と呼ばれる石碑の一部が残っている。これによれば、宇治橋 (Fig 1-19)が架設されたのは大化2年(646)であり、古代北陸道はここで宇治川を渡っていた。また、「宮柱太しきいまし」と歌われた藤原宮・平城宮の用材は、近江から宇治川を経て巨椋池に集積され、木津川を南下して大和へ運ばれた。この水運に係わる港として宇治津・三室津 (Fig 1-18)・岡屋津 (Fig 1-6)があったことは「正倉院文書」等によって明らかである。このような地理的・歴史的環境の中で大鳳寺は建てられたのである。

第2節 第1次・第2次発掘調査

昭和57年度より本市教育委員会が5年計画で大鳳寺跡の発掘調査を実施する前に、当寺跡については、2回の発掘調査が行なわれている。最初が昭和46年に宇治市史編纂委員会によって行なわれたものであり、2回目が大鳳寺跡発掘調査会によって行なわれた。本書では、前者を第1次発掘調査と呼び後者を第2次発掘調査と呼ぶ。

(第1次発掘調査)

宇治市史編纂に伴い、昭和46年に発掘調査が実施された。当寺跡にとっては初めての発掘調査であり、その成果は『宇治市史 第1巻^{文17}』に収録されている。

発掘調査されたところは、後に金堂跡と判明したところである。当時は茶畑となっており「茶畑の中央部で約90cmの高低差がみられた」〔『宇治市史 第1巻』P.394〕部分に計10本の試掘溝（以下、トレンチという）を設定している（Fig 2）。この調査で瓦積基壇の一部を確認し、『宇治市史 第1巻』では次のように報告している。

「この瓦積基壇は南北方向を向き、建造物基壇の西辺の一部であることが判明した。基壇の大きさを求めるために北辺・南辺および東辺を探查した結果、基壇の一辺の大きさは15m

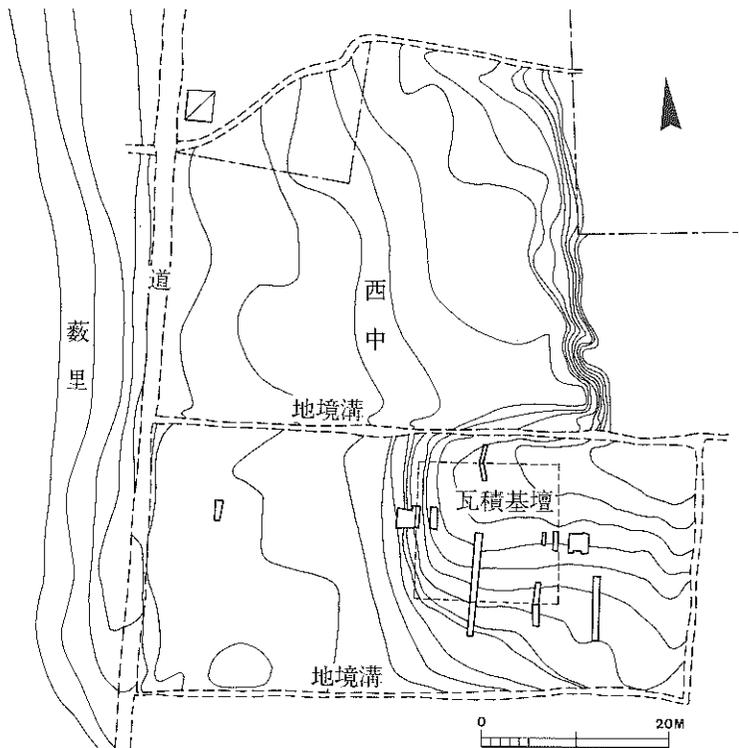


Fig 2 第1次発掘調査地点（昭和46年当時）

第I章 大鳳寺跡の環境

前後のものであり、その大きさからみて、この建物跡は金堂・講堂の類でなくむしろ塔跡とみるのが妥当と考えられた」〔P.394～395〕。

13年後の第5次発掘調査において、この見解は金堂跡と修正することとなったが、当時の調査が茶の木を避けながらの制約があったことを考えれば、最初の調査において効果的に中心建物を検出し、後の調査のきっかけを作ったものとしての意義は大きい。

この時出土した遺物は、瓦を始め須恵器や鉄釘等がある。軒丸瓦の形式は本書のいう NM01 と NM04 であり、前者が圧倒的に多い。須恵器では浄瓶や杯がみとめられる。瓦の検討より当寺跡が白鳳時代に建立され、奈良時代に改修が行なわれていることを導き出せたのも第1次調査の大きな成果の一つであった。

(第2次発掘調査)

昭和54年に宇治高等学校のグラウンド造成に先立ち、発掘調査が行なわれた。調査された地番は、菟道藪里である。第1次発掘調査地点の西側を南北に走る道がある。この道は、字西中と字藪里を分ける字界となっている。第2次発掘調査は、道の西側で道に直行してトレンチが設定された。調査の結果は、地表下0.3～0.5mのところでは山らしい土層にあたり、その直上より多くの瓦が出土した。明確な遺構は見つかっていない。出土した軒丸瓦は本書でいう NM01 ばかりである。

現在、グラウンドとなった藪里地区の旧地形は、標高25～26m程でゆるやかに南へ低くなる平坦地であった。寺跡の存在する西中とは、字界の南北道と平行するゆるやかな段によって画されており、西中より3～4m程低い。

結果的には、字界の南北道が寺域西限と概ね合うため、第2次発掘調査地点は寺域外となる。しかし、調査により出土したり、散乱していた瓦の量を考えると、ここに何らかの寺域外施設が存在した可能性を否定できない。

本書では、上記2調査について適宜その成果にふれるのみであり、本書が報告する成果は第3次から第7次調査のものである。

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 概 要

ここに報告する大鳳寺跡第3次発掘調査から第7次発掘調査は、本市教育委員会が国の国宝重要文化財等保存整備費補助金と京都府の文化財緊急保存費補助金の交付を受け、昭和57年度より昭和61年度までの5年間で実施したものである。

昭和55年頃より、当寺跡周辺は京滋バイパスを始めとし大型の宅地開発などの計画が相次いでなされた。本市教育委員会では、このような状況の中で緊急に当寺跡の範囲と内容を確認する調査を実施し、その保護のための基礎資料を収集すべきであるとの判断を行なったのである。京都府教育委員会の指導をえる中で、基礎資料を収集するための最少限度の発掘調査を5年計画で行ない、本市教育委員会の直営事業とする調査計画を立案した。また、発掘調査回数については、過去の調査を含め数えることとした。したがって、本発掘調査は第3次より始まることとなる。

(第3次発掘調査)

昭和57年8月11日より同年9月18日まで^{文45}発掘調査を実施した。調査地は菟道西中10-1である。総事業費2,000,000円。

調査地は、第1次発掘調査地の北約40m地点である。現状は栗畑。大鳳寺跡の範囲については、着手時点では考古学的な手懸かりはなかった。しかし、四周を道で囲まれた字西中地区が東西約100m、南北約200mの長方形をなしており、近年の中ではこの地区が大きな改変を受けていない事から、現在の字界が寺の地割を反映している可能性が考えられた。この推定をもとに、まず寺域北限ないしは北部堂宇を求めて調査区を設定したのである。検出した遺構は、南北溝SD301と土壌、柱穴である。これらの遺構が切り込まれていた土層は、黄褐色粘質土ないしは暗褐色混礫土である。表土下約1mのところ検出している。この土層には遺物が認められず、埋土に多量の瓦を含むSD301が切り込んでいることから考えて、この層位が寺院造営に伴う整地層であると判断された。

遺物は、瓦を中心に土師器・須恵器・瓦器・緑釉陶器などがある。瓦の多くは、包含層より出土したもので、遺構内よりまとめて出土したものは前述のSD301だけである。

(第4次発掘調査)

昭和58年11月24日より昭和59年3月7日まで^{文52}発掘調査を実施した。調査地は菟道西中10-1である。総事業費は3,000,000円。

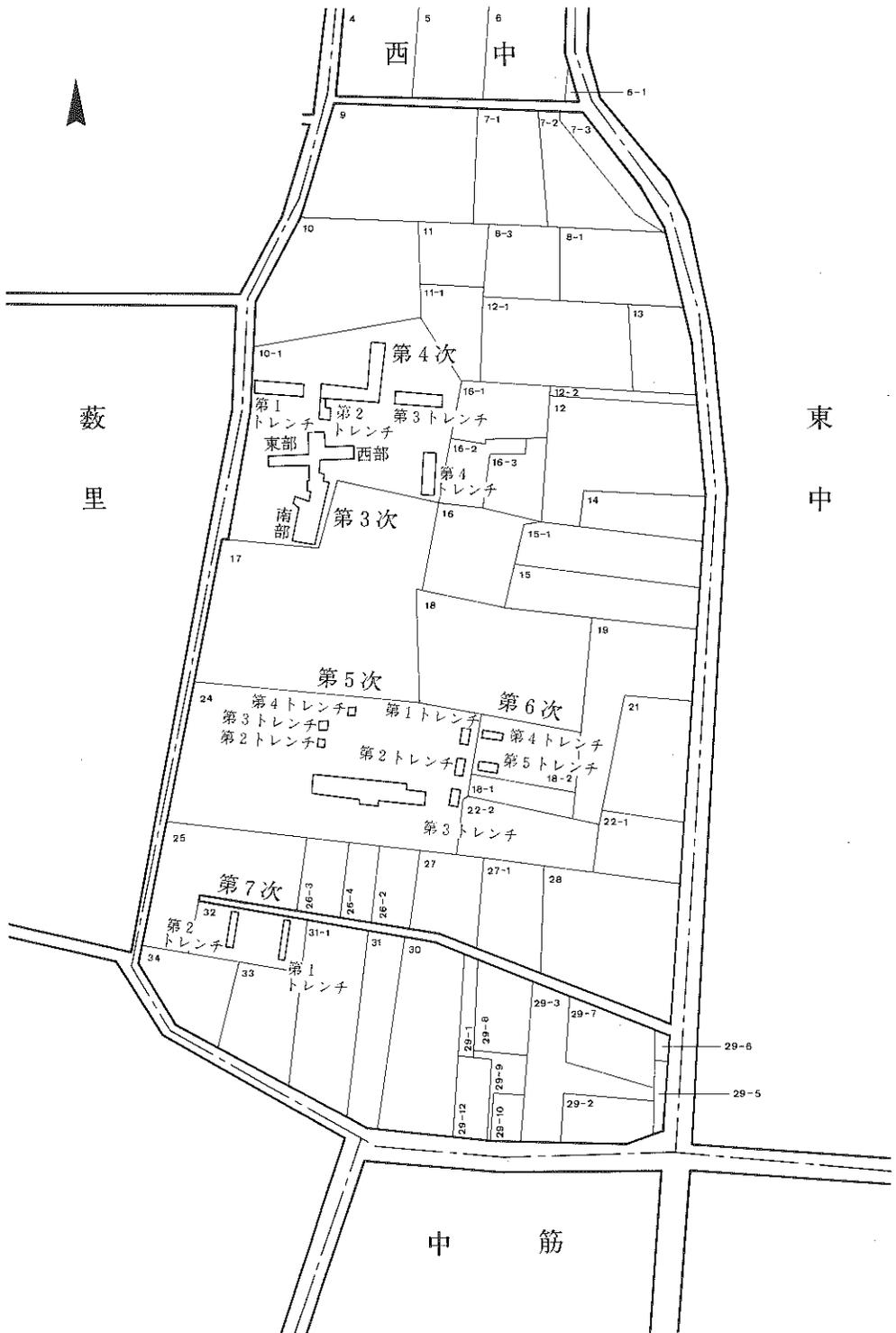


Fig 3 西中の地割りと調査地略図

調査地は、第3次発掘調査の北側部分である。現況は栗畑。寺域の北限の発見と前回検出したSD 301の続きの確認を目的とした。トレンチは、第1～第4トレンチの4箇所を設定した。第2トレンチの南北部分で東西溝SD 402の幅を確認し、第1トレンチと第2トレンチ東西部でこの溝の南肩を検出した。また、第1トレンチ西端部では、SD 402が藪里との字界道路にそって南に屈曲するコーナーの一部を検出した。SD 402が寺院建立時の整地層を掘り込んでいること、この溝の北側では遺構・遺物があまりみつからないこと、埋土の中から瓦が出土することなどから、寺域の北限ないし西限を画する遺構と判断した。SD 301の延長部については、第2トレンチの拡張部でその一部を確認した。第3トレンチでは近世の土壌SK 403を、第4トレンチでは礫を埋土とした東西溝SD 407を検出した。

遺物は、瓦を中心に土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・彩釉陶器などがある。瓦の多くは第2トレンチの土壌SK 401と、第2トレンチの整地層上面より出土した。

(第5次発掘調査)

昭和59年7月23日より同年10月19日まで発掘調査^{文58}を実施した。調査地は菟道西中24番地である。総事業費3,000,000円。

調査は、第1次発掘調査で確認されている瓦積基壇(推定塔跡とされるもの)を再び発掘調査し、その詳細な規模・構造を把握し寺域北・西限との関係や伽藍配置に一定の見通しを立てることを目的とした。現状は、瓦積基壇の南辺部分が茶畑でその北側は竹林である。トレンチは、瓦積基壇の東西全長を検出するための第1トレンチと基壇西辺を確認するための第2・3トレンチ、北辺を確認するための第4トレンチを設定した。調査の結果、この瓦積基壇(SB 501)は金堂であることが確認できた。南・北辺に下成基壇を付設する珍しい構造である。これにより当寺跡の伽藍配置は、中門の左手に金堂、右手に塔を持つ法起寺式の可能性が高まった。

遺物は、瓦を中心に土師器・須恵器・瓦器・彩釉陶器・鉄釘などがある。瓦は基壇周囲より多量に出土した。

(第6次発掘調査)

昭和61年2月1日より同年3月27日まで発掘調査^{文63}を実施した。調査地は菟道西中18-1・2と22-2・24番地である。総事業費3,000,000円。

調査は、金堂の西側に塔が存在するか否かを目的とする発掘調査と調査地付近の広範囲な平板測量とを行なった。トレンチは第1～第5トレンチの5箇所を設定した。この中で第4トレンチと第5トレンチで基壇状の高まりの西辺の一部を確認した。この基壇状遺構(SX 601)が塔基壇であるか否かは未確認。近世において大きく改変を受けている。しかし、状況的には、SX 601が塔基壇の一部である可能性は高いと判断される。

第Ⅱ章 発掘調査経過

出土遺物は、瓦を始め須恵器・瓦器・近世陶器がある。量はいずれも少ない。

(第7次発掘調査)

昭和61年11月1日より同年12月25日まで発掘調査を実施した。調査地は菟道西中32番地である。総事業費3,000,000円。

5年計画の最終年度にあたり、本書の作成と寺城南限の発掘調査を実施した。調査地は金堂の南側約30m地点である。トレンチは、第1および第2トレンチの2箇所を設定した。両トレンチで東西溝SD702と東西溝SD703を検出した。この溝は寺院の整地層を掘り込んでおり、かつ寺城北限の溝SD402から1町南ではほぼ平行しているため、南限の築地側溝と判断した。したがって、過去の調査成果を総合し大鳳寺跡の寺域と伽藍配置を復元するならば、寺域は、南北1町、東西1町(推定)、法起寺式の伽藍配置と考えられる。

遺物は、瓦を始め土師器・須恵器などがある。量はいずれも少ない。

第2節 調査組織

第3次発掘調査から第7次発掘調査の調査組織は以下のとおりである。

(第3次発掘調査)

調査責任者	宇治市教育委員会 教育長	岩本昭造
調査指導者	近畿大学 教授	杉山信三
	奈良国立文化財研究所 主任研究官	西村康
	京都府立城南高等学校 教諭	山田良三
	京都府教育庁文化財保護課 記念物係長	中谷雅治
調査担当者	宇治市教育委員会 文化財調査員	杉本宏
調査事務局	宇治市教育委員会 社会教育課 課長	小林巧
	同 文化係長	伊藤忠正
	同 主事	吉水利明
	同 主事	長谷川暁子
調査補助員	村川俊明・松岡宏高・義則敏彦・谷浦健史・牧野秀哉・安藤剛・道之前好隆・横田明・米浪哲也・杉本旭・山本リサ子・打本尚子 中村恵・田口直美	

(第4次発掘調査)

調査責任者	宇治市教育委員会 教育長	岩本昭造
調査指導者	元近畿大学 教授	杉山信三
	京都府立城南高等学校 教諭	山田良三

	京都府教育庁文化財保護課 記念物係長	中 谷 雅 治
調査担当者	宇治市教育委員会 社会教育課 主事	杉 本 宏
調査事務局	宇治市教育委員会 社会教育課 課長	小 林 巧
	同 文化係長	伊 藤 忠 正
	同 主事	吉 水 利 明
	同 主事	小 西 弘 子
調査補助員	奥田耕三・猿向敏一・田中 康・佐原 耕・岩本俊也・上田和弘・ 上村和也・岸本弘司郎・安川優子・小幡倫子・宝壁恭子・藤井弘美	

(第5次発掘調査)

調査責任者	宇治市教育委員会 教育長	岩 本 昭 造
調査指導者	元近畿大学 教授	杉 山 信 三
	奈良国立文化財研究所 研究官	上 原 真 人
	京都府立桃山高等学校 教頭	山 田 良 三
	京都府教育庁文化財保護課 記念物係長	中 谷 雅 治
調査担当者	宇治市教育委員会 社会教育課 主事	杉 本 宏
調査事務局	宇治市教育委員会 参事	木 村 光 長
	同 社会教育課 課長	小 林 巧
	同 文化係長	伊 藤 忠 正
	同 主事	吉 水 利 明
	同 主事	小 西 弘 子
調査補助員	奥田耕三・猿向敏一・佐原 耕・岩本俊也・岸本弘司郎・上村和也・ 樋口秀一・鐘方正樹・成清利彦・宝壁恭子・中尾由香里・森武美貴・ 武内 忠	

(第6次発掘調査)

調査責任者	宇治市教育委員会 教育長	岩 本 昭 造
調査指導者	元近畿大学 教授	杉 山 信 三
	京都府教育庁文化財保護課 記念物係長	中 谷 雅 治
調査担当者	宇治市教育委員会 社会教育課 主事	杉 本 宏
調査事務局	宇治市教育委員会 参事	木 村 光 長
	同 社会教育課 課長	小 林 巧
	同 文化係長	吉 水 利 明
	同 主事	梅 田 正 人

第Ⅱ章 発掘調査経過

	同	主事	小西弘子
調査補佐員	奥田耕三（京都産業大学卒業生）・猿向敏一（仏教大学卒業生）		
調査補助員	佐原 耕・岸本弘司郎・上村和也・樋口秀一・鐘方正樹・成清利彦・坂野喜之・元川康司・中尾由香里・古川小百合・藤田訓子・野寄奈津子・堀 美津代		

（第7次発掘調査）

調査責任者	宇治市教育委員会 教育長		岩本昭造
調査指導者	元近畿大学 教授		杉山信三
	京都府埋蔵文化財調査研究センター 調査課長		中谷雅治
	京都府教育庁文化財保護課 記念物係長		金村允人
調査担当者	宇治市教育委員会 社会教育課 主事		杉本宏
	同	嘱託	猿向敏一
調査事務局	宇治市教育委員会	参事	木村光長
	同 社会教育課 課長		小山豊嗣
	同	文化係長	吉水利明
	同	主事	梅田正人
	同	主事	小西弘子
調査補助員	樋口秀一・上村和也・元川康司・岸本展史・八瀬正雄・古川小百合・中尾由香里・住田ゆかり・堀 美津代・北村祥子・岡本真由美		

また、調査にあたっては、奈良国立文化財研究所および京都府教育委員会の指導をえるとともに、土地所有者の梅林弘一氏・久保見勇氏・長谷川庄三氏・西村裕司氏のご協力をいただいた。記して感謝する。

5年間の調査期間中に下記の方々よりご指導・ご教示を賜った。感謝申し上げる。

田中 琢・佐原 眞・宮本長二郎・山本忠尚・西村 康・金子裕司・田辺征夫・上原真人・岩永省三（奈良国立文化財研究所）、森 郁夫（京都国立博物館）、堤 圭三郎・平良泰久・奥村清一郎（京都府教育委員会）、高橋美久二・橋本清一（京都府立山城郷土資料館）、杉原和雄・松井忠春・小池 寛・荒川 史（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、木村捷三郎・江谷 寛（京都市埋蔵文化財研究所）、植山 茂（京都文化財団）、五十川伸矢・菱田哲郎（京都大学埋蔵文化財センター）、星野猷二（伏見城研究会）、近藤義行（城陽市教育委員会）、中島 正（山城町教育委員会）、村川俊明（精華町教育委員会）、常盤井智行（長野県飯山市教育委員会）、高橋猪之介、栗野 謨、横山明生〔順不同、敬称略〕。

第3節 調査日誌（抄）

第3次発掘調査（昭和57年）

8・11 調査用具の搬入、除草作業、事務所の設営を行う。トレンチ設定。写真撮影。

8・12 荒掘り開始。調査地周辺の平板測量を始める。

8・13 掘り下げ作業続行。SE 330 を検出。平板測量続行。

8・14 近世と思われる土層下に瓦片を多く含む包含層を検出。調査地周辺の平板測量終了。

8・16 降雨のなか、昨日検出の瓦片包含層まで掘り下げる。

8・17 掘り下げ作業続行。SD 301 を検出。

8・18 出土遺物の洗浄。

8・19 掘り下げ作業続行。

8・20 トレンチの清掃。SD 301 内の瓦堆積を確認。トレンチ南端を断ち割る。

8・21 トレンチ南端の断ち割り続行、地山を確認する。柵列と思われる柱穴 SA 321 を検出する。断面精査。

8・23 トレンチ床面精査。SA 323 他、ピットを数個検出する。断面精査。

8・24 床面精査。写真撮影の準備を行う。

8・25 トレンチ清掃。写真撮影を行い、断面図を作成。

8・26 トレンチを東西両方面へ拡張する。東拡張部に溝状遺構、西拡張部にピットを検出する。

8・27 トレンチ床面精査、ピットを検出する。写真撮影を行う。

8・28 東・西拡張部精査。

8・30 東・西拡張部精査続行。断面を精査し、写真撮影を行う。

8・31 東・西拡張部精査続行。平面図作成。

9・1 SD 301 を写真撮影。東・西拡張部精査、平面図作成続行。

9・2 東拡張部において瓦溜り、西拡張部でピットを検出する。平面図、断面図作成。

9・3 東拡張部遺物取り上げを行う。平面図作成続行。

9・4 SD 301 の遺物を取り上げる。西拡張部瓦溜り実測、取り上げを行う。

9・5 トレンチを清掃、写真撮影を行う。SD 301 を掘り下げる。

9・6 SD 301 掘り下げ作業続行。西拡張部を更に西へ拡張する。

9・7 SD 301 完掘。西拡張部、昨日より更に西へ拡張する。

9・8 西拡張部精査。平面図作成続行。

9・9 西拡張部、SE 330 精査。

9・10 出土遺物の洗浄。

9・11 現地説明会を実施。約50名。

9・13 SE 330 掘り下げ作業。拡張部断面図作成。

9・14 SE 330 完掘。SD 301・西拡張部の写真撮影を行う。東拡張部において根石を求めると確認できず。

9・16 杉山信三氏の指導により精査を行う。現地での調査を終了する。

9・17～18 埋め戻し作業。調査地より事務所、調査用具を撤収する。

第4次発掘調査（昭和58年）

11・24 調査開始。調査用具の点検、確認。

11・25 調査用具準備完了。

11・26 調査用具を調査地へ搬入。

11・28 事務所設営。

11・29 測量用ポイント設定。

11・30 測量用ポイント設定終了。

12・1 調査地周辺の平板測量開始。

12・2 平板測量続行。

第Ⅱ章 発掘調査経過

- 12・3 平板測量続行。
- 12・5 調査地内に基準ポイントがある為、基準ポイントを移動する。
- 12・6 基準ポイントの移動終了。竹の伐採を開始する。
- 12・7 竹の伐採終了。
- 12・8 トレンチ設定。
- 12・9 重機による掘削を開始。
- 12・10 重機による掘削終了。
- 12・12 第1トレンチ断面精査。
- 12・13 第2トレンチ床面精査。
- 12・14 第2トレンチ床面、断面精査。
- 12・15 第2トレンチ床面精査。瓦、礫溜りを検出する。
- 12・16 前日検出の瓦、礫溜りを追求する。ピット検出。
- 12・17 出土遺物の整理。
- 12・19 第3トレンチ断面精査。
- 12・20 第2トレンチ瓦、礫溜りの写真撮影、取り上げを行う。第3トレンチ床面、断面精査。
- 12・21 第2トレンチ床面精査。第3トレンチ掘り下げ作業開始。
- 12・22 出土遺物の整理。
- 12・23 第2トレンチ写真撮影、遺物の取り上げを行う。第3トレンチ掘り下げ作業続行。
- 12・24 調査計画協議。
- 12・26 第2・第3トレンチ床面精査。
- 12・27 越年の為、調査地の安全確保作業を行い、調査用具を撤収する。
- 1・5 調査用具の搬入、調査地の整理を行う。
- 1・6 除雪作業。第2トレンチ床面精査続行。トレンチ西端を断ち割る。
- 1・7 第2トレンチ床面精査続行。
- 1・9 第2トレンチ床面精査。12月16日検出の瓦、礫溜りが遺構でないことを確認。溝状遺構SD 402を検出する。
- 1・10 第2トレンチ SD 402の精査。
- 1・11 出土遺物の洗浄。
- 1・12 第2トレンチ SD 402を掘り下げ、精査する。
- 1・13 第2トレンチ SD 402の掘り下げ作業終了。
- 1・14 第1トレンチ掘り下げ作業開始。
- 1・17 第1トレンチ掘り下げ作業続行。
- 1・18 第1トレンチ床面精査。第2トレンチ検出SD 402の続きを確認。
- 1・19 降雪の為、作業断念。
- 1・20 第1トレンチ SD 402完掘。トレンチを西方へ拡張する。
- 1・21 第1トレンチ拡張部精査。SD 402が南へ折れる事を確認。午後より降雪の為、出土遺物の洗浄。
- 1・23 第3トレンチ掘り下げ作業開始。
- 1・24 第3トレンチ床面精査。
- 1・25 第3トレンチ西端・南端を断ち割る。第2トレンチ SD 402完掘、精査を行う。
- 1・26 第1・第2トレンチ清掃。第3トレンチ西端・南端断ち割り続行。
- 1・27 第1・第2トレンチ写真撮影。第3トレンチ精査。調査地内の平板測量を行う。
- 1・28 第3トレンチ清掃、写真撮影を行う。平板測量続行。
- 1・30 平面実測の地区割りをを行う。
- 1・31 除雪作業。午後、作業断念。
- 2・1 大雪。出土遺物の整理。
- 2・2 平面実測の地区割り終了。第1トレンチ平面図、断面図作成。
- 2・3 第1トレンチ平面図、断面図作成終了。第4トレンチの荒掘りを人力で始める。
- 2・4 第2トレンチ平面図、断面図作成。第4トレンチ掘り下げ作業続行。
- 2・6 第2・第3トレンチ平面図、断面図作成。

第3節 調査日誌（抄）

- 第4トレンチ床面精査。SD 407を検出する。
- 2・7 第2・第3トレンチ平面図作成続行。第4トレンチ西端を断ち割る。
- 2・8 第2・第3トレンチ平面図作成続行。第4トレンチ精査。
- 2・9 第2トレンチ平面図、断面図作成終了。第4トレンチ清掃、写真撮影を行う。
- 2・10 第2トレンチ遺物取り上げ、精査を行う。第4トレンチ平面図作成。
- 2・13 大雪。出土遺物の洗浄。
- 2・14 第2トレンチ遺物取り上げ、精査を続行。第4トレンチ平面図、断面図作成続行。
- 2・15 第2トレンチ床面精査。ピットを検出。
- 2・16 第4トレンチ平面図、断面図作成終了。調査地周辺の平板測量。
- 2・17 大雪。作業断念。
- 2・18 除雪作業。現地説明会を実施。約80名。
- 2・20 第3次調査において検出されたSD 301を追求する為、第2トレンチの南方にトレンチを新設し、荒掘りを始める。
- 2・21 新設トレンチ掘り下げ作業続行。
- 2・22 第2トレンチ床面精査。SK 411を検出する。新設トレンチ掘り下げ作業続行。
- 2・23 第2トレンチ写真撮影、図面補足、遺物取り上げを行う。新設トレンチ床面精査、SD 301の続きを確認。
- 2・24 第2トレンチ床面精査。新設トレンチ清掃、写真撮影を行う。
- 2・27 SD 301を更に追求する為、新設トレンチを北方の第2トレンチまで拡張し、第2トレンチ拡張部とする。
- 2・28 第2トレンチ拡張部精査。SD 301の続きを検出する。
- 2・29 第2トレンチ拡張部の清掃、写真撮影を行う。
- 3・1 第2トレンチ拡張部で平面実測の地区割りを行い、平面図作成。
- 3・3 第2トレンチ拡張部平面図作成続行。午後、降雪が激しくなり調査断念。
- 3・5 第2トレンチ拡張部平面図作成終了。現地での調査を終了する。
- 3・6～7 埋め戻し作業。調査地より事務所、調査用具を撤収する。
- 第5次発掘調査（昭和59年）
- 7・23 調査開始。
- 7・24 調査準備続行。
- 7・25 基準ポイントの調査。
- 7・26 調査用具の点検、確認。
- 7・27 測量用ポイント設定。
- 7・28 測量用ポイント設定終了。
- 7・30 除草作業。調査地周辺の平板測量を始める。
- 7・31 平板測量続行。
- 8・1 事務所完成。調査用具の搬入。平板測量続行。
- 8・2 測量用ポイントを増設する。調査用具の搬入終了。
- 8・3 茶木伐採。第1トレンチにグリット設定。
- 8・4 茶木伐採。
- 8・6 茶木伐採。第1トレンチ予定地内のグリットにおいて基壇南面ライン検出。第1・第2・第3トレンチを設定。第2・第3トレンチ荒掘りを始める。
- 8・7 第2トレンチ基壇検出終了。第3トレンチ基壇上面を検出。
- 8・8 第2トレンチ写真撮影。第3トレンチ掘り下げ続行。第4トレンチを新設し、荒掘りを始める。
- 8・9 第3・第4トレンチ掘り下げ作業続行。
- 8・10 第1トレンチを重機にて掘削。第4トレンチ北辺基壇を検出。
- 8・11 第1・第4トレンチ掘り下げ続行。第3

第Ⅱ章 発掘調査経過

- トレンチ完掘。
- 8・13 第1・第4トレンチ掘り下げ作業続行。
- 8・14 第1トレンチ基壇南面検出。第4トレンチ精査。
- 8・15 第1トレンチ基壇南西コーナーを検出する。第4トレンチ完掘。
- 8・16 第1トレンチ精査。推定塔跡基壇南面が15mを越えて更に東方へと続く。塔跡説に疑問。
- 8・17 第1トレンチの精査。推定塔跡基壇南面がトレンチの東端に達する。金堂基壇の可能性がでてくる。
- 8・20 第1トレンチ精査。写真撮影。
- 8・21 台風の影響下、第1トレンチの瓦堆積の取り上げ、精査を行う。基壇より南へ90cmの地点に河原石列を検出する。
- 8・22 台風の影響下、河原石列検出の為、トレンチを南方へ拡張する。
- 8・23 第1トレンチ拡張続行。
- 8・24 第1トレンチ拡張続行。
- 8・25 第1トレンチ下成基壇（河原石列）の検出を続行する。
- 8・27 第1トレンチ下成基壇検出続行。基壇南面推定中央部付近に拳大礫を多く検出する。階段か。
- 8・28 第1トレンチ下成基壇検出続行。写真撮影を行う。
- 8・29 出土遺物の洗浄。
- 8・30 第1トレンチ下成基壇において遊離した礫、瓦の取り上げを行う。その下より階段の第1段石列が現われる。
- 8・31 階段の検出に努める。
- 9・1 測量用ポイントを新設する。
- 9・3 第1トレンチ階段部を南方へ拡張。
- 9・4 第1トレンチ階段部拡張を続行。推定金堂基壇東南コーナー検出の為、トレンチを東方へ拡張する。
- 9・5 第1トレンチ階段部拡張終了。東拡張部で基壇東南コーナーを検出。
- 9・6 第1トレンチ精査。
- 9・7 推定金堂基壇東南コーナーを確定。
- 9・8 第1トレンチ全域の清掃、遺物の取り上げを行う。
- 9・10 第1トレンチの写真撮影。
- 9・11 第1トレンチ平面実測の地区割りを行う。
- 9・12 第1トレンチ地区割り続行。
- 9・13 第1トレンチ平面図、断面図作成。
- 9・14 第1トレンチ平面図、断面図作成続行。現地説明会の準備。
- 9・15 現地説明会を実施。約200名。雨。
- 9・17 第1トレンチ平面図、断面図作成続行。
- 9・18 遺物、図面等の整理を行う。
- 9・19 第1トレンチ断面図作成続行。
- 9・20 第3・第4トレンチを断ち割る。
- 9・21 第1トレンチ断面図作成終了。第2・第3トレンチ平面図作成。第4トレンチ断ち割り、下成基壇を確認する。
- 9・22 第2・第3トレンチ平面図作成続行。
- 9・25 第1トレンチ下成基壇を断ち割り、断面図を作成。第4トレンチ断ち割り終了。清掃後、写真撮影を行う。
- 9・26 第2・第3トレンチ断面図作成。
- 9・27 第2・第3トレンチ断面図作成終了。
- 9・28 第2・第3トレンチ瓦積基壇を土嚢で保護しつつ、埋め戻しを行う。第4トレンチ北方へ拡張。下成基壇前面石列を検出する。
- 9・29 第2・第3トレンチ埋め戻し作業続行。第4トレンチ清掃、写真撮影を行う。
- 10・1 第2・第3トレンチ埋め戻し作業終了。第4トレンチ平面図、断面図作成。
- 10・2 第4トレンチ瓦積基壇を土嚢で保護しつつ、埋め戻しを行う。
- 10・3 第4トレンチ瓦積基壇を土嚢で保護しつつ

つ、埋め戻しを行う。

10・4 第1トレンチ埋め戻し作業続行。調査地周辺の平板測量。

10・5 遺物の取り上げを行う。

10・6 現地での調査終了。

10・8 出土遺物の一部搬出。

10・9～16 第1トレンチ埋め戻し作業。

10・17 調査地周辺の清掃。

10・18 基準ポイントの保全作業。

10・19 事務所、調査用具、出土遺物の撤収。

11・30～12・27 調査地全域の平板測量。

1・9～17 基準ポイントの測量。

1・18 現地での残務整理。

第6次発掘調査（昭和61年）

1・21 調査開始。

1・22 調査用具の点検、確認。

1・23 図面の整理作業。

1・24 調査計画協議。

1・28～29 既設測量用ポイントの調査。

1・30 事務所設営地の除草作業を行う。

1・31 事務所設営地の整地作業。

2・1 調査前の状況を写真撮影。

2・3 トレンチ設定。

2・4 事務所設営。調査用具を搬入。

2・5 調査用具の搬入終了。

2・6 調査地の除草作業。

2・7 除草作業終了。

2・10 第1・第2・第3トレンチ荒掘りを人力にて始める。

2・12～19 第1・第2・第3トレンチ掘り下げ作業続行。

2・20 第1・第2・第3トレンチ床面精査。

2・24 第1・第2・第3トレンチ床面、断面精査。

2・25 調査地周辺の平板測量を行う。

2・26 第1・第2・第3トレンチを清掃、写真

撮影を行う。

2・27 第1・第2・第3トレンチの断面図作成。

2・28 第3トレンチ断面図作成続行。午後降雪の為、作業を断念する。

3・3 測量用ポイント設定。第4・第5トレンチ荒掘りを人力にて始める。

3・4 測量用ポイント設定終了。第4・第5トレンチ掘り下げ続行。両トレンチで人頭大礫溜りを検出する。

3・5 第4・第5トレンチ検出礫溜りの性格を掴む為、両トレンチを東西方面へ拡張する。

3・6 第4・第5トレンチ拡張続行。

3・7 第4・第5トレンチ清掃、写真撮影。

3・10 調査地周辺の平板測量。

3・11 整理作業。

3・12 第4・第5トレンチ平面図作成。平板測量続行。

3・13 第4・第5トレンチ平面図作成終了。

3・14 整理作業。

3・17 調査地周辺の平板測量続行。

3・18 第4トレンチ南端、第5トレンチ北端の断ち割りを行う。

3・19 調査用具の一部撤収。

3・20 第4・第5トレンチ断ち割り終了。第1・第2トレンチ埋め戻し作業。

3・24 第4・第5トレンチ断面図作成。現地調査終了。

3・26～27 第3・第4・第5トレンチの埋め戻し作業。調査地より事務所、調査用具を撤収する。

3・28 現地での残務整理。

第7次発掘調査（昭和61年）

11・12 調査開始。調査用具の搬出、事務所の設営を行い、除草作業をする。トレンチを設定。

11・13 第1トレンチ人力による荒掘りを始める。

11・14 調査計画協議。

11・17～19 第1トレンチ掘り下げ作業続行。

第II章 発掘調査経過

- 11・20 第1トレンチ床面、断面精査。人頭大集石検出。
- 11・21 第1トレンチ精査続行。
- 11・25 出土遺物の洗浄。
- 11・26 第2トレンチ荒掘り開始。
- 11・27～12・2 第2トレンチ掘り下げ作業続行。
- 12・3 第2トレンチ断面精査。
- 12・4 出土遺物の整理。
- 12・5 第2トレンチ床面精査。写真撮影。
- 12・8 出土遺物の整理。
- 12・9 第2トレンチ床面精査。トレンチ西端を断ち割る。
- 12・10 第2トレンチ断ち割り続行。
- 12・11 第2トレンチ断ち割り終了。写真撮影。
- 12・12 第1トレンチ東端を断ち割る。
- 12・15 出土遺物の洗浄。
- 12・16 第1トレンチ断ち割り終了。清掃後、写真撮影を行う。
- 12・17 測量用ポイント設定。
- 12・18 測量用ポイント設定終了。
- 12・19 第1・第2トレンチ断面図作成。平板測量を行う。
- 12・22 整理作業。
- 12・23 調査地周辺の平板測量を行う。
- 12・25 第2トレンチを南方へ拡張。断面図補足。現地での調査を終了。
- 12・26 第1・第2トレンチ埋め戻し作業。事務所、調査用具の撤収。
- 1・6 現地での残務整理。



Fig 4 現地説明会風景（第4次）

以上、第3次から第7次までの現地調査の実施状況を調査日誌抄としてまとめた。調査実施時に日々記入していた日誌をもとにしているため、内容を十分に整理できていない部分がある。

また、現地調査実施中には、本章第2節に芳名を記入させていただいた調査指導の先生方を始め、多くの方々から直接現地で多くのご指導・ご教示をたまわった。本来、これらについても本節の中に記入すべきであろうが、第Ⅲ章以降にそれらのご指導・ご教示をもりこんで記述をすすめることとしたので、調査日誌抄からは割愛させていただいた。

本書の刊行に伴う編集作業は、昭和61年10月より第3次から第6次調査までの分について作業を始め、昭和62年1月より全体的な作図・トレース・編集作業を開始した。概ねの作業が終了したのは、昭和62年2月末であり、3月は補足作業を行なった。

第三章 遺 跡

第1節 遺 構

ここでは、第3次から第7次調査で検出した遺構について報告する。報告するについては、各次発掘調査を調査内容により次のように分ける。(1)寺域北部地区(第3・4次発掘調査)、(2)金堂跡(第5次発掘調査)、(3)推定塔跡(第6次発掘調査)、(4)寺域南部地区(第7次発掘調査)。寺院に関する遺構を中心に報告したい。

遺構のアルファベット記号は、奈良国立文化財研究所の分類を参照に次のようにした。SA(柵・塀・垣)、SB(建物)、SD(溝)、SE(井戸)、SG(池)、SK(土塋)、SX(性格不明)、SP(柱穴・杭跡)。遺構番号は3桁の算用数字を用いる。上1桁が発掘調査次数を表わし、下2桁がその次数の遺構検出番号を表わす。例えば、SD402は、第4次発掘調査で検出した溝の2番という遺構を表わす。

また、第3次から第6次発掘調査については、年度(次数)ごとに発掘調査概報を作成し刊行した。しかし、これらについては互に統一されていない遺構番号や見解がある。したがって本書でこれらを統一し報告する。

(1) 寺域北部地区(第3・第4次発掘調査)[PLAN5~7, SECTION1~3]

基本的な層位 この地区での基本的な土層は、大きく6層に分けられる。下から、まず黒色土ないし暗褐色土などが不均一な厚さで堆積しているものである。遺物は未発見。これを地山層と呼ぶ。その上に暗褐色混礫土層がある。この層も厚さは不均一であり遺物は出土していない。寺院関係遺構のうち、創建期に遡るものはこの土層を掘り込む。各次調査区でも検出できることから考えて創建期の整地層と考えられる。これを創建期整地層と呼ぶ。この

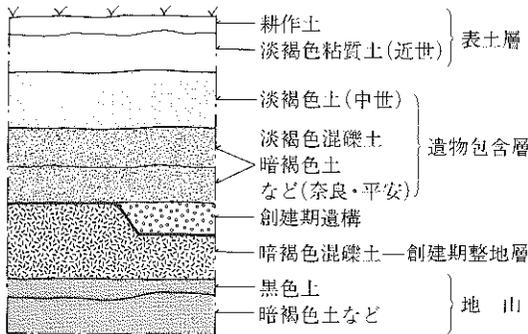


Fig 5 基本的層位略図

層の上に瓦や土器などを含む遺物包含層が厚さ0.7m程堆積している。遺物包含層は、その含む土器等の年代により2つに分層できる。下の層は淡褐色混礫土や暗褐色土で、奈良から平安時代にかけての土器を含む。上の層は淡褐色土で、中世の土器を含む。瓦は下の層に多い。下の層を奈良・平安遺物包含層とし上層を中世遺物包含層とする。遺物包含層(包

含層)と記述する場合は、上・下両層をさす。包含層の上には近世の遺物を含む淡褐色粘質土と耕作土とがある。この両層を表土とする。層の厚さ約0.3m。

SD301 X22~37区で検出した南北溝。検出長約15m、幅約0.9m、深さ約0.7m。創建期整地層から掘り込む。埋土は3層に分層できる。上層は、暗褐色粘質土であり瓦の小片を含む。中層は黄褐色砂質土であり多量の瓦を含む。下層は、茶褐色粘質土であり少量の土器を含む。中層における瓦の堆積は北ほど厚く、南端部ではあまり認められなくなる。SD402には続かない。

SB322 X46・Y41区で検出した掘立柱建物と思われるもの。規模は南北2間×東西1間以上。柱掘方は隅丸方形で、柱の径は0.15m。掘方より近世の遺物が出土。

SA321 SB322の東側で検出した柵列と思われるもの。南北2間以上。柱の間隔は1.96mと2.18m。近世。

SA323 SA321の東側で平行する柵列と思われるもの。南北2間以上。柱の間隔は3.36mと2.58m。近世。

SK324 X34・Y42区で検出した楕円形土壇。東西約1.0m、南北約0.8m。埋土は暗褐色砂質土で、上層に大きさ20cm程の河原石を含む。年代不明。

SP327 X33・Y43区のトレンチ北壁で検出した柱穴。柱掘方は東西約0.9m。柱の径は約0.2m。創建期整地層から掘り込む。

SK328 SP327の西側で検出した土壇。東西約1.5m、南北0.7m以上、深さ約0.2m。創建期整地層から掘り込む。

SK329 SK328の西側で検出した土壇。東西約0.8m、南北0.5m以上、深さ0.2m。創建期整地層と奈良・平安遺物包含層との間に部分的に形成された炭を含む黒褐色層から掘り込む。土壇の壁は固く焼け締っており、埋土は灰・炭層である。埋土内より鉄滓片数個が出土した。焼土壇。

SE330 X39・Y45区で検出した近代の井戸ないし肥溜め。径約3mの掘方内にモルタルの井筒(径約2m)がある。

SK401 X22・Y49区で検出した土壇。東西約3.2m、南北1.0m以上、深さ約0.15m。創建期整地層から掘り込む。埋土内には多量の瓦を始め、石・須恵器・土師器・多彩陶器を含む。瓦は平瓦・丸瓦ばかりであり細片である。瓦溜り。

SD402 X17ライン上で検出した東西溝。検出長約26m、幅約2.3m、深さ約0.5m。創建期整地層から掘り込んでいる。埋土は10層に分層できる。下層部分は青灰色粘質土であり、常時湧水が認められた。瓦・土器類は埋土の中程に多く認められた。ただ、埋土は一様ではなく、西側に向うほど層が少なくなる。西端部分では、上層が暗褐色砂質土であり下層

が暗褐色土の2層である。この溝は、西側で南に直角に曲がる。寺域の北限ないし西限を画する溝と思われる。

SK403 X24・Y67区で検出した大型の近世土壇。東西約4m、南北2m以上、深さ約2.3m。中世包含層を掘り込む。下層は青灰色粘土であり湧水が激しい。東肩には丸太を横にわたしその上に石を積む護岸施設がある。

SD404 SK401の西側で検出した細い南北溝。幅0.3~0.6m、深さ0.1m。SD402に取り付く。土師器が出土。

SK405 SK403西側で検出した土壇。SK403により東側が破壊されている。創建期整地層を掘り込む。

SK406 SK405西側で検出した土壇。SK405により東側が破壊されている。創建期整地層を掘り込む。

SD407 X41ライン上で検出した東西溝。幅1.0~1.5m、検出長約2m、深さ0.3m。創建期整地層を掘り込む。埋土は、拳大の河原石、角礫である。瓦が出土している。

SX410 X20・Y51区で検出した石と瓦の集積。SD402埋没後その上にたまる。50cm×35cm程の割石を中心に直径約1mの範囲に瓦や河原石がまとまっていた。掘方不明。礎石か？

SK411 SX410の東側で検出した土壇。東西約0.9m、深さ0.6m。奈良・平安遺物包含層から掘り込む。埋土は大きく2層に分かれ、上層に土器を下層に河原石が多く含まれていた。

SP419 SD407の北側で検出した柱穴。直径0.3m。

SK420 SD407の下層で検出した落ち込み。創建前の自然の起伏か。無遺物。

(2) 金堂跡(第5次発掘調査)[PLAN8~11]

SB501は、その規模から考えて金堂の基壇と考えられる。この基壇の発見は、前述したとおりに昭和46年の宇治市史編纂に伴う調査である。第5次発掘調査では、第1から第4トレンチを設定した。このうち第2トレンチは昭和46年の調査(第1次発掘調査)地点を再度掘りなおした。

基壇の遺存状況は、東側ほど悪い。これを第1トレンチで見ると、基壇南辺の西側では良く残っている所で高さ0.6m程であるのに対し、東側では0.2m程、東端角では瓦積の外装が全く残っていない。また、下成基壇の石列も西側にしか残っていなかった。第2から第4トレンチでは概して残りが良く、第4トレンチでは高さ0.9m程を測る。このように、東側ほど残りが悪いのは、基壇が東から西へゆるやかに下る地形の上に構築されているため、近世から近代の開墾による掘り返しにより東側の方が早く破損したためと思われる。基壇を覆

う基本的な土層は基壇外側とは違う。基壇上では、厚さ0.3m程の耕作土及び近世遺物を含む淡褐色粘質土の直下に基壇土を検出することができる。基壇外側では、この下に中世遺物包含層が厚さ0.3m程堆積し、その下に基壇壁や創建期整地層上に堆積する多量の瓦を包含する層が存在している。したがって、瓦は基壇外側より主に出土するのであり、基壇上では少ない。

基壇の規模と外装 基壇は、後述するように南・北辺に下成基壇を付設している。この下成基壇を含めた南北長17.8m、下成基壇を除く南北長16.1m、東西の検出長19.2m、東辺の瓦積を復元した東西長約19.5mである。

基壇の外装は、瓦を積みあげた瓦積基壇である。瓦積は、創建期整地層上面より直接積みあげられている。地覆石はない。瓦を積む場合、瓦と瓦の間に黄色粘土を置いている。また、基壇土盛部分と瓦積の間には約0.3mの間隔があり、ここにも黄色粘土が認められる。瓦の間に粘土を置きながら裏込めも同時に行なったのであろう。裏込めには、粘土ばかりでなく瓦の破片をも合わせ充填をしている。この様子は第4トレンチで良好に検出できた。

瓦積基壇に使用されている瓦は、平瓦を主体に丸瓦・軒平瓦がある。平瓦は後述する平瓦A

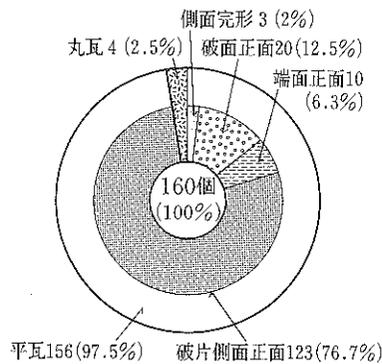


Fig 6 瓦積基壇使用瓦の割合

み方は、平瓦の側面を基壇の正面に向け、凸面を上にする所謂平積を基本としている。しかし、側面が完全な半載平瓦を整然と積み上げているわけではない。その様子を第2トレンチの瓦積の状況から見てみよう。

第2トレンチで検出した瓦積基壇（長さ1.5m、高さ0.6m）に使用されている約160枚の瓦の内訳（Fig6）は次のとおりである。但し、これには積みあげた後に破損したと思われるものは旧状に復して数えた。側面が完全な平瓦で側面を正面とするもの3枚（2%）、平瓦の破片で側面を正面とするもの123枚（76.7%）、平瓦の破片で破面を正面とするもの20枚（12.5%）、平瓦の破片で端面を正面とするもの10枚（6.3%）、丸瓦4枚（2.5%）である。このような状況は、各トレンチにおいても概ね同様である。また、ごく少量瓦積の中に使用される軒平瓦は必ずしも瓦当面が正面を向いておらず、装飾的使用とは考え難い。

金堂基壇の瓦積は、平瓦の破片を主な材料として使用している。この状況が創建当初のものか、後の改修によるものなのか、確定するには致っていない。

基壇の土盛 基壇の土盛りは、創建期整地層直上から構築されており、掘り込み地業は確

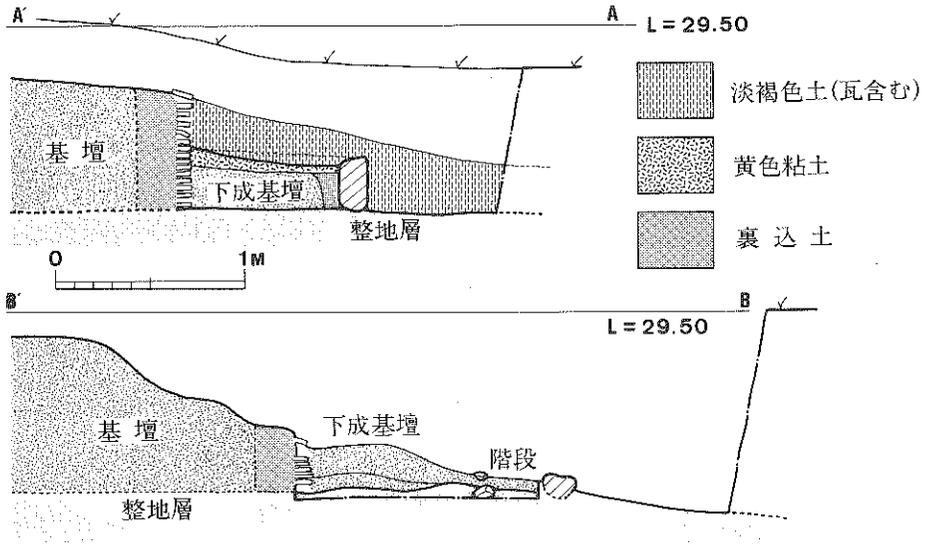


Fig 7 基壇と下成基壇断面図(南辺)

認できない。土盛りは、暗黄褐色土の単層らしい、礫を比較的多く含むが、遺物は認められない。土は比較的硬くしまっており、一応はつき固めていると見てよい。瓦積の外装は、この土盛りの完成後である。

下成基壇 金堂基壇は、その南辺及び北辺に下成基壇をもっており、特色の一つとなっている。下成基壇は、幅0.9m程、高さ0.3m程である。

構築順序は、瓦積で四周を外装する基壇本体の完成後、幅0.7m、高さ0.2m程に基壇の辺にそって土盛りを行なう。その後に、正面に高さ0.3m程、幅0.4m程の河原石を面をそろえて立てならべ下成基壇の外装とし、上面の外装として黄色粘土を厚さ0.1m程敷いている。したがって、下成基壇の部分だけ基壇本体の瓦積はかくれてしまうこととなる。基壇南辺では、西端で瓦積約10段、東端で約5段ほどがかくれている。下成基壇の土盛りの土は、基壇本体のそれと同様なもので、遺物は出土していない。

下成基壇上面の瓦積と接した所に杭跡 (SP 502~506) を検出した。直径0.2m程で約2.7m間隔で5ヶ所である。この杭跡は、上面外装を切り込んでいる。埋土には瓦片を含んでおり、後述する平瓦Bが含まれている。改築に伴う足場用の杭跡か。

階 段 基壇南辺の中央部で階段を検出した。検出したのは第1段目のみである。検出時の状況は、下成基壇の端より0.6m南のところ、拳大の扁平な河原石12個が1列(全長1.8m)に下半を整地層に埋め込まれた状況でならんでおり、これに接してやや大ぶりの河原石が2列分やや遊離した状態でならんでいるというものであった。

これは、階段第1段目の外装の石組が南へ倒れた状況であろうと推察された。下成基壇の

土盛りは、この部分に薄く張り出している。その幅は、約3mであるが範囲を明瞭にとらえることは難しい。現時点で、この土盛りの広がりより階段の位置を測ると、基壇西端より階段西端が約8.9m、基壇東端より階段東端が約8.1mとなり、基壇の中央にこない。

倒壊した石積より階段の第1段目の高さを復元すると、0.35m程となる。これは、下成基壇より若干高い。下成基壇の階段と交差する部分については、他の部分と特に変わった所はない。外装の石列も存在したと思われる。ただ、他の部分のような大ぶりの石ではなく、小ぶりの石であったことが抜き取り痕跡より理解できる。築く順番は、下成基壇完成後に階段を構築していることとなる。階段の西側の下成基壇外に礫が集中する部分がある。創建期整地層からやや遊離しているが、これらも階段に使用されたものであろう。

基壇の上面外装と礎石 礎石については、基壇上面の調査を実施していないためその遺存の有無については未確認である。しかし、現状では一切それらしい石材を基壇上に見い出せないことと、基壇の遺存状況を考え合わせると、その遺存については否定的である。

上面外装についても全くわからない。調査で磚が出土していないことを積極的に評価すれば、磚敷以外の上面外装を考えなくてはならない。

基壇と下成基壇の新旧 すでにのべたとおり、基壇完成後に下成基壇は構築されている。ここで問題となるのが、この下成基壇は当初より存在したのか、後に付設されたかである。

下成基壇によってかくれてしまった瓦積とその上に出ている瓦積の状況には違いがあるだろうか。第4トレンチと第1トレンチ西端付近での観察では変化は認められない。また、観察可能な瓦積の平瓦はすべて平瓦Aである。このようなことから、瓦積完成後、ほどなく

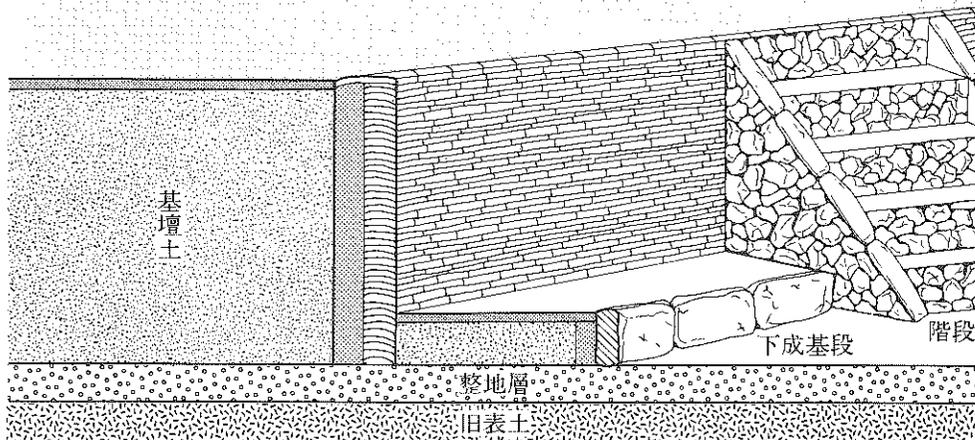


Fig 8 金堂基壇模式図

下成基壇が構築されたと見ることができる。

(3) 推定塔跡 (第6次発掘調査) [PLAN 12、SECTION 4]

第6次発掘調査は、金堂跡の東側で塔の有無を確認するために行なった調査である。調査の結果、第4・5トレンチの西端ではほぼ金堂の東・西辺に並行する段差(高まり)を確認した。この高まりをSX 601とする。SX 601の性格については確認できていないが、高まりの土層には遺物を含まないこと、土が比較的硬いこと及び金堂との位置から考えて塔の基壇の可能性はある。

基本的な土層 土層については、2つの地区に分けてのべる。すなわち第1～3トレンチと第4・5トレンチとである。前者は西中24番地であり後者は西中18番地である。両者の境には、現在石垣が築かれており18番地側の方が0.3～1.0m程高くなっている。SX 601を検出したのは、この高い方である。

1～3トレンチの土層は、上層から表土(0.2m)、近代の遺物を含む淡褐色砂質土(0.2～0.3m)、近世の遺物を含む黄褐色土(0.3m)、炭・焼土・近世の遺物を含む暗褐色砂質土(0.2～0.4m)、その下に創建期整地層である。ここでは、寺域北部地区や金堂基壇西半部で検出した奈良から中世にいたる遺物包含層は見あたらない。金堂基壇の東半部が近世以降の土地改変で大きく損傷を受けたように、このあたりも近世以降の掘削が相当深く及んでいる。

第4・5トレンチの土層は、上から耕作土(0.4m)、近世の遺物を含む淡褐色土(0.3m)、炭・焼土を含む暗褐色砂質土(0.3m)となり、その下に無遺物の黄褐色混礫土がある。この黄褐色混礫土がSX 601である。SX 601検出までの土層は、基本的に第1～3トレンチの状況と等しい。

SX 601 前述したように、黄褐色混礫土の高まりがSX 601である。規模不明。これが建物基壇とすれば、その西辺を検出したこととなる。金堂(SB 501)とほぼ平行する。第1～3トレンチの創建期整地層から、検出面までの高さは約0.6m、長さ4m以上。金堂東辺より12.8～13.5m程離れている。

SX 601の高まり斜面には、人頭大から拳大の河原石が厚く堆積し、石垣状を呈していた。ただ、この石の集まりは、石垣のごとく整然と積みあげたものでなく、無造作に積みあげたものである。石の間から近世初頭頃かと思われる陶器片が出土しており、この石の集まりはSX 601に直接関係するものでない。この石を除去したが、高まり斜面には何の施設も見あたらなかった。また、平瓦の細片が検出面で数片出土している。

SX 601の性格については、検出したところが一部に過ぎないため、その性格を特定することは極めて難しい。しかし、金堂の西側に平行して設けられる建物は一般的には塔である。今はSX 601を塔跡として考えたい。

(4) 寺域南部地区 (第7次発掘調査) [PLAN 13、Fig 9]

第7次発掘調査は、金堂の南約30mのところ寺の南限を確認するために実施した調査である。この地点は、第4次調査で確認した寺の北限溝 (SD 402) から約1町の距離にある。本年度の調査は、大鳳寺跡発掘調査5年計画の最終にあたり、現地調査に多くの時間・経費を充てることができないため、面的な調査ではなく断面観察を重視することにより効率的に遺構を確認することとした。

調査の結果、寺城南を画する築地跡 SA 701 と側溝 SD 702・SD 703 を確認した。

基本的な土層 この地点での基本的な土層は、上から耕作土 (0.4m)、中世及び近世の遺物を含む黄褐色混礫土・淡褐色混礫土・暗青灰色土などの遺物包含層 (0.6m)、そして黒 (暗) 褐色混礫土となっている。黒 (暗) 褐色混礫土を SD 702・SD 703 が掘り込んでいる。他の地点では、通常、寺に關係する遺構は創建期整地層と呼んでいる暗褐色混礫土から掘り込んでいる。しかし、この黒 (暗) 褐色土は創建期整地層下で検出できる旧表土に似ている。現時点では、この土層も創建期整地層として取り扱いたい。

SA 701 平行する SD 702 と SD 703 の2本の側溝をもつ築地跡である。側溝の内法で幅5.4m。側溝はそれぞれ内側の肩を検出したに留まるため溝幅は不明である。中世から近世に至る遺物包含層が検出面直上から始まるため他の地区で検出できる瓦を多く含む層より古い時代の遺物包含層は見あたらない。瓦は、表土中ないし中世から近世の遺物包含層中に散見できる。

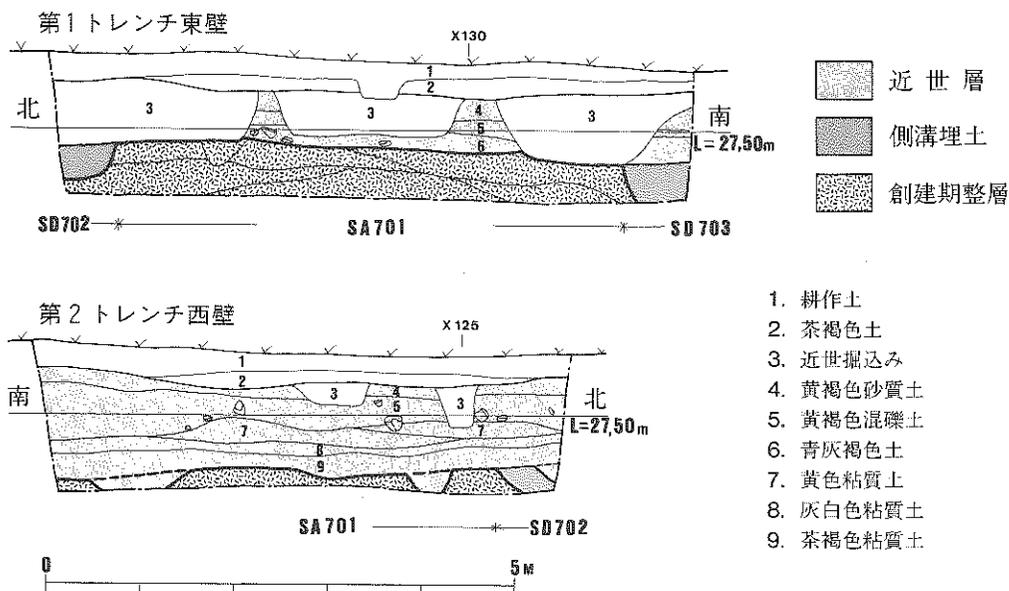


Fig 9 SA 701 土層断面図 (第7次)

第2節 遺構の時期と性格

ここでは、前節でその概要を述べた遺構の時期と性格を整理することとしたい。時期の判断については、土器類・瓦類の検討より行なった。

主要建物 瓦積基壇建物である SB 501 は、その規模（下成基壇を除く規模 16.1m×19.5m）と東西棟であることから考えて、仏を安置する金堂であるとみてよい。この周囲から発見される軒丸瓦は当寺跡の創建瓦である NM 01 であり軒平瓦は重弧文の NH 01 が圧倒的多数を占め、当寺の創建期からの金堂であることも確かである。金堂は平安時代前期までは存在していた。それは、基壇南辺の瓦集中部分より平安時代前期に比定できる軒平瓦 NH 03 が出土していることから理解できる。おそらく、この時代に瓦のさし換えが行なわれたのであろう。このような瓦のさし換えは、奈良時代にも行なわれている。第1次発掘調査では平城宮 6282 系の NM 04 が出土している。ただ、このような瓦のさし換えや葺き換えに用いられた創建時の瓦（創建瓦）よりも新しいもの（補修瓦）は、極めて少ない。これは平瓦においても同様である。屋根の葺き換え時に他の建物の創建瓦を金堂にもってきて、他の建物に集中的に補修瓦を使用したと考えない限り、金堂の屋根の補修はいずれの時代でもごく一部に留まっていると考えてよい。

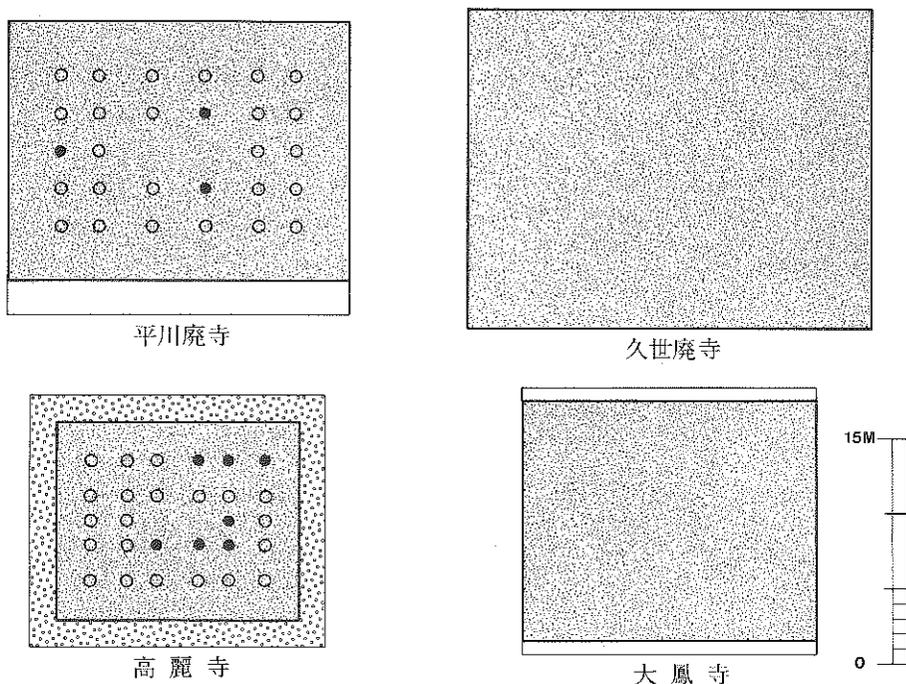


Fig 10 南山城地方白鳳寺院金堂の規模

金堂がいつ廃絶したのか、現状では確認できていない。しかし、廃絶後にその上を覆う遺物包含層の中に13世紀頃の瓦器の鍋・釜類が散見できるため、瓦で存在が確認できる平安時代前期から鎌倉時代頃までの間に廃絶したことは理解できる。

築地・溝 SA 701 と SD 402 の距離は、それぞれの中心同志で約 112m あり、かつての 1 町とはほぼ等しく、かつ両者が並行することから考えて、SA 701 が寺城南限の築地跡、SD 402 が寺城北限の溝であることは確かであり、創建時の区画とみてよい。SA 701 の廃絶時については、出土遺物が少なく不明である。しかし、SD 402 については理解できる。

SD 402 からは多く平瓦が出土しているが、この中には凸面に縄タタキをもつ平瓦Bは一切含まれず、格子叩きをもつ平瓦Aだけである。平瓦Aは創建瓦であり、平瓦Bは補修瓦である。当寺跡での補修瓦で最も古いものは奈良時代のものである。これは、すべて平城宮式であり、聖武天皇が恭仁宮、紫香楽宮、難波宮を経て再び平城宮に遷都した後の造営に用いられた平城Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間^{文21・22}）のものである。そうすると、SD 402 の廃絶は、平城Ⅲ期以前である可能性が考えられる。また、土器から見ると、主体をなす時期のものはやはり平城Ⅲ期頃のものである。SD 402 の埋没状況が自然的な埋没というよりは瓦を投棄しつつ人為的に埋めたいという状況が考えられることを積極的に理解すれば、奈良時代の改修（8世紀中頃～後半）に伴い SD 402 も埋めたいをした、と考えられる。

SD 301 は、寺域の北西部にある南北溝である。検出長は約15mであり、北端は明らかとなっている。南端は未検出であるが、南へ向って浅くなっており全長は検出長をさほど上廻らないと思われる。単独の溝である。性格については不明。埋土の中層には多量の瓦を含むため、SD 402 と同じく人為的に埋めたいと見えてよい。瓦は平瓦が大半であり、平瓦Aと平瓦Bの両者を含む。下層より出土した土器は、平城Ⅲ期頃のものである。したがって、SD 301 は、平城Ⅲ期以前に掘削され、奈良時代の改修後に埋めたいと見られる。廃絶時期は明確でないが、近くの瓦を一括投棄した土壌 SK 401 の平瓦の組成と類似するところから考えて、SK 401 の年代の9世紀前半ぐらいに埋めたいと見えてよいだろう。

SD 402 や SD 301 の周囲は、遺構内はもちろん、遺物包含層の中にも多量の瓦を含んでいる。明確な建物跡はこの寺域北部地区では検出していないものの、瓦葺きの建物を付近に想定しておかなくてはならないだろう。SD 301 や SD 407 は、この想定される建物に関係する施設の可能性もある。

土壌・柱穴など 土壌で年代が明らかなのは、SK 401 と SK 411 である。SK 401 は所謂瓦溜りであり、出土した土器より9世紀前半の年代が考えられる。また、SK 411 は SD 402 埋没後に掘削された土壌であり、9世紀後半と思われる。SK 329 は所謂焼土壌であり、寺域内の小鍛冶に関係する施設と考えられる。

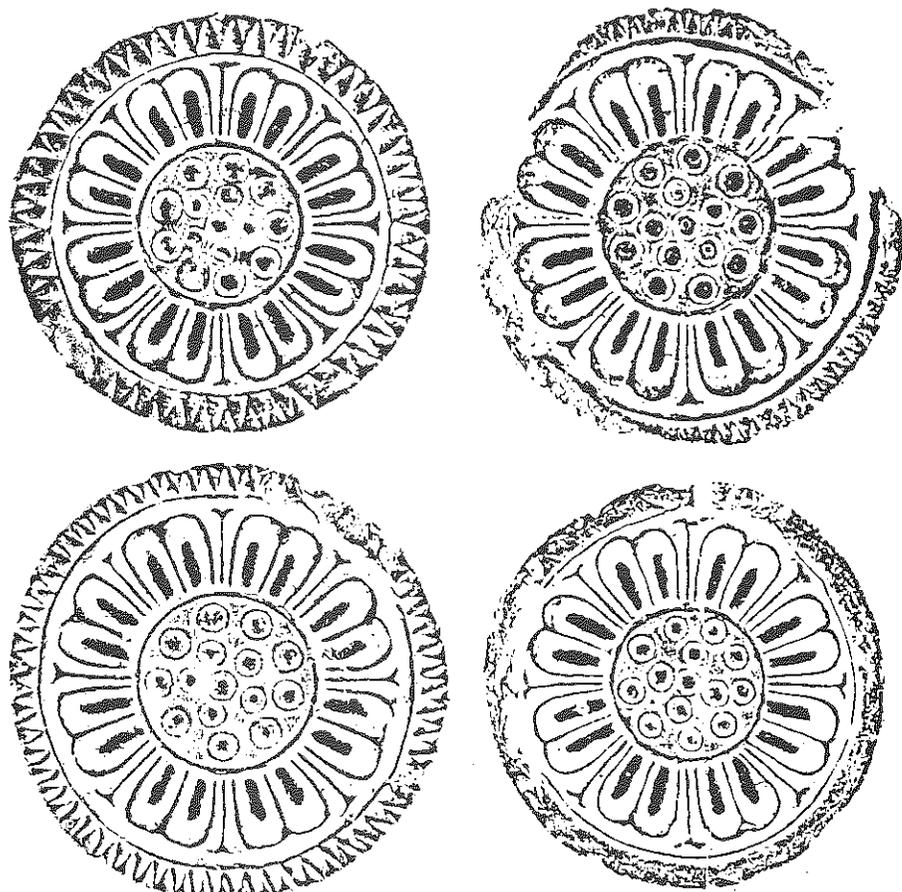


Fig 12 川原寺の創建瓦（文46より）

古に比定でき、当寺の創建時に用いられた瓦（創建瓦）である。川原寺例（Fig 12）と比べると、文様構成上の基本である複弁8弁であること、蓮子が1+5+9であること、外縁が面違鋸齒文であることには忠実である。しかし、弁のもり上がりが小さくなっていること、蓮子周囲の圏線を失っていること、外縁内側の圏線を失っていることなどで後出的な要素も見い出せる。

川原寺の創建がいつであるか、議論のあるところだが、天智天皇元年（662）以降、天武天皇2年（674）までの13年間に限定されるという見解^{文6}によれば、文様から見る限りNM 01は674年以降のしかもさほど時間の経過していない年代を与えることができよう。

NM 02 単弁16弁蓮華文を内区主文とする。弁のほりは浅い。中房はややもり上がり、蓮子は1+6。界線に囲まれた外区内縁には珠文がめぐり、外区外縁は素縁となっている。瓦当側面及び瓦当裏面にヘラケズリを施す。特に瓦当裏面は内削りにより中央が凹む。丸瓦部を欠く。直径17cm程である。2個体出土している。

第IV章 遺 物

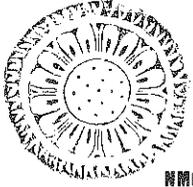
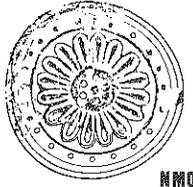
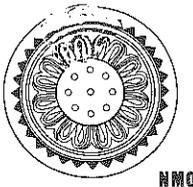
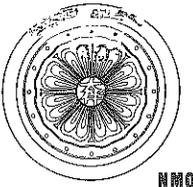
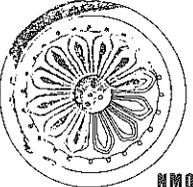
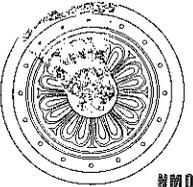
形 式	次 数 別 出 土 個 数					総数	全体の中 の割合%	
	次 数	個 数						
 NM01	第3次	21					75	91.6
	第4次	9						
	第5次	45						
 NM02	第3次	2					2	2.4
	第4次							
	第5次							
 NM03	第3次	1					1	1.2
	第4次							
	第5次							
 NM04	第3次	1					1	1.2
	第4次							
	第5次							
 NM05	第3次	1					1	1.2
	第4次							
	第5次							
 NM06	第3次	1					2	2.4
	第4次	1						
	第5次							
 NM07	第3次						1	1.2
	第4次	1						
	第5次							

Fig 13 軒丸瓦の形式と出土量

平城宮 6133—Hと同範であり、平城宮から補修瓦としてもたらされたものである。平城宮 6133—Hは、聖武天皇が恭仁宮・紫香樂宮・難波宮を経て、天平17年（745）に再び平城宮に還都した後の平城宮造営に用いられた瓦の一つであり、平城Ⅲ期（天平17年～天平勝宝年間）^{文22}の年代が与えられている。

NM 03 複弁8弁蓮華文を内区主文とする。弁のほりは浅い。大きめの中房に1+8の蓮子をもつと思われる。外区内縁は2本の界線、外区外縁は陽刻鋸齒文をめぐらす。1個体出土している。補修瓦である。

平城宮 6225系である。これは、平城宮第2次大極殿・朝堂院の主要な瓦であり、以前は平城Ⅱ期（養老5年～天平17年）^{文22}と考えられていたが、今は平城Ⅲ期^{文42}に比定されている。

NM 04 複弁8弁蓮華文を内区主文とする。小ぶりの中房に1+6の蓮子をもつ。外区内縁は界線に囲まれた珠文が、外区外縁には線鋸齒文が配されている。丸瓦部を欠く。直径17cm程。5年間の発掘調査では1個体しか出土していない。しかし、第1次発掘調査で1個体、寺域北部地区でかつて1個体が採集されたという。補修瓦である。

平城宮 6282系である。大膳職の主要な瓦であり、天平末年の年代^{文22}が考えられている。平城Ⅲ期の瓦である。

NM 05 複弁8弁蓮華文を内区主文とする。外区内縁には界線に囲まれた珠文がめぐり、内側の界線はやや波うっている。外区外縁は直立縁である。中房に「大伴」の陽刻をもつものと考えられる。1個体出土。補修瓦である。

平安時代初期のものである。東寺（教王護国寺）、広隆寺、珍皇寺（愛宕寺）などでも出土^{文49}している。大伴銘が何を意味するかは不明である。弘仁14年（824）に嵯峨天皇にかわり即位した淳和天皇の諱に大伴の名があたるため、大伴氏は伴氏に名を改めている。したがって、大伴銘瓦も824年以前の年代^{文38}が考えられるとの指摘がある。

NM 06 単弁12弁蓮華文を内区主文とする。弁のほりは浅い。中房は平坦で、蓮子は1+4である。外区内縁には1条の界線と珠文を配す。外区外縁は直立縁である。外区内縁の界線は、珠文3個を一組とし多角形状にめぐっている。直径約17cm。2個体出土。補修瓦。

類例を知らない。年代的には、文様と瓦当裏面の形状が横長の楕円形であるところから考えて、平安時代前期を想定しておく。

NM 07 複弁8弁蓮華文を内区主文とする。弁のほりは浅い。中房もさほどもり上らない。蓮子数不明。外区内縁は、2本の界線の外側に珠文を配す。外区外縁は直立縁である。1個体出土している。摩滅が激しく文様が不明瞭、補修瓦。

不明瞭であるものの、文様から見て平安前期の平安宮の所用瓦と思われる。近いものに西賀茂瓦窯^{文30}のNS 151がある。



Fig 14 瓦当面の粘土充填痕跡

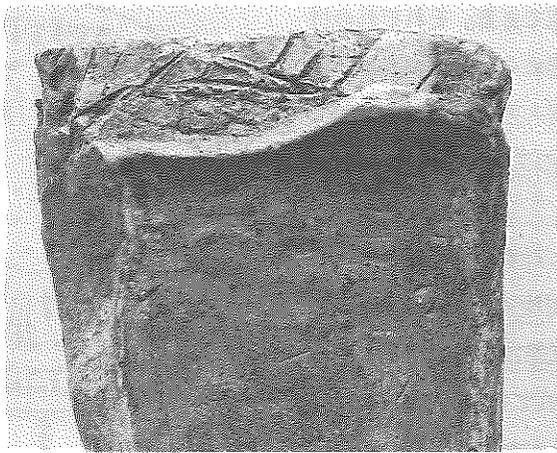
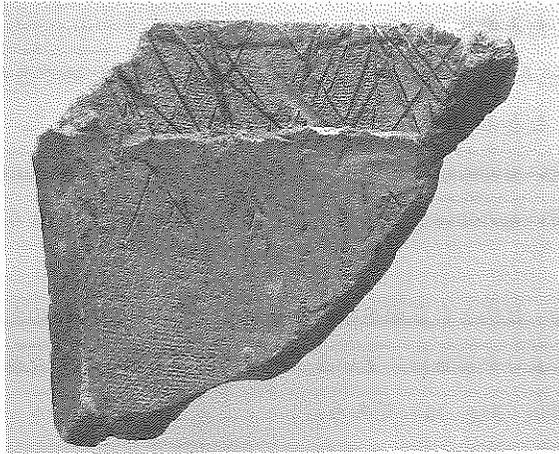


Fig 15 丸瓦部接合面の接着強化

瓦筭への粘土充填 軒瓦は、通常「瓦筭」とか「筭」と呼ばれる型に粘土をつめ、同じ文様のものを大量生産する。筭は木製が一般的であり、NM 01 の筭も瓦当面に残る木目の痕跡から木製であったことがうかがわれる。NM 01 の瓦当面を詳細に観察すると、筭に粘土をつめこんだ時の痕跡がところどころにあることに気付く。

NM 01 の瓦当面で、粘土の充填痕跡が顕著にあらわれるのは以下の3ヶ所である。

(ア)、外縁と蓮弁の境付近。(Fig14-1)

(イ)、蓮弁先端部の子葉末端付近。(Fig14-2)

(ウ)、中房外周付近。(Fig14-3)

(ア)への粘土の詰め込みは、詰め込み時の痕跡が外縁内側にそってめぐりため、粘土を紐状にのぼし、筭の外縁部にそって充填したことがわかる。

(イ)の粘土の詰め込みは、詰め込み時の痕跡が連弧状にあらわれるものが多く、小さな粘土球をつくり充填したと考えられる。

(ウ)の粘土の詰め込みは、詰め込み時の痕跡が中房外周ぞいにめぐりため、粘土板で中房部分を一気に充填したとみてよい。

一般的に、文様の浅いものには、このような分割した粘土の充填は認められず、NM 01 のように筭のほりの深いものには、文様を正しく写し出すため、このような方法を用いたと思われる。

瓦当と丸瓦部の接合 瓦当と丸瓦部を接合する時に、その接着強化のため、丸瓦が瓦当と接着する部分にヘラによりキズを付けている。キズを付けるのは、丸瓦部の先端部端面と先端部付近の凸面及び凹面 (Fig. 15) である。

これは、NM 01 に顕著に認められ、その付けかたは5種類が確認できる。それぞれの付け方が複数の個体で認められるため、この5種類は5人の工人の個人差と思われる。NM 01 の製作は5人以上の工人が関係したと見てよい。

また、瓦当の文様に対する丸瓦部の接合の角度には、一定の規則性 (Fig. 16) が認められる。すなわち、丸瓦部は文様に対して概ね180°の角度で接合されている。このことは、筭の形は別として、ともかくも、筭の特定の場所が理解できるようになっていた事を示す。

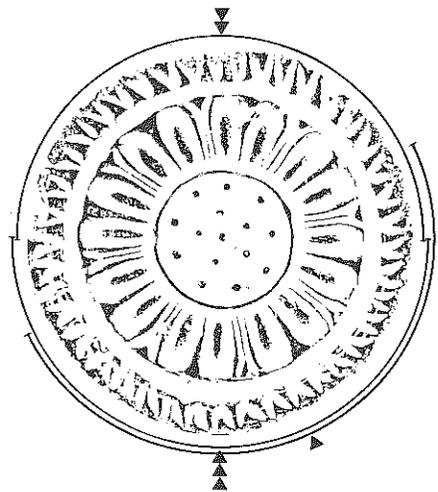


Fig 16 瓦当と丸瓦部のとり付け角度

(2) 軒平瓦〔ARTIFACT 3・4〕

軒平瓦は、形式のわかる個体が58個あり、NH01～NH04までの4形式に分類できる。個体数の中には、第1次・第2次調査で出土したものは含めていない。

NH01 重弧文軒平瓦。すべて段顎である。4重弧文と5重弧文がある。文様は型引きである。顎の長さには、65～90mmぐらいのものと140mmぐらいのもの2種類があり、前者が圧倒的に多い。軒丸瓦NM01と組み合わせる。創建瓦。55個体出土しており、全出土中の94.6%を占める。

NH01は、後述の平瓦Aの広端側に顎を付け軒平瓦としたものである。平瓦部凸面には格子タタキが残り、顎はナデ調整となっている。また、顎によりかくれる平瓦部凸面には格子タタキは認められない。したがって、NH01の製作は、完成した平瓦Aに顎を付し4分割したのではなく、平瓦部と顎の製作は一体的であったと見ることができる。すなわち、平瓦Aを転用し軒平瓦として製作したのではなく、当初より軒平瓦として製作されたのである。凸面のタタキは、顎のはりつけ後に行われている。

NH02 均整唐草文軒平瓦。中心飾の左右に各3反転する唐草を配すものである。外・脇区は2本の界線がめぐる。曲線顎。1個体出土。補修瓦。

右側の唐草文の第3単位第1支葉を欠落するという特色があり、平城宮6663—Cと同范である。平城宮第2次朝堂院所用瓦であり平城宮6225系と組み合わせる。現在は平城Ⅲ期(天平17年～天平勝宝年間)に比定^{X42}されている。

NH03 均整唐草文軒平瓦。逆C字形の中心飾から左右に3反転する唐草をもつ。外・脇区に珠文を配す。曲線顎。1個体出土。補修瓦。

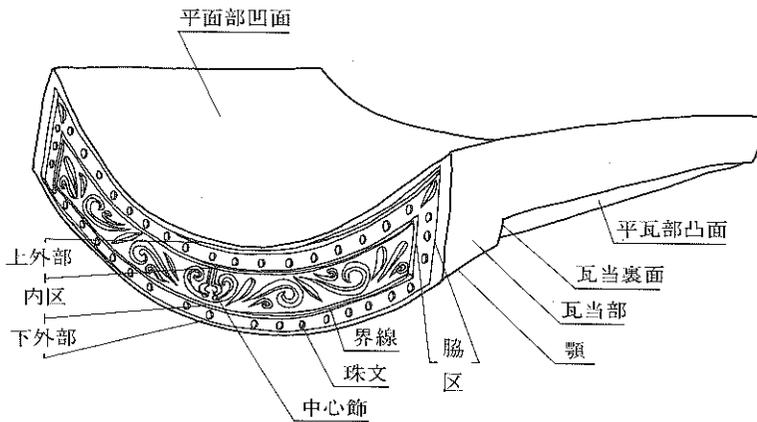


Fig 17 軒平瓦部分名称(文21より)

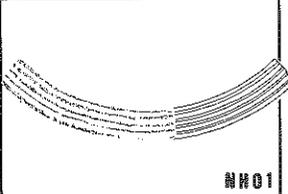
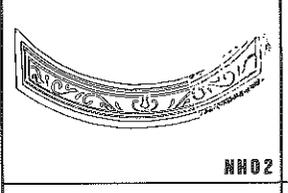
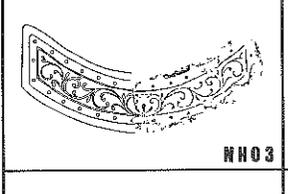
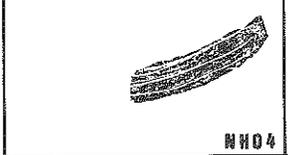
形 式	次 数 別 出 土 個 数					総 数	全体の中 の割合%		
	次 数	個 数							
		5	10	15	20	25	30		
 NH01	第3次	17					55	94.6	
	第4次	8							
	第5次	30							
 NH02	第3次	1					1	1.8	
	第4次								
	第5次								
 NH03	第3次						1	1.8	
	第4次								
	第5次	1							
 NH04	第3次						1	1.8	
	第4次								
	第5次	1							

Fig 18 軒平瓦の形式と出土量

平安時代前期の平安宮所用瓦。瓦当側面に縄タタキを残す。西賀茂瓦窯 NS 20 と同范。^{文30}

NH 04 ヘラ描重弧文軒平瓦。瓦当面に浅くヘラ描きをしている。3重弧以上。曲線顎。1個体出土。奈良時代の補修瓦か。

この他に、唐草文軒平瓦の小片（ARTIFACT 4-17）が1個体ある。形式不明。また、寺跡出土の軒平瓦には、しばしば凸面に朱痕を認めることができる。これは建築物を朱塗りする時に瓦の一部に付着してしまうものである。しかし、当寺跡では一切認められない。

(3) 丸 瓦〔ARTIFACT 13・14〕

5年間の調査で出土した丸瓦は、コンテナで約80箱分ある。出土量が多く、詳細な検討が行なえていないため、ここでは概要を記すに留めたい。丸瓦は、丸瓦 A と丸瓦 B の 2 形式に大別できる。

丸瓦 A 半載円錐台形の行基式丸瓦。粘土板巻きつけ技法。凸面にはタタキ痕跡は認められない。凸面の調整はヨコナデ。おそらく回転を利用したヨコナデであろう。両端面はヘラ

ケズリ調整。出土中の大半を占める。創建瓦。

丸瓦 B 玉縁が付く丸瓦。凸面に縄タタキが残るものがある。出土量は少ない。細片が多い。補修瓦。

また、丸瓦には凸面に文字をへら描き (Fig19) したものがあ。これは、寺域北部地区で表採されたものである。現状で確認できる文字は、「乃支」であり「のき」ないし「のし」と読める。この文字が現状の2字で完結した意味をもつのか、3以上の文字の下2字なのかかわからない。凸面の調整はヨコナデ。丸瓦 A に分類できる。

軒丸瓦 NM 01 に使用される丸瓦は丸瓦 A であると思われる。NM 02 から NM 07 に対応するものは丸瓦 B である。

(4) 平 瓦 [ARTIFACT 6~10]

平瓦は、コンテナで約320箱出土している。詳細な検討をしていないため、ここでは概要を記すに留める。平瓦は、平瓦 A ~ 平瓦 C の3形式に分類できる。

平瓦 A 凸面に格子タタキを残すものである。粘土板の接合痕跡を残す個体を見い出せるため、桶に粘土板を巻きつけ成形後に4分割する平瓦桶^{文16}巻作りによる製作であることがわかる。両側端面及び上下端面はへらケズリ。凸面に施こされる格子タタキの原体には、そのキザミの細いものから粗いものまで約4種類が認められる。また、このそれぞれの原体は、1枚の平瓦には1種類のタタキ原体であることが一般的である。しかし、しばしば1枚の平瓦に複数のタタキ原体が認められるもの (Fig20) がある。NH 01 に使用されるタタキ原体と同一の原体と思われる。凹面は、布目を残すもの、模骨の凹凸をケズるもの、全面をケズるものがある。また、糸切りの痕跡も認められる。創建瓦。出土中80%。

平瓦 B 凸面に縄タタキを残すものである。凸型台による一枚作り。縄タタキの痕跡は、平瓦の側面に対して平行につく。凸面全体に縄タタキが残るものを平瓦 Ba (ARTIFACT 3)、凸面の半分が縄タタキ、半分をナデにより消しているものを平瓦 Bb (ARTIFACT 4) とする。前者が圧倒的に多い。また、側端面に布目を残すもの (ARTIFACT 5) がある。この側端面に残る布目は、成形後、偶然に付い

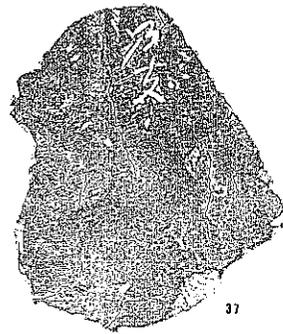


Fig 19 文字瓦

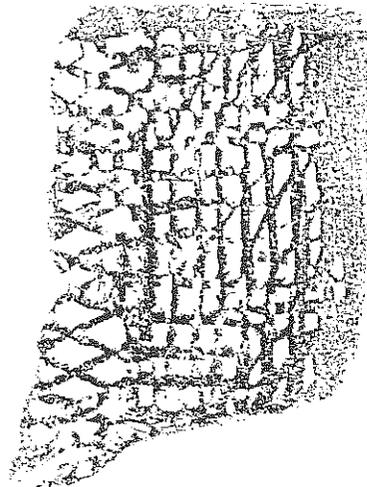


Fig 20 2種のタタキ原体

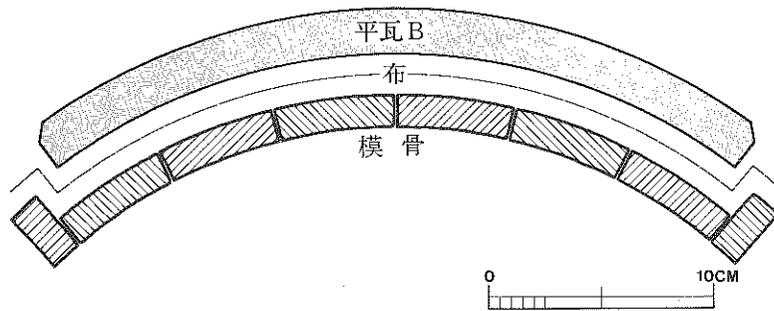


Fig 21 平瓦Bの成形台模式図

たものではなく、成形時に必然的に付いたものと思われる。平瓦Bの成形台の中には、成形台側面に枠をもち、その枠まで布が張ってあったもの (Fig21) が存在していたらしい。

平瓦Bは、全出土中の約20%。補修瓦。

平瓦C 凸面をナデ調整するもの。凸面にタタキ痕跡は見あたらない。桶巻き作り。1個体のみ出土。創建時に用いられた瓦か。

(5) 鬼瓦 [ARTIFACT 4・5]

鬼瓦は、3個体出土しており、OG 01とOG 02の2形式に分類できる。

OG 01 蓮弁文鬼瓦。単弁8弁を主文とする。弁は、中央が凹む。間弁は、先端が剣菱形に尖り、弁の中央が凹む。中房の形状は不明。弁及び間弁は、中房にとりつかず、各々独立している。全体の形状は、ほぼ正方形に近いと思われ、上端辺は、若干の丸味をもつ。型作り。2個体出土。

文様は、いわゆる高句麗様式と呼ばれるものに近い。軒丸瓦では、このような文様は出土しておらず、所属時期を決め難い。しかし、一般的にみて、このような文様を奈良時代以降に比定するのは困難であり、創建時に用いられた鬼瓦と考えたい。

OG 02 幾何学文鬼瓦。直径7.5cm程の車輪状の幾何学文様を複数配すものと思われる。1個体出土。型作り。

所属時期を断定できない。しかし、OG 01と同様に創建時のものと考えている。

(6) 隅切瓦 [ARTIFACT 7]

隅切瓦が1個体確認できる (ARTIFACT 7-30)。平瓦Aを縦に裁断し、一辺を斜め方向にさらに切りとったものである。創建期のものである。

前述したように、平瓦・丸瓦については、整理が完了していない。したがって、このような道具瓦について、どのような種類がどのぐらいの量出土しているか不明である。詳細については機会を改めたい。

第2節 土器類

第3次発掘調査より第7次発掘調査で出土した土器は、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器のほか、鉛釉陶器・灰釉陶器・緑釉陶器・輸入磁器・陶硯・近世陶磁器がある。総量的にはコンテナ7箱分程であり、そのうち8割程が土師器・須恵器によって占められている。全体に遺存状況は概して悪く細片のものが多。時代的には飛鳥時代（7世紀前半）より近世にいたる土器が出土しているが、その中心となるのは奈良時代（8世紀）および平安時代前期（9世紀後半）である。

以下、出土土器の様相について遺構ごとに順次報告する。遺構出土土器以外のものはすべて遺物包含層出土土器として扱う。近世遺物については今回は一切割愛する。なお、出土土器の器種名および手法・調整については、奈良国立文化財研究所の飛鳥・藤原宮および平城宮^{文32 文7・27・31・42}での呼称に基本的に準拠する。時期設定および実年代の比定についてもこれに準拠する。

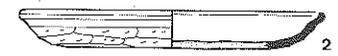
(1) SD 301 出土の土器（第3次発掘調査）〔ARTIFACT 15〕

SD 301からは、土師器の杯、須恵器の杯・杯蓋・壺・甕のほか転用硯がある。量的には極めて少なく、図示したもの（1・3～6）のほかに土師器・須恵器片が若干ある。細片のうえ摩滅が著しく遺存状況は悪い。時代的には概ね8世紀後半のものである。

土師器 土師器は杯の口縁部片数点および甕体部細片がある。全形を窺えるものはない。(1)は杯Aまたは杯Bの口縁部片である。内面には粗い一段放射暗文を施す。口縁端部を内側に巻き込み丸く肥厚する口縁部A形態^{文42}のものである。端部をまるくおさめるもの^{文42}とつまみあげ状のものは、以後、ともに口縁部B形態とする。

須恵器 須恵器には、杯A・杯B・杯B蓋・壺・甕がある。

杯A（4）は平坦な底部から外上方にまっすぐのびる口縁部をもち、口縁端部を丸くおさめるものである。(4)は底部外面にへう起し痕をとどめる。



杯B（6）は杯Aに高台をつけた形態のものである。(6)は底部中央部のみ不調整でへう起し痕をとどめる。

杯B蓋（3・5）は口縁部片3点とつまみ部1点がある。口縁部は2形態を認めることができる。すなわち、口縁部がいったん屈曲し端部がわずかに折れ曲るA形態^{文42}と口縁が短く屈曲するB形態とである。(3)はA形態

Fig 22 土師器杯・皿の口縁部形態

(A形態:1・2, B形態:3・4) cm。(5)はB形態のもので大型の扁平なつまみが付く。

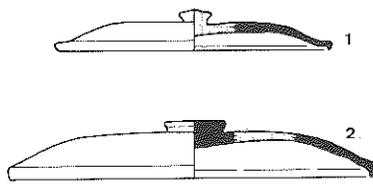


Fig 23 須恵器杯蓋の口縁部形態
(A形態:1, B形態:2)

口径 19.2cm、器高 3.0cm。

壺は頸部片 1 点と体部片数点がある。頸部片は肩部との接合面で剝離しているもので、壺 L と思われる。

甕は体部細片が数点ある。細片であり遺存状況が悪い。

陶硯では転用硯が 2 点ある。(91) は須恵器鉢 A の体部片を利用したものである。内面にスミの付着と使用痕

が認められる。

これらの土器のなかで年代が理解できるものは、(5)・(6)であり(1)・(3)・(4)である。これらはそれぞれ、概ね平城宮Ⅱ期および平城宮Ⅲ期に比定できる。しかし、これらの土器は SD 301 下層の茶褐色粘質土層からの一括資料であるためそのままその年代をもって SD 301 の廃絶時期を示さない。

(2) 寺域北部地区遺物包含層出土の土器 (第 3 次発掘調査) [ARTIFACT 15]

ここでは、第 3 次発掘調査で出土した土器のうち、遺構内出土以外すべてを遺物包含層出土土器として取り扱う。土師器では杯・高杯・甕、須恵器では杯・杯蓋・皿・鉢・壺・水瓶・甕、黒色土器では杯、瓦器では鍋・羽釜のほか、灰釉陶器の椀・皿・壺、緑釉陶器の皿、陶硯がある。量的にはコンテナー 4 分の 1 程でその遺存状況も悪い。時代的には、飛鳥時代 (7 世紀初頭) から鎌倉時代 (13 世紀) にいたるものである。

土師器 土師器には、杯 A・高杯 A・甕がある。全体的に摩滅が著しい。

杯 A は口縁部片が数点ある。調整は、口縁部上端だけをヨコナデしそれ以下は不調整のままである。手法のものがいくつかみられる。口縁部上端が外反するものもある。

高杯 A (16) はラッパ状に開く裾部と面取りした脚部に浅い杯部を付けるものである。脚部片が 1 点ある。杯部から裾部方向へ 11 面に面取りをするものである。芯棒の上に粘土紐を巻きあげて脚部を作る芯棒接合法^{文7}によって成形されている。

甕は口縁部と体部片が数点ある。長胴の体部に短く内彎する口縁部をもつものである。

須恵器 須恵器には、杯 B・杯 B 蓋・杯 G・杯 H 蓋・皿 B・鉢 A・鉢 X・壺 B・壺 C・甕がある。

杯 B (2) は杯 A に高台を付けるものである。(2) は断面長方形をなす高台部片である。

杯 B 蓋 (7) は口縁部片が数点ある。口縁部は A 形態・B 形態の 2 者が認められる。(7) は口径 21.0cm を測る。B 形態のものである。

杯 G は平坦な底部から内彎する口縁部をもつものである。宝珠つまみと内面のかえりをもつ蓋とセットの杯である。底部片が 1 点ある。底部外面は不調整でヘラ起しをとどめる。

杯 H 蓋 (17) は全体に丸味を帯びた古墳時代の伝統的形態をもつものである。(17) は天

井部にヘラ起し痕をとどめる。

皿 B (8) は平坦な底部に短い口縁部をもつ皿 A に高台を付けたものである。

鉢 A (9) は尖底または丸味を帯びた尖底と内彎する口縁部からなる、いわゆる鉄鉢形のものである。口縁部より体部にかけての破片が数点ある。(9) は口縁端部を残し全面に丁寧なヘラミガキを施す。今回、図示できなかったが、やや小型の鉢が1点ある^{文45}。直立気味の口縁部と内側に折り返す端部をもつものである。口径 13.2cm を測る。調整は全体にロクロナデを施し体部外面下半はロクロケズリを施す。全体の作りはやや雑である。平安京左京内膳町 SD 41 A 出土土器^{文34}に類似することから、時期的には概ね11世紀後半と考えられる。

鉢 X (10) は平坦な底部と外上方に開く口縁部からなるものである。(10) は口縁端部を玉縁状に肥厚させたものである。平安京左京内膳町 SK 19 出土土器^{文34}に近いことから、時代的には概ね10世紀後半と考えられる。

壺 B は肩部が稜角をなす長胴の体部と、直立する短い口縁部をもつ。平底である。肩部から体部上半にかけての破片が1点ある。

壺 C (14) は平坦な底部から外上方に立ちあがる体部と、短く直立する口縁部からなるものである。(14) は肩部から口縁部にかけての破片である。

壺は他に回転糸切り痕をもつ底部片が1点ある。縦長の胴部に太く長い口縁部をもつ。ロクロ成形で作られる壺 G と思われる。他に壺か瓶のものと思われる底部片が2点ある。

甕は口縁部片と体部片が数点ある。口縁端部は外傾する端面をなすもので肥厚しない。体部片のうち把手部のものが1点ある。焼成が悪く外面は摩滅のため不明。内面はユビオサエのちナデを施す。

黒色土器 黒色土器は、内面のみ炭素を吸着させた黒色土器 A 類^{文12}の杯の口縁部片1点と底部片2点がある。口縁部片は摩滅が著しく調整不明である。他の2点は杯 B の底部片である。両者とも断面三角形を呈す低い高台がつく。内面は丁寧なヘラミガキを施すが、外面は不調整である。

瓦器 瓦器には鍋・羽釜がある。時期的には概ね12～13世紀のものである。

鍋 (11) は直立する体部に外反する短い口縁部をもつもので、口縁端部を上方につまみあげるものである。口縁部片のみで全形を窺えるものはない。

羽釜 (12・13) は平坦な底部から内彎して直立する体部と口縁部をもつものである。口縁部と体部との境に一条の鏝をもつ。(13) は、口縁端部から体部外面にかけて粘土紐巻きあげ痕跡が明瞭に残る。

灰釉陶器 灰釉陶器には碗・皿の底部片が4点と壺体部片1点がある。5点とも硬質で灰白色を呈す東海系の灰釉陶器である。

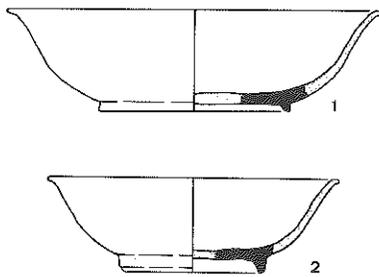


Fig 24 灰釉陶器の高台形態
(a形態:1、b形態:2)

碗(18・20・21)はやや内彎する体部に高台の付くものである。底部片が3点ある。高台はすべて貼り付け高台である。断面が台形で低い高台 a 形態と、外端部を面取り風にナデ、断面三角形を呈す、「くちばし高台」とよばれる高台 b 形態の 2 形態が認められる。(18) はやや小型の体部と高台 b 形態をなすものである。底部外面にはロクロケズリを施す。口縁部内面に施釉が認められる。(20) は高台 b 形態をなすものである。底部内面には三叉トチンの痕跡が認められる。破片には施釉が認められない。(21) は高台 a 形態をなすものである。底部外面および体部下半にロクロケズリを施す。刷毛塗りにより全面に施釉する。

皿(22) は扁平な体部に高台がつくものであり、見込みに一段の段差をもつ段皿とよばれるものである。(22) は、口縁部と底が接する部分に段をつくる広縁のもので、外面には明瞭な段をもたない。高台 b 形態をもつ。口縁部内外面に施釉する。

壺は高台の欠損した体部下半から底部にかけての破片が1点ある。外面に薄く灰釉がかけられている。

緑釉陶器 緑釉陶器には皿の高台部片が1点ある。近江系の緑釉陶器である。(19) は、胎土には細砂粒を含み須恵器の色調と硬度に類似する。全面に濃緑色の緑釉を施釉する。口縁部の内面で底部との境に一条の沈線をもつ。

陶硯 陶硯には圈脚円面硯が1点と転用硯が1点ある。(23) は硯部径13.8cmを測る圈脚円面硯である。陸部・海部の区別が明瞭なものである。外堤外面下端には一条の突帯がめぐる。圈脚部には幅2.0cmの幅広い長方形透し孔の痕跡が1か所認められる。調整は外面にロクロナデを施し内面はナデ調整を施す。転用硯(24) は須恵器の甕体部片を利用したものである。体部内面に墨の付着と使用痕が認められる。

先述の通り、遺物包含層からは飛鳥時代(7世紀初頭)から鎌倉時代にいたる土器が出土している。しかしながら、細片あるいは摩滅のため全体的に遺存状況は悪い。ここでは、各時期の特徴をよく示すものを選び土器の年代を考える。最も古いものは、(17)であり飛鳥Ⅰ期(7世紀初頭)に比定できる。この時期は寺院建立以前であり直接寺院にかかわるものではない。次に一定のまとまりを見せる土器群は、(7)・(9)・(14)・(16)である。概ね平城宮Ⅱ期・Ⅲ期に比定できるものである。平安時代の土器には灰釉陶器の一群があげられる。(21) は黒笹14号窯様式に、(18)・(20)・(22) は黒笹90号窯様式に比定できる。これ以降、年代的に一定のまとまりを見せるのは、瓦器類(11~13)である。平安京左京内膳町の

SE 326 上層出土土器^{文34}に類似することから、13世紀後半から14世紀前半と思われる。

(3) SK 401 出土の土器（第4次発掘調査）〔ARTIFACT 16〕

SK 401 からは、土師器では杯・皿・椀・高杯・甕、須恵器では杯・杯蓋・鉢・壺・甕のほか、鉛釉陶器の長頸瓶がある。量的にはコンテナー4分の1程で、土師器・須恵器がほぼ折半する。時代的には、その主体となるのは奈良時代（8世紀中頃）である。

土師器 土師器には杯A・皿A・椀A・高杯・甕がある。

杯Aは口縁部片が数点ある。いずれも口縁部内面に一段放射暗文を施すものである。もっとも良好なものは、内面に丁寧な螺旋暗文と一段放射暗文が見られる。外面は、口縁部にヨコナデを施し底部は不調整のa手法である。

皿A(25)は平坦な底部から内彎する短い口縁部をもつものである。(25)は口縁部B形態である。調整は、口縁部にヨコナデを施し体部外面はヘラケズリのc手法である。内面には一段放射暗文を施す。

椀A(26・27)は丸味をおびた小さな平底と内彎気味に外上方に開く口縁部からなるものである。口縁部より体部にかけての破片が2点ある。口径13cm前後を測る。口縁部B形態のものである。

高杯は杯部片が数点ある。外面は口縁に沿ったヘラケズリののち数回に分けたヘラミガキを施す。内面はヨコナデののち螺旋暗文と一段放射暗文を施す。

甕は体部片が数点ある。内面はハケ調整を施す。外面は摩滅のため不明。

須恵器 須恵器には杯A・杯B・杯B蓋・杯H・鉢A・壺・甕がある。

杯Aは口縁部片が数点ある。細片。

杯B(29)は高台が断面長方形をなすものが数点ある。

杯B蓋(28)は口縁部片がある。(28)は口縁部A形態のものである。

杯Hは口縁部片が1点ある。立ち上がりが退化した古墳時代の伝統的形態のものである。

鉢A(31)は口縁部から体部にかけての破片がある。(31)は口径19.0cmを測る。内傾する端面をもち口縁端部外面には一条の沈線がめぐる。

壺(32)は口縁部片と体部片が数点ある。(32)は平底と直立する体部をもつものである。

甕は口縁部片と体部片がある。細片のため全形を窺えるものはない。口径65cmを測る大型の甕もみられる。

鉛釉陶器 SK 401 からは、壺の口縁端部片(30)が1点出土している。短く外反したのち口縁端部において屈曲して丸く肥厚するものである。胎土は軟質で灰白色。外面に緑釉を、内面に緑釉と白釉を施す。細片のため速断はできないが、二彩長頸壺と思われる。

年代的に一定のまとまりを示す土器群は、(25~27)・(31)であり概ね平城宮Ⅱ期・Ⅲ期

に比定できるものである。SK 401 は、9 世紀前半頃と思われる。

(4) SD 402 出土の土器（第 4 次発掘調査）〔ARTIFACT 16〕

SD 402 からは、土師器の杯・皿、須恵器の杯・杯蓋・皿・椀・鉢・高杯・甕のほか陶硯がある。量的にはコンテナに 3 分の 1 程で、そのうち須恵器が 8 割を占める。年代的には、8 世紀中頃から後半のものが多い。

土師器 土師器には杯 A・皿がある。遺存状況は悪い。

杯 A (33) は口縁部 A 形態のものが数点ある。a 手法で内面に一段放射暗文を施すものがみられる。(33) は摩滅が著しく調整不明である。

皿は口縁部 B 形態のものが数点ある。細片のうえ摩滅が著しい。

須恵器 須恵器では、杯 A・杯 B・杯 B 蓋・皿 E・鉢 A・高杯・甕がある。

杯 A (37・41) は口縁部片が数点ある。(37) は底部外面にヘラ起し痕をとどめる。

杯 B (36・39) は底部片が数点ある。外側に開く比較的大きな高台 (39) と、断面長方形をなす高台 (36) とがある。

杯 B 蓋 (34・35) は天井部片 1 点と口縁部片数点がある。(34) は口縁部外面のみロクロケズリを施す。

皿 E (38・40) は平底と外上方に開く短い口縁部をもち、口縁端部を外方へ薄く引き出す特徴をもつ。口縁部片が 2 点ある。口径 11cm 前後を測る。

鉢 A (42) は口縁部から体部にかけての破片が 2 個体分出土している。(42) は口縁部外面上端を残しすべて丁寧なヘラミガキを施す。内面および口縁部には墨または黒ウルシらしいものが付着している。

高杯は脚部片が 2 点ある。1 点は、土師器高杯と同様に多面体に面取りした長脚のものである。杯部より裾部へ大まかに 4 面にヘラケズリしたのち、さらに稜をヘラケズリし断面が 8 角形となる。

甕 (43) は口縁部片および体部片がある。細片のため全形は窺えない。

陶硯 中空円面硯が 1 点と転用硯が 1 点ある。中空円面硯 (44) は、杯 H の口縁部内側を硯面で遮蔽したものである。器壁は概して厚い。陸と海との区別は明瞭であり、陸外周に低い突帯状の堤をもつ。調整は底部外面のみヘラケズリを施し、全面にはロクロナデを施す。底部には焼成前に孔があげられている。焼成時に空気膨張から本体を守る空気孔と思われる。口径 13.2cm、器高 4.8cm、硯部径 10.6cm。胎土は 1～2 mm の砂粒を含み灰色で硬質である。転用硯には杯 B 蓋を利用したものがある。平坦な天井部に大きな偏平なつまみをもつものである。天井部内面に使用痕が認められる。

杯 B で高い高台をもつ (39) は概ね飛鳥 IV 期 (7 世紀末) に比定できるものである。し

かしそれ以外のものは、概ね8世紀中頃から後半に比定できるものであり、SD 402埋没の時期を示している。

(5) SD 404出土の土器（第4次発掘調査）〔ARTIFACT 16〕

SD 404からは土師器の杯が数個体分出土している。(45)は杯Aで口縁部A形態のものである。b手法で内面には比較的粗い一段放射暗文を施す。時期的には概ね平城宮Ⅲ期に比定できるものである。

(6) SK 411 出土の土器（第4次発掘調査）〔ARTIFACT 17〕

SK 411からは、土師器では杯・皿、須恵器では杯蓋・壺、黒色土器では碗・小型の甕のほか、灰釉陶器の碗・水注がある。量的にはコンテナ5分の1程である。時代的には、平安時代前期（9世紀前半）のものである。

土師器 土師器には杯A・皿Aのほか、器形が不明なつまみや把手片がある。

杯A（55～57）は小さな平底から内彎気味に立ち上がる口縁部をもつもの（55・56）と、外上方に開く口縁部をもつもの（57）とがある。口縁部はすべてA形態で暗文はない。(55)・(57)はa手法を、(56)はe手法であり、体部内面にハケ調整痕跡を残す。

皿A（58）は口縁部より底部にかけての破片が数点ある。(58)はa手法、暗文はもたない。c手法を施すものもみられる。

つまみが1点ある。径3.5cm、高さ3.5cmを測る。断面正方形を呈す中空のつまみである。外面はハケ調整を施す。把手は甕の体部に付くものと思われる。比較的偏平なものである。

須恵器 須恵器には杯B蓋と壺Lがある。

杯B蓋（62）は天井のつまみである。

壺L（63・64）は口縁部片1点、底部片2点がある。平坦な底部に卵形の体部をもつものである。(63)と(64)は同器形の大小である。両者とも底部外面には回転糸切り痕をとどめる。

黒色土器 黒色土器には黒色土器A類の碗が2点と甕が1点ある。

碗A（59・60）は小さな平底と内彎して外上方に開く口縁部をもつものである。法量的・

Tab 1 土師器杯・皿 調整方法分類

a手法	底部外面をとくに調整しない
b手法	底部外面のみヘラケズリ
c手法	底部から口縁部に至る外面全体にヘラケズリ
e手法	口縁部上端だけをヨコナデ、それ以下は不調整

それぞれは原則として、内面および口縁部にはヨコナデを施す。

形態的に2タイプが認められる。(59)はやや深めの碗である。内面はハケ調整ののち丁寧なヘラミガキを施す。(60)は小型の碗である。内面はナデ調整ののち丁寧なヘラミガキを施す。両者とも、口縁部外面上半に炭素の付着がみられる。

甕（61）は丸い体部に外反する短い口縁部をもつ小型の甕である。内面はナデ調整ののちヘラミ

ガキを、口縁部はハケ調整ののちヨコナデを施す。

灰釉陶器 灰釉陶器には椀・水注がある。東海系の灰釉陶器である。

椀 (65) は口縁部より高台にかけての破片が1点ある。(65) は灰白色を呈し硬質で磁器に近い胎土である。口縁端部は外反し、高台 a 形態のものである。刷毛塗りによって、内面は厚く、口縁部外面は薄く施釉する。

水注 (66) は体部より底部にかけての破片1個体分がある。徳利形の体部をもつ。ロクロ成形。胎土は灰白色で硬質である。底部はいわゆる平高台である。外底面に回転糸切り痕跡を留める。釉は流しかけ。釉が肩部から体部下半にかけて厚く垂れ下っている。

灰釉陶器は黒笹14号窯式に比定できる。主体となる土器は、平城京SD 650 Aの様相に類似することから、概ね9世紀前半の年代があたえられる。しかし、(57) については、平城京SD 650 Bや平安京右京一条三坊十町SG 177 B出土土器に類似し、新しい要素も見い出せる。^{文27}^{文39}

(7) 寺域北部地区遺物包含層出土の土器 (第4次発掘調査) (ARTIFACT 16)

第3次発掘調査と同様に、第4次発掘調査においても遺構内出土以外すべてを遺物包含層出土土器として取り扱う。土師器では杯・皿・甕、須恵器では杯・杯蓋・高杯・壺、黒色土器では杯・皿、瓦器は椀がある。他に灰釉陶器の椀、緑釉陶器、輸入磁器、転用硯がある。量的には、コンテナー1箱分であり、そのうち8割程を須恵器が占める。時代的には飛鳥時代(7世紀初頭)から鎌倉時代(12世紀前半)にいたるものである。

土師器 土師器には杯 A・皿 A・甕がある。

杯 A は口縁部片が数点ある。a 手法で、内面に一段放射暗文を施すものがみられる。

皿 A (47) は口縁部片が数点ある。(47) は口縁部 A 形態のものである。c 手法で暗文はもたない。(47) 以外、c 手法のものがいくつかみられる。

甕は口縁部片および体部片が数点ある。口縁部は短く外反するものである。端部において丸く肥厚させるものと、内側に折り返し肥厚させるものがある。

須恵器 須恵器には、杯 B・杯 B 蓋・杯 G・杯 G 蓋・杯 H・高杯・壺 B・甕がある。

杯 B は底部片が数点ある。高台は比較的高い。

杯 B 蓋 (46) は口縁部片が数点ある。(46) は口縁部 A 形態のものである。天井部内面に摩滅痕が認められる。転用硯か。

杯 G (50) は底部片が1点ある。底部外面にへら起し痕をとどめる。

杯 G 蓋 (48) は口縁部片が数点ある。内面のかえりが退化したものである。

杯 H (49) は口縁部片が数点ある。(49) は古墳時代の伝統的杯の最末期のものである。

高杯 (51) は古墳時代の伝統を引くものである。(51) は脚部が接合面より欠落したもの

である。

壺 B (54) は肩部から体部上半にかけての破片が1点ある。

甕は口縁部片がある。口縁端部に外傾する端面をもつものである。

黒色土器 黒色土器には A 類の杯・皿の細片が数点ある。杯は断面三角形を呈す低い高台をもつものである。内面は丁寧なヘラミガキを施す。外面は不調整である。

瓦器 瓦器には椀の口縁部片が数点ある。(53) は外面にも若干のヘラミガキを施す。

灰釉陶器 椀の底部片が1点ある。(52) は硬質で灰色を呈す胎土をもつ。高台は基本的には高台 b で貼り付け高台である。外端の面取りが弱く高台が内傾するものである。底部中央部には回転糸切り痕を残す。底部内面の一部に施釉が認められる。

緑釉陶器 椀の底部片 (90) が1点ある。胎土は軟質で黄白色を呈す。高台は平高台である。摩滅が著しく釉の剝離が進行している。淡黄緑色の施釉が全面に認められる。

輸入磁器 口径11cm 前後の同安窯系青磁小皿の底部片が1点ある。底部内面に櫛描文様を施すものである。胎土は硬質で灰白色を呈す。底部外面を除く全面に施釉されている。

陶硯 陶硯では転用硯が1点ある。須恵器杯 B 蓋を利用したものである。口縁部から天井部にかけての破片である。天井部内面に墨の付着と使用痕が認められる。

以上の土器は全体的にその遺存状況は悪い。したがって特徴をよく示すものを選び土器の年代を考える。寺院建立以前のものとしては、(48)・(49)・(51) がある。概ね飛鳥 I 期から II 期 (7 世紀前半～中頃) に比定できるものである。(50) は概ね 7 世紀後半に比定でき、創建期ごろのものと思われる。(47)・(54) は概ね 9 世紀前半に比定できる。灰釉陶器 (52) は東海系のものである。折戸 53 号窯様式^{文13}と思われ、11 世紀ごろのものと思われる。瓦器椀 (53) は、12 世紀前半頃のものである。

(8) 金堂跡出土の土器 (SB 501 第 5 次発掘調査) [ARTIFACT 17・Fig 25]

第 5 次発掘調査では、土壙・溝等の遺構からの一括遺物はない。すべて金堂廃絶後に堆積した瓦や、その上にさらに堆積した遺物包含層からのものである。ここでは、第 5 次発掘調査出土の土器すべてを、金堂跡出土土器として取り扱う。土師器では杯・皿・羽釜、須恵器では杯・杯蓋・皿・甕、瓦器では椀・皿・鉢・盤・鍋・羽釜のほか、鉛釉陶器の瓶・壺、陶硯がある。量的にはコンテナ 1 箱分程であり、土師器・須恵器・瓦器によってほぼ 3 等分される。時期的には一部混入品はあるものの奈良時代 (8 世紀後半) と鎌倉時代 (12～13 世紀) とに 2 分される。また第 1 次発掘調査では、須恵器の杯や浄瓶^{文17}が出土している。

土師器 土師器には杯 A・皿 A・燈明皿・羽釜がある。大半が細片のもので遺存状況は悪い。

杯 A は口縁部 A 形態のものが数点ある。c 手法のものがみられる。

皿 A は口縁部から底部にかけてのものが1点ある。a手法で内面に一段放射暗文を施す。

(75・77・78) は小皿でありいわゆる「かわらけ」である。口縁端部にススの付着が認められ、燈明皿として使用されたことがわかる。

羽釜 (70) は口縁部片が数個体分ある。直立する体部に内傾する口縁部をもつ。口縁端部を外側に折り返し肥厚させる。鏝は短く断面が長方形を呈す。

須恵器 須恵器には、杯 B・杯 B 蓋・杯 G・皿 E・甕がある。また、第1次発掘調査では浄瓶の破片が出土している。

杯 B (73) は口縁部から底部にかけての破片が数点ある。

杯 B 蓋 (72) は口縁部から天井部にかけての破片が数点ある。(72) は口縁部 A 形態のものである。

杯 G は底部から体部にかけての破片が1点ある。底部外面にはヘラ起し痕をとどめる。

皿 E (74) は口縁部片が1点ある。摩滅が著しく調整不明である。

甕は口縁部片および体部片が数点ある。

浄瓶 (80) [Fig 25] は注口部が第1次発掘調査で出土している。口縁部と体部との接合部分はヘラにより面取りを行なっている。

瓦器 瓦器には椀・皿・盤・鍋・羽釜がある。時期的には概ね12~13世紀のものである。

椀は口縁部片が数点ある。摩滅が著しく調整は不明である。

皿 (76) は口縁部片が1点出土している。土師器の杯 A に似る。

鉢 (67) は口縁部より体部下半にかけての破片が1点ある。形態的にも、調整技法的にも須恵器の鉢 A に似る。いわゆる鉄鉢形のものである。口径 21.0cm を測る。胎土は灰白色の軟質のものである。内面および口縁部は黒灰色を呈す。

盤 (71) は平坦な底部から短く内彎する口縁部をもつものである。(71) は内面および口縁部にはヨコナデを施す。

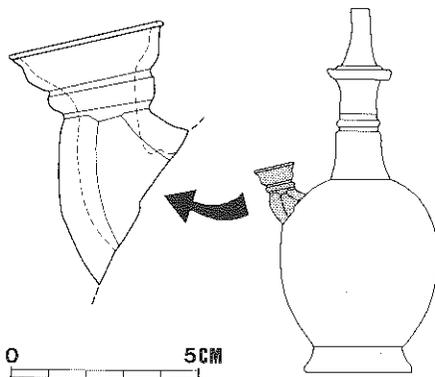


Fig 25 浄瓶実測図 (第1次)

鍋 (68) は口縁部から体部下半にかけての破片が数点ある。(68) は外面全体にススが付着している。

羽釜 (69) は口縁部片数個体分がある。(69) は口縁部直下に鏝が付くものであり、口縁端部には端面をもつ。

鉛釉陶器 (79・巻頭図版 87~89) は壺口縁部細片1点と体部片3点がある。(79) は、多口瓶の肩部に付けられる口縁部片である。胎土は軟質で黄

白色を呈す。内部は黒灰色部分もみられる。調整はユビオサエのちナデ調整を施す。外面の釉は剥離しているが、内面の一部に白釉が残る。(巻頭図版 87) は長頸壺の口縁部である。胎土は軟質で黄白色を呈す。内面および口縁端部には緑釉を、外面には白釉を施す。壺体部片 2 点 (巻頭図版 88・89) は両者とも軟質で黄白色の胎土である。(88) は釉の残りは良好で外面に緑釉と白釉を施す。(89) は摩滅が著しく釉の剥離が進行している。外面に緑釉と白釉とを施す。二彩の壺の破片である。

陶硯 転用硯が 2 点ある。(92) は須恵器杯 B 蓋を利用したものである。天井部内面中央部に使用痕が認められる。

(72~74) は 8 世紀後半に比定できるものである。このあと年代的に一定のまとまりをもつのは、(68~71) の瓦器類である。これらは、平安京左京内膳町 SE 326 上層や SE 255 出土のものに類似することから、概ね 13 世紀後半から 14 世紀前半に比定できる。^{注34}

以上の土器は、金堂廃絶後の瓦の堆積中および寺院の整地面直上より出土したものとそれらを覆う遺物包含層中のものとに大別することができる。前者は、(67)・(72~75)・(79) の土師器・須恵器・鉛釉陶器などであり、後者は、(68~71)・(76~78) の瓦器・燈明皿などである。前者は、前節で述べたように金堂が平安時代前期には存在していたことから、明らかに金堂がまだ建っていた時の遺物である。鉛釉陶器類はおそらく金堂内の仏具として用いられたものであろう。金堂がいつ廃絶したのか、その鍵となるのは後者の土器群である。瓦器類が目立つことはすでに述べた。器形としては鍋や羽釜などの煮沸具が多い。一般的にみて、このようないわゆる日常生活の中で使用するものが多く出土するようになるということは、人々の生活がすでにこのあたりまで及んでいると見てよい。金堂はこれらの瓦器類が示す年代、すなわち 13 世紀後半から 14 世紀前半には廃絶していたと思われる。

(9) 寺域南部地区遺物包含層出土の土器 (第 7 次発掘調査) [Fig 26]

第 7 次発掘調査では、土師器の杯・甕、須恵器の杯・杯蓋・鉢がある。量的には、コンテナ 4 分の 1 程でその 8 割を土師器と須恵器が折半する。年代的には 8 世紀初頭頃である。

土師器 土師器は杯の口縁部片数点と甕口縁部片および体部片数点がある。

杯 A (81) は口縁部より底部にかけての破片が数点ある。口縁部は A 形態・B 形態の両者が認められる。調整はすべて a 手法による。(81) は丁寧な二段放射暗文をもつ。

甕は口縁部片と体部片が数点ある。口縁部片は短く外反するもので端面が外傾する。体部片は内外面ともハケ調整である。外面の一部にヘラケズリを施すものもある。

須恵器 須恵器では杯 A・杯 B 蓋・杯 G・杯 H 蓋・鉢・甕がある。

杯 A (83~85) は口縁部より底部にかけての破片が数点ある。口径 11cm 前後、器高 3cm 前後を測るものである。

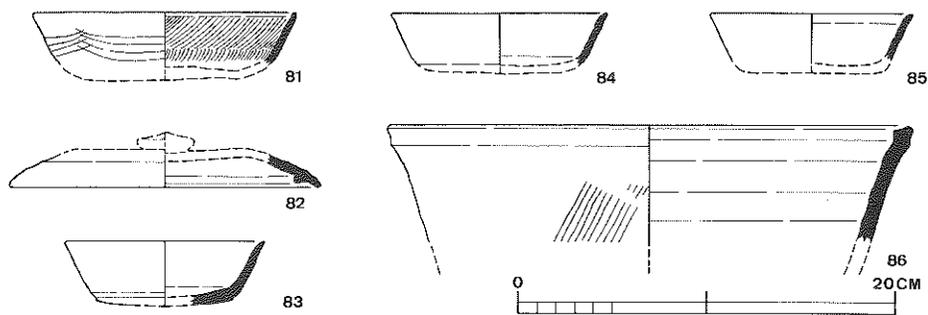


Fig 26 寺域南部地区遺物包含層出土土器実測図（第7次）

杯B蓋（82）は高い高台をもつ杯Bに対応する蓋である。（82）は内面にかえりをもつ。
杯Gは底部から体部にかけての破片が数点ある。底部外面にへう起し痕をとどめる。
杯H蓋は口縁部片が数点ある。

鉢（86）は外上方に直線的にのびる体部と口縁部をもつものである。体部外面にタタキが残る。甗の可能性もある。

甗は体部片が数点ある。灰白色で軟質の胎土のものである。摩滅が著しく調整不明。

（82）は飛鳥IV期頃に比定できるもので、寺院創建期のものであるといえる。（81）・（83～86）は概ね平城宮I期ないしII期に比定できるものであり、実年代では8世紀初頭より前半の年代がもとめられる。

また、第6次調査では、土師器や須恵器の細片が少量出土しているが、図化できないものばかりである。第6次調査では近世陶器も出土しているが、本報告ではこれらについては一切割愛した。

以上、第3次から第7次調査で出土した土器の様相を報告した。すでにのべたとおり、膨大な量が出土している瓦類に対して土器類は非常に少ない。また、細片化しているものが多く、法量や器形を復元できたものはここに図示したものをさほど上廻らない。このため、遺構の年代を決定するには、やや不安な部分があることは否めない。今後の資料蓄積をまって詳細な検討が必要であろう。

第3節 金属製品・その他

第3次発掘調査より第7次発掘調査の中で、土器類・瓦類とともに若干の金属製品・石製品が出土している。出土場所は、主に第5次発掘調査の金堂跡（SB 501）の遺物包含層である。金属製品は鉄製の釘・鏝があり、その他の金属製品はない。石製品は凝灰岩製のものが1点ある。以下、種類ごとに報告する。

（1）鉄製品 [Fig 27]

鉄製品では釘・鏝がある。出土総数は30個体程である。その大半は釘によって占められており、鏝は数個体である。全体に錆化が著しく全形を窺える個体は少ない。

鉄釘 鍛造の角釘が30点程ある。これらは、釘頭部の形態によりA～Cの3種類に分類することができる。以下、その分類ごとに順次述べる。

釘A（9～12）は釘頭部を直角に折り曲げるものである。釘頭部が扁平なもの（9）や肥厚するもの（10）もみられる。針部はいずれも断面方形である。復元長7～8.5cm。

釘B（2・3）は釘頭部がゆるやかに曲がるものである。いずれも針部は断面方形をなす。復元長5cm程の小型の釘である。

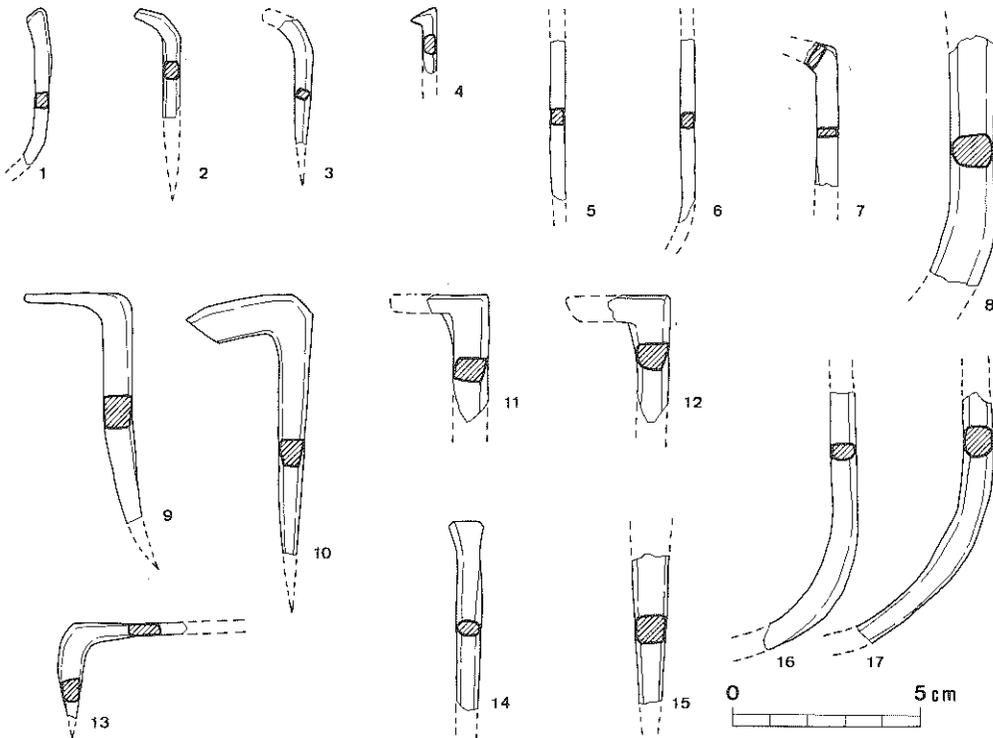


Fig 27 鉄製品 実測図（第5次）

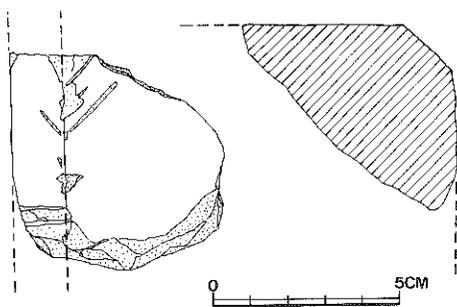


Fig 28 石製品 実測図(第5次)

釘 C (1・4・14) は釘頭部が方頭形をなすものである。いずれも針部は断面方形をなす。小型のものと大型のもの2種類がある。

鋸 鋸と思われるものが2点(7・13)ある。断面長方形の鉄製角棒の両端を折りまげたものである。針部は先細りにつくる。釘と同様に錆化が著しく全形を窺えるものはない。(13)は扁平な軸部に肥厚する針部をもつ。

不明鉄製品 両端が欠損する不明鉄製品がいくつかある。(5・6)は断面方形の棒状のものである。小型の釘 C の針部の可能性がある。現存長4.2~4.8cm。(8・16・17)は、一方の端部に向かってゆるやかに曲がるものである。断面は扁平な8角形をなす。

(2) 石製品 [Fig28]

不明石製品が1点ある。隅切りをした柱状の凝灰石の断片である。両端が欠損し全形は窺えない。表面は平滑に仕上げる。現存長6.5cm、幅7.2cm、厚さ3.6cmを測る。

以上、特に第5次調査で出土した金属製品・石製品の概要を報告した。多くが細片化しているため、正確な法量については窺うことはできないものの、これらは、出土状況から考えて、金堂に使用されたものであることは確かであろう。

第3次・第4次調査でも、若干、鉄製品が出土しているが細片のためここで図示し報告することを割愛した。

第V章 考 察

第1節 伽藍配置と規模

古代の寺院は、現代に残る法隆寺のように広大な敷地を塀や柵で囲み、その中に廻廊で囲まれた金堂や塔などの大規模な建物をもつものであるのが一般的である。塀や柵で囲まれた寺の敷地を寺域ないしは寺地と呼び、金堂や塔などの主要な建物の配置のしかたを伽藍配置と呼んでいる。寺域や伽藍配置には一定の規則性が認められるのが通例であり、大和国の主要寺院の伽藍配置を標式として「○○寺式伽藍配置」と呼ばれている。

ここでは、大鳳寺跡の寺域の規模と伽藍配置の復元を試みたい。

寺域の規模 寺域を画する施設として、一般的には築地塀（築地）・柵・溝などがある。築地塀はふつう最も整った施設で、版築と呼ばれる方法で土をつき固めた土塀である。土塀の内側と外側には側溝と呼ばれる溝をめぐらしている。遺跡では、土塀はすでになくなっている場合が多く、側溝のみを検出することが多い。

大鳳寺で、この寺域を画する施設は溝のSD 402と築地のSA 701がある。前者が寺の北限を、後者が南限を画す。

SD 402は、幅約2.3mの素掘りの東西溝である。東に対して 3° ほど南へ傾く。これは、後述する金堂とは平行ないし直行せず、金堂の東西辺に対して $3^{\circ}30'$ ほど北へ偏する。

SA 701は、南・北側の側溝を検出した。ごく一部の検出であるため不安ではあるが、概ね $8^{\circ}30'$ 東に対して南へ傾く南北築地とみてよい。金堂の東西辺が $6^{\circ}30'$ ほど南へ傾くのとは比べるとさらに 2° ほど南へ偏することとなる。

このように、SD 402とSA 701は、必ずしも平行せず、東へ行くほどその距離は広がることとなっている。ただ、前述したように、SA 701に関しては、一部の検出であるためその方位はさらに数個所の調査において決定すべきであろう。

寺域の南北の距離は、金堂の西辺延長部で、それぞれの中心間の距離が約112.0mである。

西限については、SD 402が藪里と西中とを分ける道路付近で南へ折れまがっているため、この現在の道路付近を寺域西限と考えたい。道路西側の現在の宇治高等学校第2グラウンドと道路面とは、現状で約1～2.5mの比高差があり、道路の方が高い。この比高差は、昭和52年にグラウンドが造成される以前よりあり、かつては道路にそってグラウンド側にゆるやかな崖が存在していた。この地形の状況も寺域西限をここに求めることの根拠となろう。

東限については、未検出であり不明である。西中の東側は民家がたて混んでおり、今後と

もその検出には困難な状況が予測される。しかし、何か現状で手懸りはないか。前述したように、寺域西限は現在の字界をなす南北道路に予想される。また、南限を画する SA 701 は西中の中の東西方向の小道にほぼ平行している。ここから、現在のこのあたりの字界や土地利用状況がかったの寺の地割を概ね踏襲しているのではないか、という想定を導き出すことができはしないか。この想定にたつと、西中と東中を分ける道路は、SA 701 の延長線上で藪里と西中を分ける南北道路（推定寺院西限付近）と約 112m の距離をもつことから考えて、寺域東限となる可能性が生まれる。このあたりが、近代・現代の中で大きな土地利用の改変を受けていない事を思えば、この想定は蓋然性が高い。

以上から、寺域を復元すれば、大鳳寺は南北・東西とも約 112m のやや台形状の敷地をもつことになる。寺域を画する施設は南が築地、北が溝であることは理解できたが、東・西については不明である。ただ、西限に想定される南北道路は、舗装前には路面に多くの瓦片が散乱していたという。この状況を積極的に理解すれば、東・西を画する施設は築地であった可能性もある。いずれにしろ、今後の調査で確認しなければならない。

法起寺式伽藍配置 寺院を構成する建物は、ふつう、金堂・塔・講堂・中門・廻廊・南門・僧房・食堂・鐘楼・経蔵などがある。このうち前5者を中心伽藍とよび、その配置のしかたを伽藍配置という。遺跡では、金堂・塔・講堂のように比較的高い基壇をもつ建物が検出される場合が多く、他の建物はなかなか見つからないことが多い。

大鳳寺で検出した明確な中心伽藍は金堂だけである。ここから伽藍配置を確定するのは難しい。しかし、金堂東側にある基壇上の土盛り SX 601 を建物の基壇と考えれば一定の想定は可能である。SX 601 は西辺の一部を検出したにすぎないが、それは金堂とほぼ平行する。そして、金堂と SX 601 との間に寺域の概ねの南北の中心線を想定することができる。当時の寺院は、通常、塔を備えており、金堂の東側・西側もしくは南側のいずれかに建てられる場合が多い。大鳳寺で、金堂の西側及び南側に塔を求めるのは、現地形と寺域との関係から考えて無理がある。現状では、SX 601 を塔と想定し、西に金堂・東に塔を並置する南面の法起寺式伽藍配置を復元するのが最も可能性が高い。SX 601 の性格を特定することを始め、講堂・廻廊・中門・南門等の建物を今後追求し、さらにその伽藍配置の詳細を明確にする課題が残されている。

金堂は、北に対して約 8°西に偏して建てられている。寺域を画する施設とは現状では必ずしも平行ないし直行しない。この点も今後の調査課題であろう。

最後に造営尺を金堂基壇より想定しておく。基壇の下成基壇を除く南北長は 16.1m であり概ね 50 尺に相当し、東西長 19.5m は概ね 60 尺に相当する。ここから、1 尺の長さを求めると約 32.2cm となる。高麗尺（曲尺×1.173）と唐尺（曲尺×0.978）の中間の長さである。

第2節 大鳳寺の変遷

第3次発掘調査より第7次発掘調査で得られた成果より、大鳳寺はその変遷を、寺院創建以前の時期・寺院創建の時期・奈良時代改修の時期・平安時代改修の時期・寺院廃絶の時期の5期に分けることが可能である。以下、各期の概要を順次述べ、大鳳寺の創建とその後の変遷について考えてみたい。

(1) 寺院創建以前

近年の大型開発により、大鳳寺跡周辺の考古学的環境も徐々に明らかになってきたことは先述のとおりである。その成果を飛鳥時代から奈良時代の集落遺跡に絞って概観したい。

大鳳寺跡をとりまく集落遺跡として、隼上り遺跡・東中遺跡・菟道遺跡がある。^{文44・}隼上り遺跡⁵⁶は大鳳寺跡北側丘陵上にあり、総数20棟前後の掘立柱建物が検出されている。主体となる時代は奈良時代であるが、近接する隼上り瓦窯跡^{文44}の瓦類が柱穴・土壇^{文56}から出土しており、瓦窯との関連を推測できることから、集落の形成は飛鳥時代に遡るものと考えられる。^{文62・67、}東中遺跡^{註1}は大鳳寺跡に東接する標高50m程の台地上に立地し、奈良時代の掘立柱建物が数棟検出されている。白鳳時代より平安時代にかけての集落遺跡である。以上の2遺跡が現在その内容を^{文62・67}知り得る集落遺跡である。菟道遺跡は大鳳寺跡南側の平野部にひろがる遺物散布地であり、古墳時代に比定できる須恵器片が採集されることから、寺院創建以前の集落の存在を予測できる。

これまでの調査において、大鳳寺建立前の明確な遺構は検出していない。しかし、土器の検討より明らかに7世紀初頭より前半（飛鳥Ⅰ期・Ⅱ期）に比定できるものが寺域内の遺物包含層より出土している。このような土器の出土状況と周辺の集落跡の立地状況を積極的に理解するならば、大鳳寺跡創建期整地層下にも寺院創建以前の集落の存在を予測することも充分可能である。

(2) 創建

これまでの調査において、軒丸瓦ではNM01～NM07の7形式、軒平瓦ではNH01～NH03の3形式、平瓦では平瓦A・Bの2形式、丸瓦では丸瓦A・Bの2形式を確認することができた。一般的に寺跡出土の瓦のうち最も古くかつ出土比率が高いものは創建瓦として^{文6}いる。従って大鳳寺跡の場合、軒丸瓦はNM01、軒平瓦はNH01、平瓦は平瓦A（格子叩き）、丸瓦は丸瓦A（行基式）が創建瓦となる。NM01はNH01とセットをなすもので、天智元年（662）以降から天武2年（674）までの間に創建された川原寺の創建瓦を^{文6}標式とする川原寺式と呼ばれるものである。NM01はこの川原寺の創建瓦の文様構成の基本を忠実に踏襲している。しかし、NM01は全体的に躍動感がなく、中房蓮子周囲の圏線や外縁内

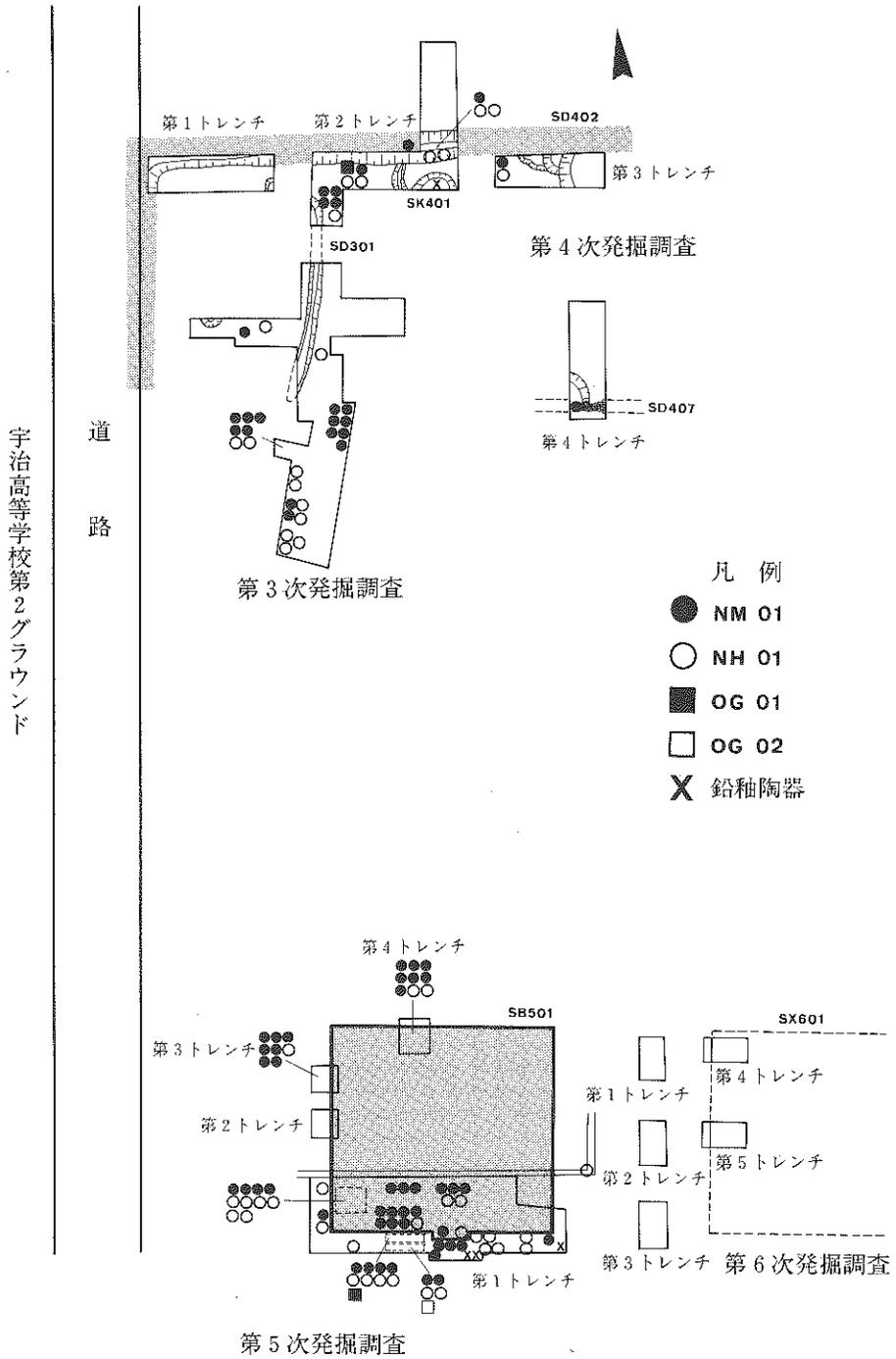


Fig 29 創建瓦出土位置略図

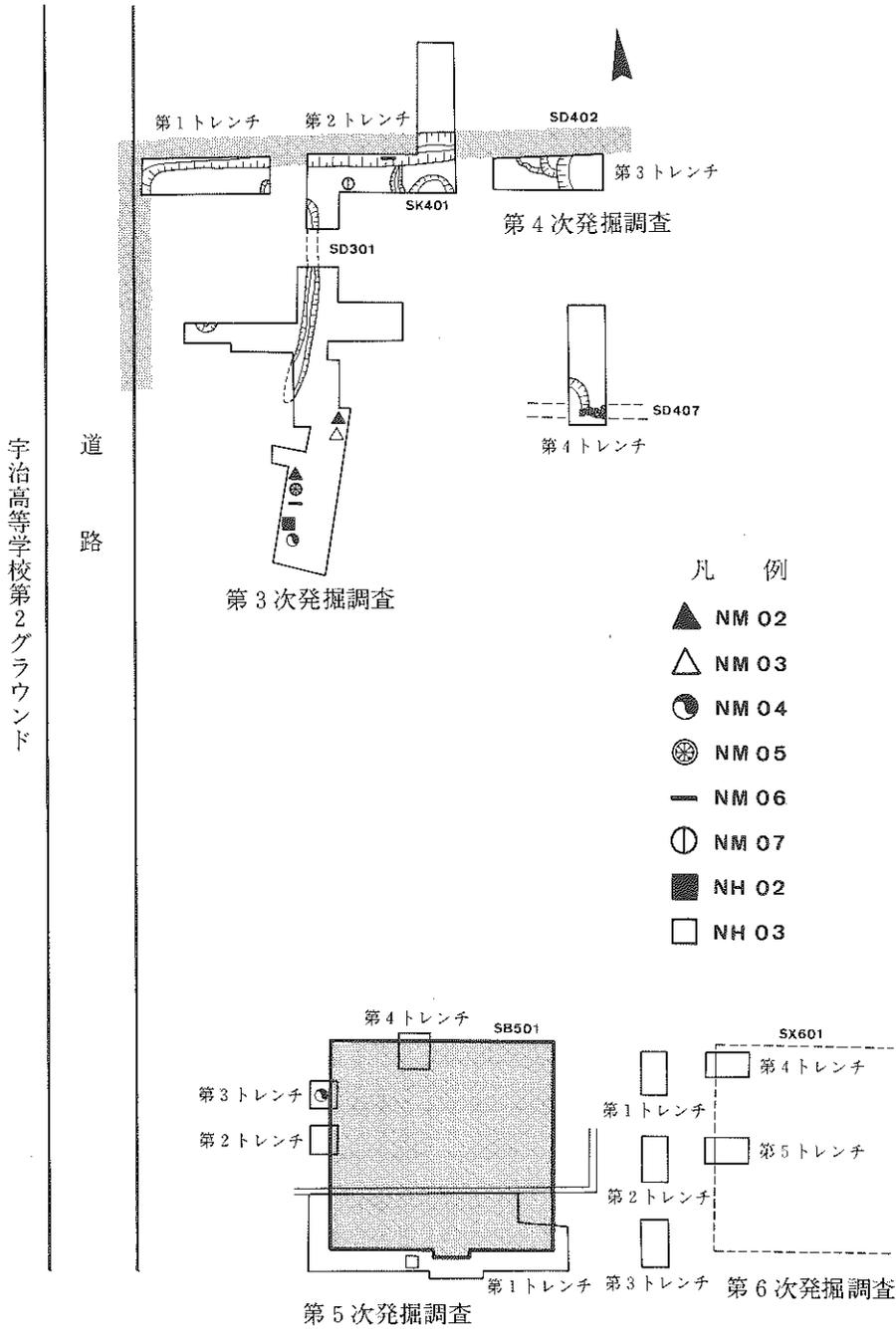


Fig 30 補修瓦出土位置略図

側の圈線を失っていることから、やや新しい。川原寺の創建年代には問題のあるところだが、少なくとも天武2年(674)^{文6}以前には完成していたとすれば、大鳳寺跡は674年よりさほど時間的経過をまたずして建立されたと考えられる。創建年代は7世紀後半代としてよい。

NM01は、軒丸瓦出土総数83個体のうち75個体を占めている。すべて同一範である。出土場所は寺域北部地区遺物包含層及びSD402を始めSB501(金堂)である。NH01は、軒平瓦出土総数59個体のうち55個体を占める。出土場所はNM01と同様である。平瓦A及び丸瓦Bにおいても同様である。このような創建瓦の出土状況を積極的に理解するならば、大鳳寺はその創建に際して、寺域の画する築地塀や付属建物群にいたるまでこれらの瓦を使って、短期間に整備された可能性が指摘できる。また、寺域北部地区に建物跡を想定したのは、この地区からも多量の瓦が出土することからである。この中には鬼瓦(OG01)が含まれている。このことは先の想定を補強する。

SD402をはじめ、寺域北部地区で出土したNM01には範の摩滅・キズがよく見られる。大鳳寺の造営が周辺部にいたるまで一時期において成立したとすれば、範のいたみ具合より寺院の造営が伽藍中枢部より始まり、そして周辺部へと進行していった様子を認めることができる。ただ、調査は寺域内の一部に留まっているため、今後の調査をまたねばその具体的様相は明確とならない。

ここで再度整理すれば、大鳳寺の創建はNM01とNH01をセットとする川原寺式の軒丸瓦と重弧文の軒平瓦によって、伽藍中枢部はもちろん寺域周辺の建物にいたるまで7世紀後半代にその体裁を整えていたと考えられる。

(3) 奈良時代の改修

奈良時代の改修は、軒丸瓦ではNM02・NM03・NM04、軒平瓦ではNH02、平瓦B、丸瓦Bが使用される。これらの補修瓦の比率は、軒丸瓦総数中4.8%、軒平瓦では1.8%にすぎず、比較的小規模の改修であったと考えられる。形式的には、NM02は平城宮6133-H、NM03は平城宮6225系、NM04は平城宮6282系、NH02は平城宮6663-Cである。平城宮6282系・同6133系はともに大膳職所用瓦であり、平城宮6225系と同6663-Cは第2次大極殿・朝堂院を代表する瓦である。以上の4種は、聖武天皇が恭仁宮・紫香楽宮・難波宮を経て、天平17年(745)、平城京に還都した後の造営に使用されたものである。平城宮Ⅲ期(天平17年~天平勝宝年間)^{文22・42}に比定できるものである。これらの補修瓦から奈良時代の改修の時期は、概ね平城宮Ⅲ期以降、つまり実年代では天平17年(745)以降といえる。次の改修は、瓦でみる限り平安時代前期である。この間の70~80年は瓦の葺き替えは行なわれていない。

これらの補修瓦は個体数が少ないものの、寺域北部地区に集中するという傾向がある。寺域北部地区に想定した建物を中心に、奈良時代の改修は行なわれたのであろうか。ただ、この

場合、建物相互間の創建瓦の移動は考えないとしなければならない。

奈良時代の大鳳寺跡の様相の復元を試みるうえで問題となるのは寺域の問題である。SD 402がこの時代の改修時に埋めたてられたと考えられることは、既に指摘したとおりである。SD 402が創建期の北限を画する溝であることから、大鳳寺は創建以来の寺域がこの時期に変動している可能性がある。しかし、寺域北部地区では、土器の検討から9世紀中頃に廃絶したSD 301・SK 401等瓦を多量に出土する遺構があり、また、SD 402の埋めたて後に掘られたSK 411からは灰釉陶器も出土していることから、SD 402の廃絶は、ただちに寺域の縮小につながらない。奈良時代の改修の実態は今後の調査にゆだねたい。

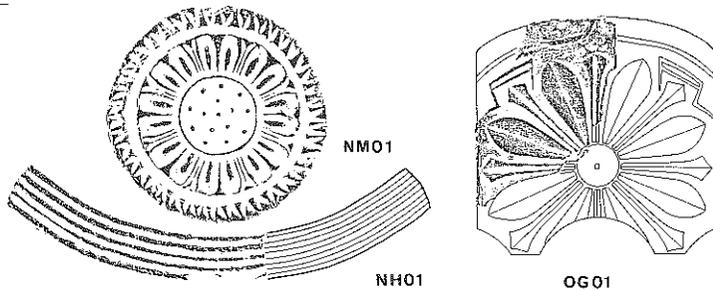
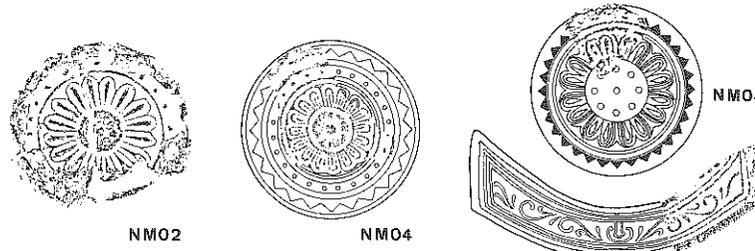
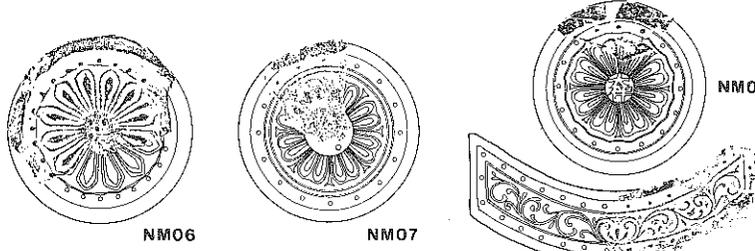
年代	大鳳寺出土の軒瓦・鬼瓦	備考
674 (川原寺創建)		創建瓦
710 (平城京遷都) 745 (平城京遷都)		奈良時代の補修瓦
794 (平安京遷都)		平安時代前期の補修瓦

Fig 31 大鳳寺跡出土軒瓦等編年図

(4) 平安時代の改修

平安時代においても再度の改修が行なわれていることが瓦によって確認できる。この改修は、軒丸瓦では NM 05・NM 06・NM 07、軒平瓦では NH 03 が使用される。これらの補修瓦の比率は、軒丸瓦総数中 4.8%、軒平瓦では 1.8% にすぎず、奈良時代の改修と同様小規模の改修であったと考えられる。これらはすべて平安時代前期のものである。NM 05 は、東寺をはじめ広隆寺・珍皇寺（愛宕寺）・禅林寺に出土例がある。年代的には弘仁 14 年（824）^{文49}以前のも^{文38}と考えられ、平安時代初頭の瓦である。NM 06 は管見の限りでは類例がない。宇治市東部の丘陵地帯では、奈良時代～平安時代と思われる瓦窯がいくつか存在する。NM 06 はこれらの瓦窯で生産された可能性がある。NM 07・NH 03 は西賀茂瓦窯製^{文30}であり、平安時代前期の平安宮所用瓦である。これらの補修瓦から平安時代の改修は、概ね平安時代前期に実施されたと考えられる。

平安時代前期の補修瓦は、金堂をはじめ寺域北部地区でも出土していることから、この時期、大鳳寺は白鳳時代の創建以来の建物が存在していたと考えられる。また、SD 301・SK 401 は 9 世紀中頃のものであることから、寺域北部地区に想定した建物の廃絶はこのころにもとめられるであろう。

(5) 廃 絶

大鳳寺跡は、白鳳時代（7 世紀後半）に創建され、奈良時代中頃（8 世紀中頃）、平安時代前期（9 世紀前半）の 2 度の改修を経た古代寺院であることが判明した。では、いつの時期に大鳳寺はその終焉を迎えたのであろうか。廃絶の時期について考えたい。

瓦の検討からは、前述のとおり NM 05・NM 06・NM 07・NH 03 で構成される平安時代の改修まで、寺は存在していたことが確認できる。また、土器の検討からは、平安時代の改修以後の 9 世紀後半のものも一定のまとまりをもつことから、この時期大鳳寺はその機能を果していたと推測される。しかし、それ以降土器は減少し寺院の存在を予測することは困難である。金堂跡を覆う遺物包含層からは、13 世紀後半から 14 世紀前半に比定できる瓦器の鍋・羽釜等が出土した。このことから、金堂（SB 501）は 13 世紀後半から 14 世紀前半には存在せず、かわって人々の日常の生活場所となっていたことが予想できる。「東寺文書」^{文8}は現時点で、大鳳寺の存続時期の下限を知り得る唯一の文献史料である。この中にある「大鳳寺」が当寺跡を示すとすれば、大鳳寺は仁平 2 年（1152）には存在していたこととなる。しかし、これにはやや疑問がある。それは瓦のことである。

金堂は瓦の検討から平安時代前期には存在していたことが確認できている。そして「東寺文書」の示す仁平 2 年（1152）まで金堂が存続しているとすれば、金堂は平安時代前期（9 世紀前半）から、仁平 2 年までの 300 年間 1 度も瓦の葺き替えが実施されなかったこととな

る。調査で検出した金堂跡は、明らかに創建以降150年間に2度の改修が行なわれている。そして、瓦の状況から、廃絶時も瓦葺きであったことは確かである。平安時代前期を境にして、その前と後では大きな差が生じることとなる。この問題をただちに解決できる資料はないが、ここではいくつかの可能性を掲げておきたい。

一つは、大鳳寺の全面的改修である。すなわち、平安時代前期以降のある時点で、創建以来の建物がすべてなくなり、かわって、小規模な伽藍が新たに建立されたと見るものである。この時の建物は瓦葺きではない。なぜなら、平安時代中期以降の瓦では、近世のものを除き一切出土していないからである。

もう一つの可能性は、寺地の移動があったということである。土器の減少する10世紀中頃以降に当地より他の場所へ移動したとする考え方である。すなわち、「東寺文書」の示す「大鳳寺」が、当寺の後身の他の場所の寺院を示すという考え方である。しかし、当寺跡周辺からは、12世紀中頃以降の瓦の出土はもちろん、同名の地名も見られないことはこの考え方の否定的要素であるといえる。

または、現在の遺物から知り得るとおり、平安時代中期以降は1度も瓦の葺き替えがなかったとするかである。

以上の可能性は、「東寺文書」が記載する大鳳寺が当寺跡であるという前提に立脚したうえでの問題点である。今回の調査より得られた事実からは、金堂跡が13世紀後半までには廃絶し、かわって人々の日常生活の舞台となっていたことが知り得るのみである。大鳳寺廃絶の時期とその具体的様相の解明は、文献史料の問題も含め、今後、綿密な検討を要する新たな課題といえる。

註（第2節）

註1 東中遺跡は、昭和59年～昭和60年に宇治市教育委員会が一部調査した。報告書は現在作成中である。

第3節 山城の白鳳寺院と瓦の文様

京都府は、旧国の丹波国・丹後国・山城国を含んでおり、宇治市は山城国にある。旧山城国は、相楽郡・久世郡・宇治郡・紀伊郡・愛宕郡・葛野郡・乙訓郡・綴喜郡の8郡からなり、巨椋池を中心にして、南・北山城地域とに分けることができる。山城国で、飛鳥・白鳳時代に建てられたと思われる寺院の数は、現在までのところ、33ヶ寺を数えることができる。

本節では、これらの寺院が使用した瓦当文様の分布状況を中心に発掘調査の成果をも若干含め概観したい。

山城国での白鳳期の瓦当文様は、地域ごとに一定のまとまりをもっていることが早くから指摘^{文14}されている。すなわち紀寺式雷文縁軒丸瓦と川原寺式複弁蓮華文軒丸瓦と独自の文様構成からなる軒丸瓦の3群である。

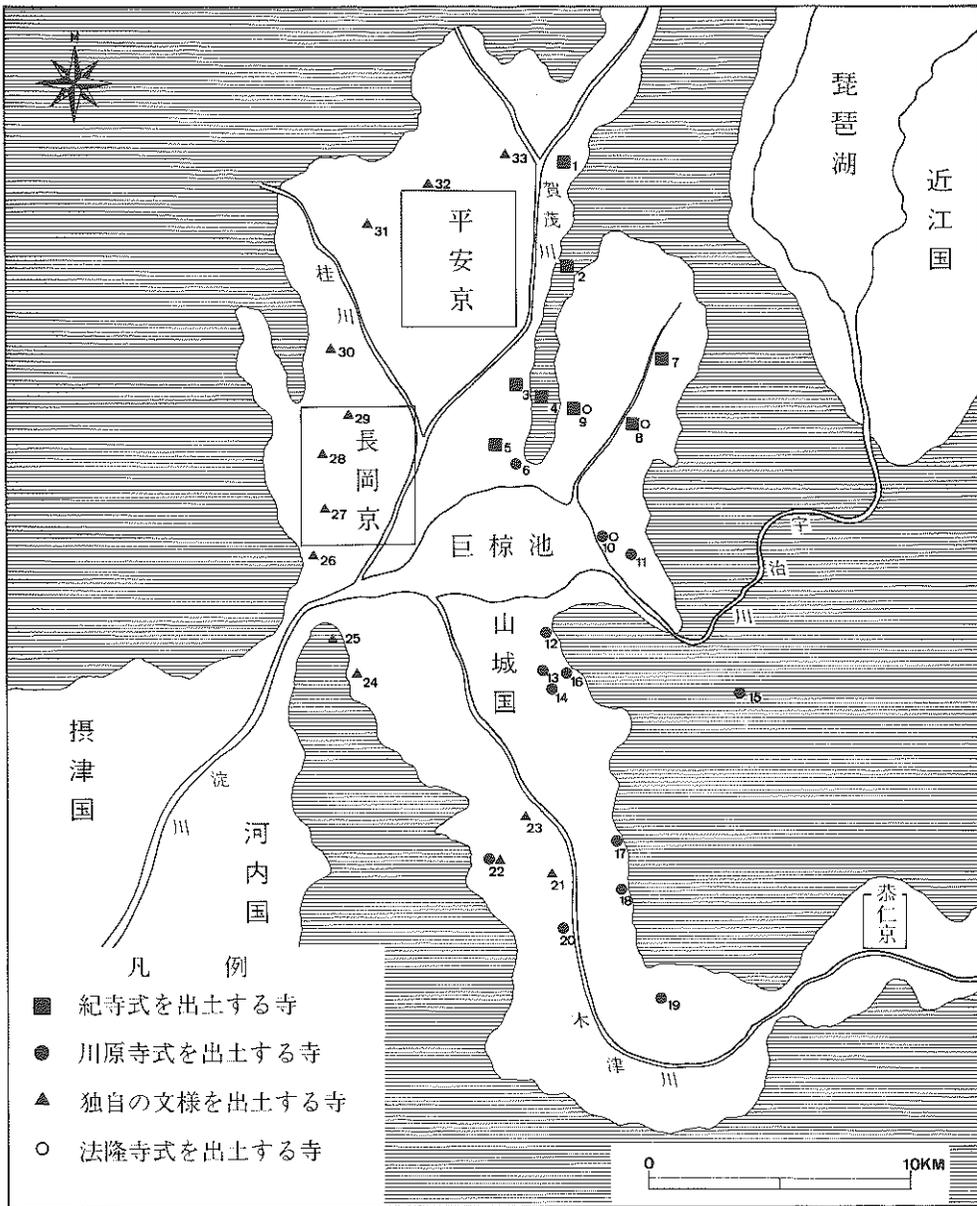
(1) 紀寺式雷文縁軒丸瓦を出土する寺々

紀寺式雷文縁軒丸瓦は、大和国紀寺創建瓦を標式とするもので、内区は川原寺式と同じ複弁蓮華文である。そして外区には雷文が巡らされている。この雷文といわれるものは雷光が文様化されたものといわれ、本来は方形を渦巻状に表現したものである。しかしこの種の瓦に使用されるものは一方が開いた方形を2個重ね合わせたようになっており、本来のものとは異なる。近江国三井寺出土瓦の中に外縁に小さな蓮弁らしきものを巡らせたものがあり、このようなものが変化して雷文となったという説もある。いずれにしても白鳳時代の瓦の文様としては特異なものとなっている。

山城国での紀寺式の分布状況は、愛宕・紀伊・宇治の3郡にのみ分布し、3郡内の寺院のほとんどがこの瓦を使用している。愛宕郡が、北白川廃寺 (Fig32-1)・法観寺跡 (Fig32-2)、紀伊郡が、深草廃寺 (Fig32-3)・おおせんどう廃寺 (Fig32-4)・板橋廃寺 (Fig32-5)、宇治郡が、大宅廃寺 (Fig32-7)・醍醐御霊廃寺 (Fig32-8)・法琳寺跡 (Fig32-9)である。これらのうちで顕著な遺構・遺物が確認されているのは、大宅廃寺と北白川廃寺である。

北白川廃寺 (京都市左京区) は、現在までに東方堂宇・廻廊・塔などが確認^{文3・26}されている。出土した軒丸瓦は紀寺式の他に、山田寺式・高句麗様式6弁文・単弁8弁文・平城宮式などがある。当寺の紀寺式は、瓦当の形態・文様構成とも均整がとれている。また、これに組み合うとされる軒平瓦には、藤原京式を標式とする変形偏行唐草文^{文32}があり、7世紀末頃のもの^{文36}とされる。山田寺式瓦は初原形式に近く、紀寺式に先行する可能性がある。しかし創建瓦とするには出土数が少ない。

大宅廃寺 (京都市山科区) は発掘調査の結果、4棟の建物跡が一直線に並ぶことが確認さ



- | | | | | | |
|---------|----------|----------|------------|-----------|---------|
| 1 北白川廃寺 | 2 法観寺跡 | 3 深草廃寺 | 4 おおせんでう廃寺 | 5 板橋廃寺 | 6 御香宮廃寺 |
| 7 大宅廃寺 | 8 醍醐御霊廃寺 | 9 法琳寺跡 | 10 岡本廃寺 | 11 大鳳寺跡 | 12 広野廃寺 |
| 13 平川廃寺 | 14 久世廃寺 | 15 山滝寺跡 | 16 正道遺跡 | 17 井手寺跡 | 18 蟹満寺 |
| 19 高麗寺跡 | 20 里廃寺 | 21 三山木廃寺 | 22 普賢寺跡 | 23 興戸廃寺 | 24 志水廃寺 |
| 25 足立寺跡 | 26 山崎廃寺 | 27 柄岡廃寺 | 28 乙訓寺 | 29 宝菩提院廃寺 | 30 標原廃寺 |
| 31 広隆寺 | 32 北野廃寺 | 33 出雲寺跡 | | | |

Fig 32 山城国の古代寺院

れている。これを南門・中門・金堂・講堂^{文4・5}に推定している。出土軒丸瓦は紀寺式の他、平安宮式等がある。紀寺式に組み合う軒平瓦は変形偏行唐草文で、7世紀末の創建と思われる。

他の紀寺式を出土する寺々では、調査件数も多くなく、また出土している瓦類も少なく寺院の様相や年代を決める明確な根拠がない。ただ法琳寺出土瓦^{文15・49}は、蓮弁の様相・中房蓮子の配列等より、やや古風な印象を受ける。

紀寺式を出土する寺々は、愛宕・紀伊・宇治の3郡内でも鴨川の東、宇治郡北部に限られた地域に位置し、愛宕郡3ヶ寺のうち2ヶ寺、紀伊郡4ヶ寺のうち3ヶ寺、宇治郡5ヶ寺のうち3ヶ寺までもがこの種の瓦を用いている。これらの寺々に共通することは、いずれも交通路沿に位置することである。またこの地域では飛鳥期の寺院跡は発見されていない。飛鳥時代においては、この地域は主要な交通路が通っていなかったのか。

(2) 川原寺式複弁蓮華文軒丸瓦を出土する寺々

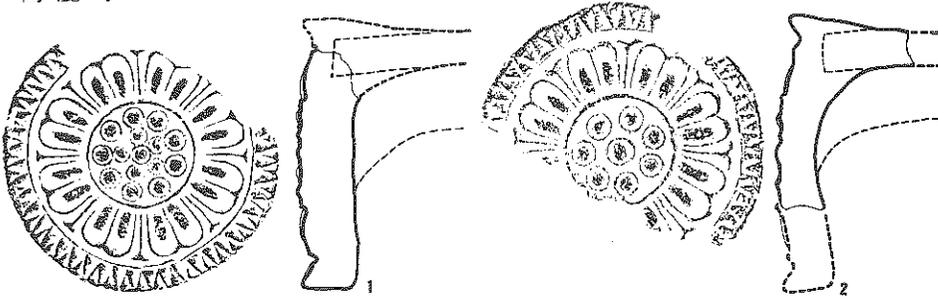
川原寺式とは、大和国川原寺創建の軒丸瓦を標式とするものである。山城国では相楽郡・久世郡に集中している。久世郡では、広野廃寺 (Fig32-12)・平川廃寺 (Fig32-13)・久世廃寺 (Fig32-14)・山滝寺跡 (Fig32-15)・正道遺跡 (Fig32-16)、相楽郡では、井手寺跡 (Fig32-17)・蟹満寺 (Fig32-18)・高麗寺跡 (Fig32-19)・里廃寺 (Fig32-20)である。宇治郡では南部に限られ、岡本廃寺 (Fig32-10)・大鳳寺跡 (Fig32-11)、紀伊郡では、御香宮廃寺 (Fig32-6)に見うけることができる。これらのうち高麗寺跡・平川廃寺・久世廃寺などは発掘調査により伽藍の状況がかなり判明している。

高麗寺跡 (相楽郡山城町)は現在までに、塔・金堂・講堂・廻廊が検出され、南面する法起寺式伽藍配置をとることが判明している。出土瓦は飛鳥時代より奈良時代におよぶ。飛鳥時代の軒丸瓦は、大和飛鳥寺創建の軒丸瓦と同範品であることが確認されている。白鳳時代の瓦は川原寺式である。高麗寺の川原寺式瓦は、大和川原寺と同範のもの (Fig33-1)とそれの発展形式 (Fig33-2)とである。軒平瓦は重弧文である。

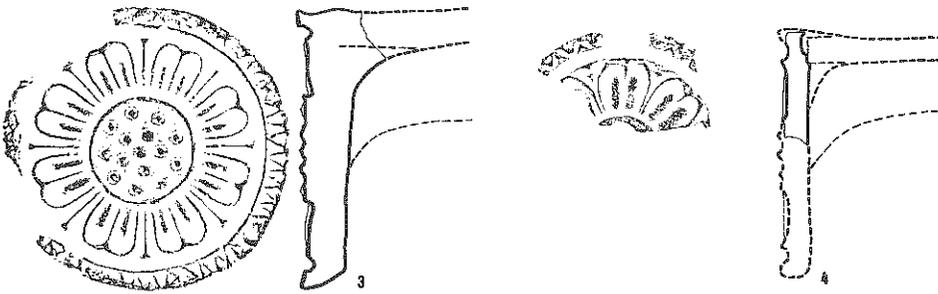
平川廃寺 (城陽市平川)は発掘調査により、塔・金堂・廻廊等が明らかとなり、南面する法隆寺式伽藍配置をとるものと推定されている。出土した軒瓦は白鳳時代より平安時代にいたる。白鳳時代の軒丸瓦は川原寺式の他、山田寺式と百濟末期様式がある。川原寺式は、大きく2種に分けることが可能である。すなわち、川原寺式のモチーフに忠実なもの (Fig33-3)と、その発展形式であるもの (Fig33-4)である。軒平瓦は重弧文であり両者に組み合うと思われる。

久世廃寺 (城陽市久世)は調査の結果、塔・金堂・講堂・廻廊・南門等が検出され、南面する法起寺式伽藍配置であることが確認されている。出土軒瓦は、飛鳥時代より平安時代まで見うけられる。飛鳥時代のものは断片ではあるが素弁8弁で、中宮寺や奥山久米寺出土例

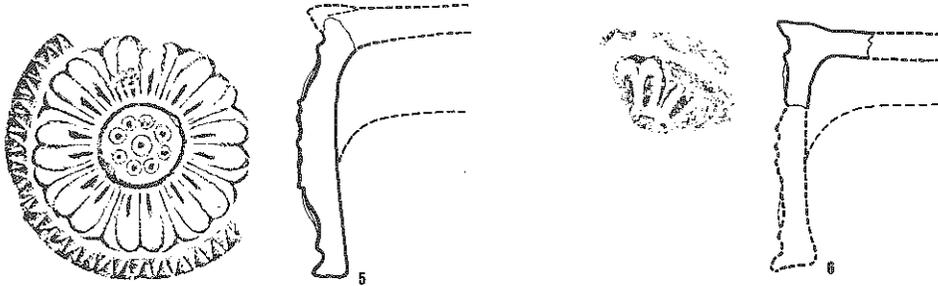
高麗寺



平川廃寺



正道遺跡



久世廃寺

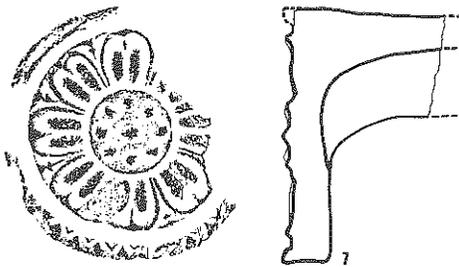


Fig 33 南山城地方の川原寺式

と似たものである。白鳳時代は川原寺式である。平川廃寺の川原寺発展形式に近い。

高麗寺の川原寺発展形式を高麗寺式と呼び、平川廃寺の川原寺発展形式を平川廃寺式と呼びたい。相楽郡・久世郡で川原寺の創建瓦と同範のものや文様を忠実に模したものは、前述したごとく高麗寺跡と平川廃寺だけにみられる。他の寺跡の川原寺式は、高麗寺式ないし平川廃寺式である。

高麗寺式は、高麗寺跡を始め、里廃寺・蟹満寺・山滝寺跡・正道遺跡に、平川廃寺式は、平川廃寺を始め、広野廃寺・久世廃寺・正道遺跡に分布している。高麗寺式は相楽郡を中心に一部久世郡に広がり、平川廃寺式は久世郡のみに採用されている特色が認められる。

大鳳寺の川原寺式 (NM 01) は、文様から見る限り高麗寺の川原寺同范例や平川廃寺の川原寺出土例に近いものと比較すると若干新しい要素が見られる。NM 01 のモチーフが直接的に川原寺からもたらされたものか、あるいは高麗寺や平川廃寺を経由したものなのか確定はできないが、前者の可能性を考えておきたい。また、大鳳寺の NM 01 は、高麗寺や平川廃寺のように発展形式をもたない。これは、先の可能性を補強する。

(3) 独自の文様構成を持つ軒丸瓦を出土する寺々

独自の文様構成を持つ軒丸瓦とは、大和国での著名寺院にその系譜をたどれない瓦文様である。これらの瓦を出土する寺々は、葛野郡・乙訓郡・綴喜郡を中心としており、葛野郡が、北野廃寺 (Fig32-32)・広隆寺 (Fig32-31)、乙訓郡が、檜原廃寺 (Fig32-30)・宝菩提院廃寺 (Fig32-29)・乙訓寺 (Fig32-28)・鞆岡廃寺 (Fig32-27)・山崎廃寺 (Fig32-26)、綴喜郡が、足立寺跡 (Fig32-25)・志水廃寺 (Fig32-24)・興戸廃寺 (Fig32-23)・普賢寺 (Fig32-

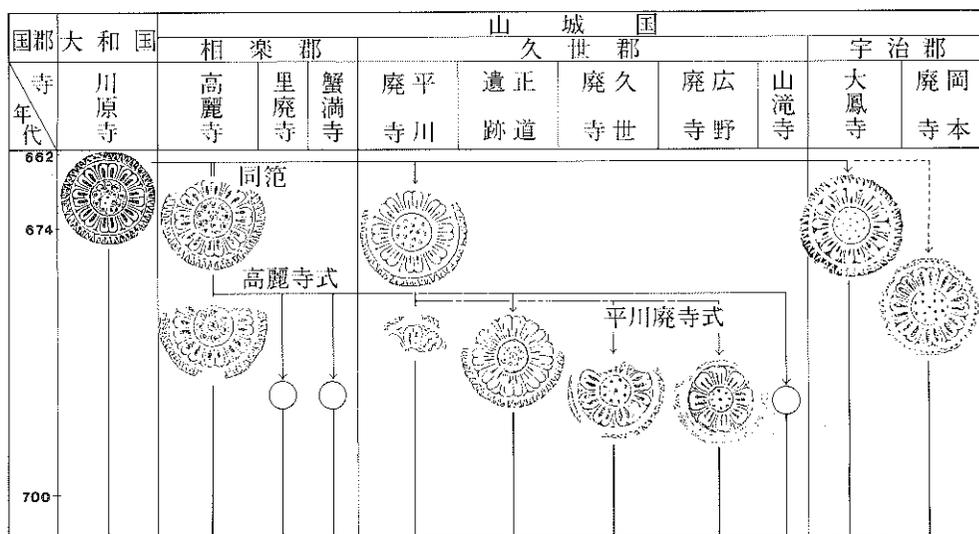


Fig 34 南山城地方の川原寺式の変化

22)・三山木廃寺 (Fig32—21)である。他の郡では愛宕郡の出雲寺跡 (Fig32—33)がある。

北野廃寺 (京都市北区)は幾度の発掘調査にもかかわらず加藍配置等は全く不明^{文50}である。出土瓦は多く、飛鳥時代より平安時代のものがある。飛鳥時代の瓦には百済様式素弁10弁文・高句麗様式単弁8弁文の軒丸瓦がある。白鳳時代では山田寺式がある。

檜原廃寺 (京都市右京区)は発掘調査の結果、中門・廻廊・築地、8角塔・金堂等が検出され、四天王寺式加藍配置^{文9・11}が想定されている。出土瓦は重弁8弁文・素縁8弁文の軒丸瓦が出土している。このうち創建瓦とされるものは重弁8弁文の瓦で、これは蓮弁の中に子葉を置きその周囲を凹線で囲んだものである。これに組み合う軒平瓦は、素文のもので顎下に重弁8弁文をスタンプしたものである。

乙訓寺 (長岡京市今里)は現在でも法燈を伝えている数少ない寺である。現乙訓寺北方地域の調査の際には、講堂と推定される建物跡^{文10}が検出されている。出土した軒瓦は白鳳時代より各時代にいたる。創建瓦とされる瓦は単弁8弁文瓦である。これは弁端の尖った蓮弁に強い輪郭線をもつものである。

葛野郡・乙訓郡の寺院の多くは重弁文系瓦を出土している。宝菩提院廃寺・山崎廃寺においても、この種の瓦を出土している。このような様相について高橋美久二氏が傾聴すべき見^{文14}解を示している。

高橋氏は北野廃寺高句麗系瓦を重弁文瓦の初原様式と見なし、檜原廃寺の重弁文瓦へ発展、変貌し、山崎廃寺・宝菩提院廃寺重弁文瓦へ、そして乙訓寺単弁瓦に変化した、という見解である。

このように独自の文様構成を持つ瓦を出土する地域でも、更に分けるとすれば、重弁文を中心とする地域と、そうでない地域とに分けることが可能である。

山城国では瓦の系統により一応3地域に分かれるのである。その中でも川原寺式を出土する地域では、郡ごとに標式となり得る瓦が存在するのである。

川原寺式は全国的に広く分布する。この歴史的背景に壬申の乱 (672) 後の政治的变化をみる考え方がある。すなわち、戦勝者である大海人皇子 (天武天皇) 方の豪族に川原寺式の使用が許されたとするものである。八賀^{文18}晋氏は美濃国での瓦の様相から、高橋美久二氏は山城国の瓦の様相^{文14}からこの考え方を導き出している。確かに、壬申の乱の時、宇治郡の豪族は、その立場を明確にしなけりなかつたことは想像にかたくない。しかし、その実相がいかなるものであったか、文献は沈黙している。ここでは、この考え方を掲げるにとどめておきたい。

また、森郁夫氏は、山城国の瓦の様相に交通路^{文68}の変化をみる。すなわち、中央政権による主要交通路の掌握の変化が瓦の文様のかたよりに現われると考えるのである。川原寺の標式

例に近いものが高麗寺・平川廃寺・大鳳寺という各地域の中枢部のかつ交通の要衝に分布する事実を考えれば、たいへん興味深い考え方といえる。

いずれにしても、今後、考古学・文献史学等から一層追究しなければならない事は確かであろう。山城国における川原寺式の問題については、それぞれの寺院を同じ視点で見るとはまちがっている。前述したように、一口に川原寺式といっても一定のルールに基づいて分布している可能性があるからである。川原寺の同范品や標式例に近い瓦をもつ寺、高麗寺式や平川廃寺式のような発展形式をもつ寺、両者のいわゆる川原寺式の導入には何らかの差異があったはずである。前者は中央政権（川原寺）との直接的な関係によってそれぞれ導入されたもの、後者は中央政権との直接的な関係ではなく、山城国内での寺院を媒介として間接的に導入されたものである可能性が指摘できる。すなわち、この二者の瓦文様の差異からは、所謂川原寺式をもつ寺院すべてが必ずしも中央政権に直接結びつくものではなく、後者の場合は、その地域における豪族間の政治的状況を表現している、と考えるのである。

第4節 大鳳寺跡とその周辺

大鳳寺跡の発掘調査成果をふまえ、ここでは寺跡に関係するいくつかの事をのべ考察のまとめにかえたい。

創建瓦窯 大鳳寺跡の創建瓦を焼成した瓦窯跡はすでにわかっている。寺跡の南約600mの宇治山本の丘陵斜面にある山本瓦窯跡（宇治瓦窯跡）がそれである。

この窯は、昭和6年から昭和7年に発掘調査が行なわれており、内容は昭和8年刊行の『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第14冊』に「宇治古代登窯遺址」として報告^{文1}されている。概要を紹介する。

発見された窯跡は1基（Fig35）である。地下式の有段有階段式の登窯であり、全長5m程である。天井は中ほどの一部が遺存していた。焚口部には一対の自然石が据えてあったという。出土遺物は、軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦と匙形木製品である。軒丸瓦は、破片が2個体ある。まず大鳳寺のNM01と同范と見てよい。軒平瓦は重弧文軒平瓦であり、平瓦は凸面に格子タタキを残すもの、丸瓦は行基式のものである。匙形木製品は、長さ46cm程のゴルフクラブ様のもので、焚口部より炭化状態で出土した。

瓦窯は、発見された1基だけなのか、複数の瓦窯の中の1基であるのか、今はわからない。今後、調査の必要がある。また、付近には須恵器窯が存在しているらしい。時代的には7世紀代のものと思われる。現在も丘陵裾から須恵器片を採集することができる。

また、『宇治市史 第1巻』^{文17}では、奈良時代の当寺跡の瓦窯として岡本瓦窯をあげている。

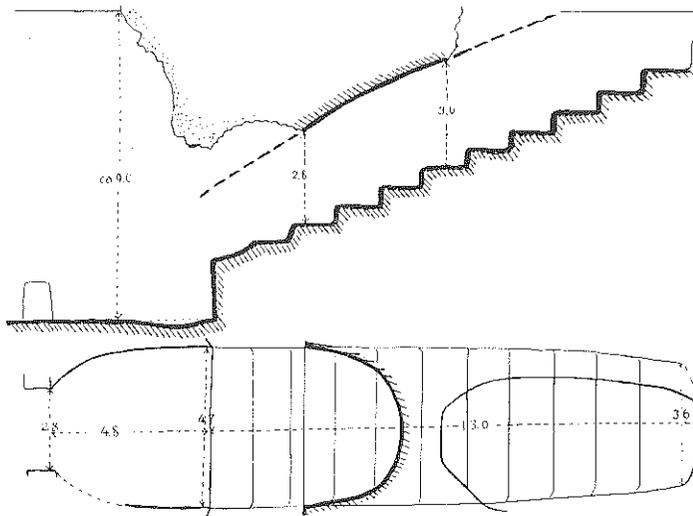


Fig 35 山本瓦窯跡実測図（文1より）

第V章 考 察

Tab. 2 宇治郡司一覽(9世紀以前)

西曆	年 月	官 名	位 階	姓 名	出 典
740	天平12年正月	擬少領	無 位	宇治惠都	東南院文書2
"	"	主 張	"	宇治千庭	"
748	天平20年8月	大 領	外正七位下	宇治宿禰君足	大日本古文書3
"	"	小 領	外從八位下	宇治宿禰都惠	"
"	"	主 張	無 位	今木連安万呂	"
761	天平宝字5年11月	擬大領	正八位上	宇治宿禰水道	大日本古文書15
"	"	擬少領	從八位上	宇治宿禰	"
"	"	主 政	正八位下	神宮寺造安比等	"
"	"	主 張	外少初位上	今 木 連	"
765	天平神護元年6月	少 領	外從五位下	笠臣氣多麻呂	平安遺文1
817	弘仁8年8月	大 領	從七位下	出雲臣乙繼	"
"	"	擬少領	正七位下	布勢公色智麻呂	"
"	"	主 政	少初位下	当麻忌寸真主	"
841	承和8年10月	大 領	從七位上	宇治宿禰宅成	"
"	"	擬少領	正八位上	宇治宿禰貞世	"
"	"	擬主張	大初位上	宇治山守連都麿	"
"	"	擬主政	大初位下	秦忌寸繼人	"
849	嘉祥2年8月	擬大領	從七位上	宇治宿禰	"
"	"	擬少領	從七位下	宇治宿禰清雄	"
"	"	擬主政	大初位下	秦忌寸繼人	"
850	嘉祥3年4月	大 領	從七位上	宇治宿禰清雄	"
"	"	擬少領	無 位	宇治宿禰安宗	"
"	"	主 政	少初位下	大宅臣園繼	"
"	"	副擬主政	大初位下	秦忌寸繼人	"

しかし、昭和60年の調査により、この岡本瓦窯は寺であることが判明した。大鳳寺の奈良時代及び平安時代前期の改修に使用された瓦は、平城宮式や平安宮式などである。これらは、大鳳寺の瓦工房で生産されたものではなく、平城宮や平安宮よりもたらされた瓦である。ただ、NM06だけは類例がなく、付近で焼成された可能性は否定できない。

建立氏族 7世紀後半、いかえれば白鳳時代は、全国的に寺院建立が盛んに行なわれた時代であった。我国で初めての本格的寺院の飛鳥寺の創建は崇峻元年（588）であり、推古32年（624）には寺は全国で46寺あったという。大化元年（645）の孝徳天皇の「不能営者。朕皆助作。」とする詔、天武天皇14年（685）の「諸国每家作佛舎」の詔は、当時の国家が寺院造営に意欲的であったことを示している。寺院の急増は遺跡からも充分に窺える。

このような寺院建立を積極的に行なったのは、中央の権門氏族であったり、各地域の豪族たちであったことは疑いのないことである。律令制のもとでは、各地域の豪族層は郡司に任命され、地域支配に大きな影響力をもっていたことはすでに指摘されている。では、宇治郡の郡司に任命された豪族とはどのような氏族であったのか。

8・9世紀の宇治郡の郡司層（Tab2）をみると、宇治・宇治宿禰・宇治山守連など宇治氏が郡司の多くを占め、圧倒的な勢力をほこっていることがわかる。今木連・神宮寺造・笠臣・出雲臣・布勢公・当麻忌寸・秦忌寸・大宅臣などの他氏族も散視できるが、その勢力は比肩すべくもない。『新撰姓氏録』によれば、宇治氏は物部氏と同じ饒速日命またはその6世の孫伊香色雄命を祖とし、山城国神別に属している。

宇治氏の勢力基盤がどのあたりなのか、不明な点は多い。しかし、大鳳寺跡の所在する宇治市菟道はかつて宇治郡宇治郷であったし、菟道、今は「とどう」と読むが、これは昔「うじ」と読んだ。地名を氏名に冠する宇治氏の基盤が、現在の菟道地区であった可能性は高い。大鳳寺の建立氏族として宇治氏が最も有力といえる。

周辺の寺 大鳳寺跡の西北約1Kmのところ岡本廃寺がある。この寺は、前述したように昭和60年の本市教育委員会の調査で初めて確認したもので、それまでは岡本瓦窯跡と呼ばれていた。創建年代は7世紀後半である。

伽藍配置は、法隆寺式と思われる。検出した建物は、瓦積基壇の金堂、掘立柱建物の講堂これらを囲む柵列である。

出土した軒丸瓦のうち、創建瓦と思われるものは2種類（Fig36）ある。このうちのひとつ（1）は、法隆寺西院伽藍創建瓦の系譜を引くいわゆる法隆寺式である。他のひとつ（2）は、蓮弁はいわゆる川原寺式であるものの外縁に珠文がめぐる特異な瓦である。出土量から考えて、前者が主要な瓦であつたらしい。文様から見る限り、年代は7世紀後半に比定できる。大鳳寺とほぼ同時期に創建された寺である。

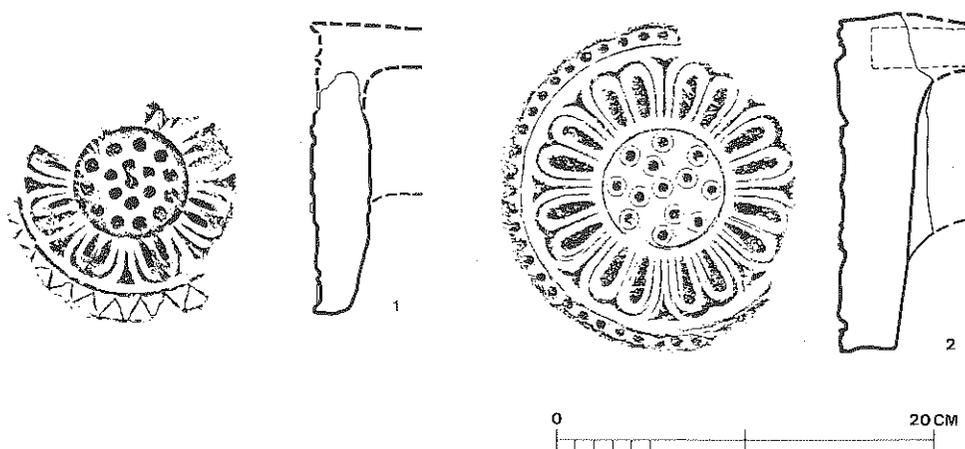


Fig 36 岡本廃寺の創建瓦

大鳳寺の近くに、ほぼ時を同じくして建立された岡本廃寺の瓦には、大鳳寺との類似点は少なく、かえって岡本廃寺の北約5 kmのところにある法隆寺式を創建瓦とする法琳寺（京都市山科区^{文15・49}）との間に多くの共通点を見い出せる。前節でのべたように、川原寺式は、久世郡・相楽郡などの南山城地方に比較的広く分布する瓦であり、北山城地方では稀である。宇治郡における川原寺式の瓦は、郡南端に位置する大鳳寺のみに認められる。瓦の文様からは、大鳳寺は南山城と共通性が高いといえる。大鳳寺と岡本廃寺とに見る瓦の系譜の差異は、まさに大鳳寺の宇治郡内における特異性を物語っている。山城国内における川原寺式で初原形式に近いものないし川原寺と同范の瓦は、大鳳寺以外に相楽郡の高麗寺（川原寺と同范）と久世郡の平川廃寺（初原形式）とに認められる。高麗寺は木津川の渡河地点に造営され、平川廃寺は久世郡の中枢に建立されている。両寺ともその地理的・政治的・経済的環境は大鳳寺に類似する。当寺が創建瓦として川原寺式を採用した背景は、高麗寺・平川廃寺のそれと同じであったと思われる。

宇治橋 宇治橋の創建を語る資料に、橋寺放生院境内に建てられている宇治橋断碑がある。原碑は完全な形で存在せず、上3分の1ほどが現存する。宇治橋断碑が発見されたのは、寛政3年（1791）である。現在の碑文は、『歴代帝王編年集成』をもとに補刻復元されている。

碑文によれば、宇治橋は大化2年（646）に僧道登によって架設されたとされる。道登は『日本書紀』の大化元年（645）8月の条に十師の一人として記載されており、碑文によれば山城の恵満の家の出身という。

しかし、『続日本紀』の文武天皇4年（700）3月10日の道照物化記事では、宇治橋は道照の創建であると記されている。この二つの造橋伝をめぐって早くから議論がある。ここでは、「造橋者はやはり道登であったが、道昭の卒伝にいう言葉を借りれば、諸々の津のわたりの

処に船を設け橋を造った功績にちなんで、『統日本紀』の撰修者が、宇治橋架橋もまた道昭の事績とみなした」とする『宇治市史 第1巻』(P. 332)^{文17}の見解を紹介しておく。

また、宇治橋は壬申の乱の直前にも『日本書紀』に記載されている。天武元年(672)5月条には、天武(大海人皇子)と近江朝の対立が決定的となった時、「菟道の守橋者に命じて、皇大弟宮(大海人皇子)の舎人が私糧を運ぶ」のを禁止させている。この時には、宇治橋は存在していたのであり、橋守の兵士が常駐していたことが想定できる。中央政権は、宇治橋を交通の要所として意識していたことは確かである。大鳳寺は宇治橋から北へ900mのところであり、壬申の乱とあい前後して建立された。大鳳寺の建立には、このような当地域の地理的状況が大きく影響したであろうことは想像にかたくない。では、以下に宇治橋断碑の碑文を掲げておく。

宇治橋断碑の碑文

洩·洩·横·流	其·疾·如·箭	修·修·征·人	停·騎·成·市	欲·赴·重·深	人·馬·亡·命	從·古·至·今	莫·知·杭·竿
世·有·釋·子	名·曰·道·登	出·自·山·尻	惠·滿·之·家	大·化·二·年	丙·午·之·歲	構·立·此·橋	濟·度·人·畜
卽·因·微·善	爰·發·大·願	結·因·此·橋	成·果·彼·岸	法·界·衆·生	普·同·此·願	夢·裏·空·中	導·其·苦·緣

(傍点の文字は原碑文)

第VI章 結 語

昭和57年度から昭和61年度にいたる5年間、本市教育委員会が主体となって発掘調査を実施した大鳳寺跡の発掘調査の成果はすでにのべてきたとおりである。寺の内容を最少限度の発掘調査で確認するという当初の目的は一応達することができたと考えている。しかし、反面、調査の中で新たに生まれた問題や今後の調査・研究をまたなければならない点多々残していることも否めない。ここでは、5年間の調査成果を要約するとともに残された問題点を整理し本報告書の結語とする。

寺の創建・改修・廃絶 大鳳寺の創建瓦は川原寺の系譜を引く軒丸瓦 NM01 と重弧文軒平瓦の NH01 の組み合わせであることは確かである。川原寺式の複弁蓮華文様は大陸より新たに伝来した大唐様式と呼ばれるもので、白鳳時代を代表する瓦文様の一つである。NM01 はその初原形式の川原寺例と比べると若干新しい要素を認めることができ、川原寺以後のものであることはまちがいない。年代的には7世紀後半代に比定できる。この創建瓦が示す年代がすなわち大鳳寺の創建年代である。

奈良時代の中頃と平安時代の前期の瓦が少量出土している。前者は平城宮式であり、後者は平安宮式などである。この両時代に改修が行なわれている。改修の実態がいかなるものであったのか、現時点では明確にできないものの、瓦の出土量から判断する限りそれは少規模なものであったらしい。平城宮式は、南山城の諸寺院でよく見られる。この瓦が南山城諸寺院に採用される背景に官の意志の反映を読む見解がある。いったい、どのような関係の中で、平城宮の瓦が大鳳寺にもたらされたのか、その実態の解明は単に大鳳寺だけの問題としてではなく、広く南山城の寺院の動向を踏まえた上で今後究明しなくてはならない。平安宮式についても同様である。平安宮式は一般的に京外ではあまり見られない瓦である。平安時代前期にこのような瓦がもたらされた背景はいったいどのようなものであったのか。「東寺文書」の仁平2年(1152)3月条に東寺は金剛峯寺・弘福寺などとともに大鳳寺にも仏に供える菓子などの進上を命じていることが記載されている。「東寺文書」の大鳳寺は、宇治の大鳳寺跡と見るのが一般的見解である。そうすると、平安時代末頃では大鳳寺は存在し、東寺と深い関係が存在したこととなる。東寺と大鳳寺との関係はいつ頃まで遡ることができるのか、この点は、平安時代の大鳳寺の性格を考える上での重要な点となろう。「東寺文書」に大鳳寺とともに記載される珍皇寺が京都の珍皇寺とすれば、大伴銘瓦(NM05)が東寺を始め大鳳寺・珍皇寺でも認められることとなり大変興味深い。

寺の廃絶については、金堂の基壇を履う遺物包含層の年代より、13世紀後半から14世紀前

半頃より以前であると予想した。そして、ここに先述の仁平2年(1152)の記事を考慮すれば、廃絶時期は、仁平2年より13世紀後半ないし14世紀前半の間にさらに限定できることとなる。しかし、発掘調査の成果からは、必ずしもこのように限定するにはやや疑問な点が出てくる。それは瓦の問題である。

大鳳寺で出土した最も新しい瓦は平安前期のものである。仁平2年(1152)に大鳳寺の創建以来の建物が存在していたとすれば、その屋根は300年以上葺き替えられなかったこととなる。創建より平安時代前期にいたるまで約150年間に2回の屋根の改修が行なわれてきた状況とは余りにもへだたりがある。はたして「東寺文書」に記載された時の大鳳寺は創建以来の建物を残していたのであろうか。今は、この問いに対する答えはない。寺の大規模な改修(規模縮少を含めて)や寺地の移動という事も考慮しなければならない。文献に見る大鳳寺の存続時期は発掘調査の成果と必ずしも整合しない。また、金堂などの屋根が瓦屋根から瓦以外の屋根に改修されたため平安時代中期以後の瓦はないとする考えはあたらない。なぜなら金堂下成基壇や基壇周囲には明らかに金堂廃絶時に堆積した多量の瓦が存在していたからである。金堂は廃絶するまで瓦屋根であったことは確かである。以下に「東寺文書」を掲げておく。

東寺御影供菓子支配状

「去年調進菓子、每物或乏少、或當日午時被進之由
従寺家訴申之條如何、尤不富也、於今年者、不可然
十八九日間、早速任舊例、可被調進也、」

東寺

可調進御影供仏供料菓子等事

金剛峯寺 御佛供析米三石與米十合「奉」

弘福寺 干柿十合「奉」

玠皇寺 草餅十合「奉」

善通寺 伏菟十合「奉」

曼荼羅寺 餓十合「奉」

大鳳寺 粽十合

鳳凰寺 野老十合

垂氷莊 餅十合「奉」

大國莊 柑子十合「奉」

大山莊 栗十合「奉」

右來廿一御影供料者、任例兼日東寺政所可令調進之狀、如件、

仁平二年三月 日

別當阿闍梨(花押)

規模・伽藍配置 大鳳寺の寺域を画する施設として、溝 SD 402 と築地 SA 701 を検出した。前者は寺の北限を画し後者は南限を画す。両者は平行せず、東へ向うほど「ハ」字形に開くこととなる。両者の間の距離は、約 112m である。寺域の西限は、SD 402 が南へ屈曲する部分を検出したため、概ね字西中と字藪里とを分ける南北道路付近であることが理解できた。このような発掘調査で得られた成果と現在の土地割りや字界を手懸りに、大鳳寺は東西・南北とも約 112m 四方の寺域をもつことを想定した。想定する寺域を今後、さらに明確にしていける必要がある。

伽藍配置は、南面する法起寺式伽藍配置を考えた。この想定にはふたつの仮定がある。ひとつは、寺域の東西の長さが1町（ここでは112m程）であること、もうひとつは金堂の東側で検出した SX 601 を塔とすることである。このふたつの仮定は、前述したように状況的には可能性の高いものである。しかし、仮定であって確定したものではない。

伽藍の中心建物の検出は、現在では金堂のみに留まっている。SX 601 は塔基壇と思われるが、現時点では確認できていない。また、講堂も未検出である。講堂の位置については、法起寺式伽藍配置を想定する限り、金堂と SX 601 との間の北側部分となる。現状は竹林ないしは宅地である。

調査の意義と展望 以上、大鳳寺跡の発掘調査でえられた成果を簡単にまとめた。昭和57年の夏に、5年計画の初年度として第3次発掘調査を開始した時点で、我々がもっていた大鳳寺跡の資料と比べると、この5年間に収集できた成果は大きなものといわねばならない。わずか5年前まで、大鳳寺跡については、白鳳時代の建立らしいことと瓦積基壇があること以外は何もわからなかったのである。

寺跡の遺構が予想以上に良好な状態で遺存していることを確認できたのも調査における大きな成果のひとつであった。これは、近世以降、土地の大きな改変が少なかったことに起因するようと思われる。特に金堂跡は、府下でも良好に遺存しているもののひとつであり、古代寺院の金堂がいかなるものであったかを理解するうえで貴重な遺例となろう。

すでにのべてきたとおり、大鳳寺跡については、なお解明しなければならない点がある。これには、単に発掘調査や文献調査という方法だけの問題ではなく、府下の古代寺院の動向や当時の歴史的状況をも合わせた時間的・空間的に広い検討が必要である。

今後、さらに大鳳寺跡の全容が解明され、輝しい古代宇治の復元が進むことを期待するとともに、この貴重な文化的遺産が未来に伝わるよう努めたい。

(了)

参考文献一覧

- 文 1. 柴田 實「宇治古代登窯遺址」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第14冊
京都府教育委員会 昭和8年
- 文 2. 梅原末治「高麗寺趾の調査」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第19冊
京都府教育委員会 昭和14年
- 文 3. 梅原末治「北白川廃寺趾」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第19冊
京都府教育委員会 昭和14年
- 文 4. 坪井清足「大宅廃寺の発掘」『仏教芸術』37 昭和33年
- 文 5. 有光教一・坪井清足「大宅廃寺」『名神高速道路路線地域内埋蔵文化財調査報告』
京都府教育委員会 昭和34年
- 文 6. 『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所 昭和35年
- 文 7. 『平城宮発掘調査報告IV』奈良国立文化財研究所 昭和37年
- 文 8. 『平安遺文』古文書編 第6巻 2758 昭和39年
- 文 9. 「椋原廃寺発掘調査概報」『埋蔵文化財調査概報 1967』京都府教育委員会 昭和42年
- 文10. 「乙訓寺発掘調査概報」『埋蔵文化財調査概報 1967』京都府教育委員会 昭和42年
- 文11. 杉山信三・佐藤興治「椋原廃寺の発掘調査概要」『仏教芸術』66 昭和42年
- 文12. 田中琢「古代・中世における手工業の発達（4）畿内」『日本の考古学VI』歴史時代（上）
昭和42年
- 文13. 檜崎彰一・岩野見司・戸田紋平・若杉敬「古代・中世における手工業の発達（2）東海」
『日本の考古学VI』歴史時代（上） 昭和42年
- 文14. 高橋美久二「山城国葛野・乙訓両郡の古瓦の様相」『史想』第15号 京都教育大学考古学研究会
昭和45年
- 文15. 『飛鳥・白鳳の古瓦』奈良国立博物館編 昭和45年
- 文16. 佐原眞「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 昭和47年
- 文17. 『宇治市史』第1巻 昭和47年
- 文18. 八賀晋「地方寺院の成立と歴史的背景—美濃の川原寺式の分布—」『考古学研究』77号 昭和48年
- 文19. 「平川廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集 城陽市教育委員会 昭和48年
- 文20. 「正道遺跡発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第1集 城陽市教育委員会 昭和48年
- 文21. 『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅰ』瓦編1解説 奈良国立文化財研究所 昭和49年
- 文22. 『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ』瓦編2解説 奈良国立文化財研究所 昭和49年
- 文23. 高橋美久二「宇治田原町山滝寺跡出土の古代瓦」『京都考古』第5号 昭和49年
- 文24. 「平川廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第2集 城陽市教育委員会 昭和49年
- 文25. 「平川廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第3集 城陽市教育委員会 昭和50年
- 文26. 『北白川廃寺発掘調査概報』京都市文化観光局 昭和50年
- 文27. 『平城宮発掘調査報告VI』奈良国立文化財研究所 昭和50年

- 文28. 「久世廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第4集 城陽市教育委員会 昭和51年
- 文29. 『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所 昭和51年
- 文30. 『西賀茂瓦窯跡』平安京跡研究調査報告4 古代学協会 昭和53年
- 文31. 『平城宮発掘調査報告Ⅸ』奈良国立文化財研究所 昭和53年
- 文32. 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所 昭和53年
- 文33. 「久世廃寺第3次発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第9集
城陽市教育委員会 昭和55年
- 文34. 「平安京跡（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 1980—3』
京都府教育委員会 昭和55年
- 文35. 森 郁夫『瓦のロマン』昭和55年
- 文36. 『山田寺展』飛鳥資料館 昭和55年
- 文37. 「久津川遺跡群発掘調査概報—久世廃寺—」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第10集
城陽市教育委員会 昭和56年
- 文38. 『洛南高等学校新築体育館用地埋蔵文化財調査報告』鳥羽離宮跡研究所 昭和56年
- 文39. 「平安京跡（右京一条三坊九・十町）昭和55年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報 1981—1』
京都府教育委員会 昭和56年
- 文40. 「羽戸山遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概要』第2冊
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和57年
- 文41. 「羽戸山遺跡」『京都府埋蔵文化財情報』第3号
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和57年
- 文42. 『平城宮発掘調査報告Ⅺ』本文 奈良国立文化財研究所 昭和57年
- 文43. 森 郁夫『瓦と古代寺院』昭和57年
- 文44. 『隼上り瓦窯跡発掘調査概報』宇治市教育委員会 昭和58年
- 文45. 『大鳳寺跡第3次発掘調査概報』宇治市教育委員会 昭和58年
- 文46. 金子裕之「軒瓦製作に関する二三の問題—川原寺の軒丸瓦を中心として—」『文化財論叢』
奈良国立文化財研究所 昭和58年
- 文47. 百瀬正恒「灰釉陶器窯の編年について」『京都考古』第29号 昭和58年
- 文48. 堀内明博「平安京出土の灰釉陶器編年試案」『京都考古』第29号 昭和58年
- 文49. 『山城の古瓦』第1回特別展図録 京都府立山城郷土資料館 昭和58年
- 文50. 『北野廃寺』京都市埋蔵文化財研究所 昭和58年
- 文51. 『埋蔵文化財ニュース40 飛鳥白鳳寺院関係文献目録』
奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター 昭和58年
- 文52. 『大鳳寺跡第4次発掘調査概報』宇治市教育委員会 昭和59年
- 文53. 『第1回宇治市内発掘調査報告会資料』宇治市教育委員会 昭和59年
- 文54. 「隼上り遺跡」『京都府埋蔵文化財情報』第12号
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和59年

- 文55. 「隼上り 3号墳」『京都府埋蔵文化財情報』第14号
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和59年
- 文56. 「隼上り遺跡昭和58年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第11冊
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和59年
- 文57. 杉本 宏「土器からみた宇治大鳳寺跡の終焉」『京都考古』第34号 昭和59年
- 文58. 『大鳳寺跡第5次発掘調査概報』宇治市教育委員会 昭和60年
- 文59. 「京滋バイパス関係遺跡昭和59年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第16冊
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和60年
- 文60. 「隼上り 2号墳」『京都府埋蔵文化財情報』第15号
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 昭和60年
- 文61. 『史跡 高麗寺跡—等1次範囲確認調査概報—』山城町教育委員会 昭和60年
- 文62. 『京都府遺跡地図』第5分冊〔第2版〕京都府教育委員会 昭和60年
- 文63. 『大鳳寺跡第6次発掘調査概報』宇治市教育委員会 昭和61年
- 文64. 『第2回宇治市内発掘調査報告会資料』宇治市教育委員会 昭和61年
- 文65. 『史跡 高麗寺跡—第2次範囲確認調査概報—』山城町教育委員会 昭和61年
- 文66. 「平川廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第15集 城陽市教育委員会 昭和61年
- 文67. 『宇治市遺跡地図』（改訂版）宇治市教育委員会 昭和61年
- 文68. 森 郁夫「古代山背の寺院造営」『学叢』第8号 京都国立博物館 昭和61年

別表1 軒丸瓦計測表

番号	形式	直径	内 区				外 区		備 考
			中房径	蓮子数	蓮弁	弁区径	幅	文 様	
1	NM01	204	73	1+5+9	複弁 8弁	158	20	面違鋸齒文	第5次1トレンチSB501
2	NM01	201	70	1+5+9	複弁 8弁	152	21	面違鋸齒文	第3次南部包含層
3	NM01	191	70	1+5+9	複弁 8弁	147	19	面違鋸齒文	第4次2トレンチSD402
4	NM02	163	42	1+8	単弁 16弁	118	21	(外)素縁 (内)珠文	第3次南部包含層 平城宮6133C
5	NM03			(1+8)	複弁 8弁			(外)凸鋸齒文 (内)圏線	第3次包含層 平城宮6225
6	NM04	165	48	1+8	複弁 8弁	69	37	(外)線鋸齒文 (内)珠文	第1次SB501 平城宮6282
7	NM05			(大伴)	複弁 8弁		31	(外)素縁 (内)珠文	第3次包含層
8	NM06	169	31	1+4	単弁 12弁	101	29	(外)素縁 (内)珠文	第3次包含層
9	NM07				複弁 8弁		32	(外)素縁 (内)珠文	第4次2トレンチ包含層 西賀茂瓦窯?
31	NM01		75	1+5+9	複弁 8弁	153	18	面違鋸齒文	第5次1トレンチSB501 下成基壇上
32	NM01		71	1+5+9	複弁 8弁		16	面違鋸齒文	第4次4トレンチSD407 直上
33	NM01		75	1+5+9	複弁 8弁				第5次1トレンチSB501 下成基壇
34	NM06			1+4	単弁 12弁		14	(外)素縁 (内)珠文	第4次2トレンチSD402 上面
35	NM02			1+8	単弁 16弁		24	(外)素縁 (内)珠文	第3次SE330掘方 平城宮6133C
36	NM01			1+5+9	複弁 8弁				第1次SB501

単位(mm)

別表2 軒平瓦計測表

番号	形式	上弦幅	弧深	下弦幅	内区文様	内区幅	外区文様	外区幅	額	備考
10	NH01				5重弧				段額	第4次2トレンチSD402
11	NH01				5重弧				段額	第4次2トレンチSD402
12	NH01				4重弧				段額	第5次1トレンチ包含層
13	NH01				4重弧				曲線額	第5次3トレンチ包含層
14	NH02				均整唐草	23	圏線	13	曲線額	第3次包含層 平城宮6663C
15	NH03				均整唐草	29	珠文	17	曲線額	第5次1トレンチSB501 西賀茂瓦窯
16	NH04				重弧				曲線額	第5次1トレンチSB501 へら描重弧文
17	不明				唐草		珠文	23	曲線額	第3次包含層

単位(mm)

別表3 鬼瓦計測表

番号	形式	全長	幅	文様	裏面	備考
18	OG02			車輪文(複数)	ナデ	第5次1トレンチSB501
19	OG01		(315)	単弁8弁, 剣菱形 間弁	ナデ	第5次1トレンチSB501

単位(mm)

別表4 丸瓦計測表

番号	形式	全長	広端幅	狭端幅	凸面	凹面	備考
28	A			110	ヨコナデ	布目	第5次4トレンチSB501下成基壇直上
29	A	386			ヨコナデ	布目	第5次1トレンチSB501下成基壇直上
37	(A)				ヨコナデ 「乃支」へラ描	布目	寺域北部地区表採

単位(mm)

別表5 平瓦計測表

番号	形式	全長	広端幅	狭端幅	凸面	凹面	製作技法	備考
20	A	389			格子タタキ (原体複数)	布目, 糸切り痕	桶巻 作り	第5次1トレンチSB501 瓦積基壇使用瓦
21	A		271		格子タタキ	一部タテへ ラケズリ	桶巻 作り	第4次1トレンチSD402
22	A		310		格子タタキ	一部タテへ ラケズリ	桶巻 作り	第5次1トレンチSB501 瓦積基壇使用瓦
23	Ba	394	305	257	縄タタキ	布目	一枚 作り	第3次SD301
24	Bb	385	(315)	270	縄タタキ,一部 ナデ消し	一部タテへ ラケズリ	一枚 作り	第3次SD301
25	B				縄タタキ	布目	一枚 作り	第4次1トレンチSK401 側端面に布目
26	B				縄タタキ	布目	一枚 作り	第4次1トレンチSK401 側端面に布目
27	C		(280)		タテナデ	布目	桶巻 作り	第4次1トレンチSD402
30	隅切瓦 (A)		185		格子タタキ (原体複数)	布目	桶巻 作り	第4次1トレンチSD402

単位(mm)

別表 6-1 土器類計測表

番号	器種	器形	形式	器高	口径	底径	特 徴	遺存率(%)	備 考
1	土師器	杯		26	144		口縁部A形態 内面1段放射暗文	20	第3次SD301下層 平城宮Ⅲ期
2	須 惠 器	杯	B			94	内外面ロクロナデ	5	第3次南部包含層
3		杯蓋	B		148		口縁部A形態 内外面ロクロナデ	20	第3次SD301下層 平城宮Ⅲ期
4		杯	A	28	108		内外面ロクロナデ 底部外面にヘラ起し痕	20	第3次SD301下層 平城宮Ⅱ期
5		杯蓋	B	30	192		口縁部B形態 内外面ロクロナデ 天井部外面ロクロケズリ	20	第3次SD301下層 平城宮Ⅱ期
6		杯	B			128	内外面ロクロナデ 底部外面にヘラ起し痕	20	第3次SD301下層 平城宮Ⅱ期
7		杯蓋	B		210		口縁部B形態 内外面ロクロナデ 天井部外面ロクロケズリ	20	第3次北部包含層 平城宮Ⅱ～Ⅲ期
8		皿	B				内外面ロクロナデ	40	第3次東拡張部
9		鉢	A		200		口縁端部面は内傾 内面ロクロナデ、体部下半ロクロケズリ 口縁端面を残し全面にヘラミガキ	20	第3次東拡張部 平城宮Ⅱ～Ⅲ期
10		鉢	X		192		口縁端部を玉縁状に肥厚 内外面ロクロナデ	20	第3次南部包含層
11		瓦 器	鍋			208		口縁端部は上方につまみあげる 口縁部はヨコナデ	5
12	羽釜				194		内外面ヨコナデ 体部外面スス付着	20	第3次南部包含層
13	羽釜				308		内面ナデ調整 外面、口縁部ヨコナデ体部ユビオサエ 体部外面スス付着	20	第3次北部包含層
14	須 惠 器	壺	C		72		内外面ロクロナデ	5	第3次南部包含層 平城宮Ⅱ～Ⅲ期
15		壺				88	内外面ロクロナデ 体部下半ロクロケズリ	20	第3次北部包含層
16	土師器	高杯	A				芯棒接合法 外面は11面にヘラケズリ	20	第3次北部包含層 平城宮Ⅱ～Ⅲ期
17	須惠器	杯蓋	H				内面および口縁部ロクロナデ 天井部外面にヘラ起し痕	5	第3次南部包含層 飛鳥Ⅰ期
18	灰釉陶器	碗				52	高台b形態 底部外面ロクロケズリ 口縁部内面に施釉	5	第3次南部包含層 黒笹90号窯式
19	緑釉陶器	皿				86	内面口縁部と底部の境に1条の沈線 胎土は須惠器の色調・硬度に似る 全面に濃緑色の緑釉を刷毛塗り	5	第3次南部包含層

単位(mm)

別表6-2 土器類計測表

番号	器種	器形	形式	器高	口径	底径	特徴	遺存率(%)	備考
20	灰釉陶器	椀				70	高台b形態 底部内面に三又トチン痕	5	第3次北部包含層 黒笹90号窯式
21		椀				100	高台a形態 体部下半以下ロクロケズリ 全面に刷毛施釉	5	第3次包含層 北部 黒笹14号窯式
22		皿				92	高台b形態 口縁部内外面に施釉	5	第3次南部包含層 黒笹90号窯式
23	陶	圈脚 円面硯				(視部径) 138	外面ロクロナデ 内面ナデ調整 硯面に降灰、中央部に使用痕	20	第3次南部包含層
24		硯	転用 硯				須恵器甕、体部片 体部内面にスミの付着と使用痕	5	第3次南部包含層
25	土師器	皿	A			146	口縁部B形態 外面c手法、内面1段放射暗文	5	第4次2トレンチ SK401平城宮Ⅱ期
26		椀	A			132	口縁部B形態 内面および口縁部ヨコナデ 外面c手法	20	第4次2トレンチ SK401平城宮Ⅱ期
27		椀	A			126	口縁部B形態 内面および口縁部ヨコナデ 外面b手法	20	第4次2トレンチ SK401平城宮Ⅱ期
28	須恵器	杯蓋	B			156	口縁部A形態 内外面ロクロナデ 天井部外面ロクロケズリ	5	第4次2トレンチ SK401
29		杯	B	52	156	101	内外面ロクロナデ 底部外面不調整	20	第4次2トレンチ SK401
30	鉛釉陶器	長頸 壺				94	口縁端部において屈曲丸く肥厚 胎土は軟質灰白色 外面に緑色釉、内面に緑色・白色釉	5	第4次2トレンチ SK401
31	須恵器	鉢	A			190	口縁端部外面に1条の沈線 内外面ロクロナデ	5	第4次2トレンチ SK401平城宮Ⅲ期
32		壺				62	内面および体部外面ロクロナデ 底部外面ロクロケズリ	40	第4次2トレンチ SK401
33	土師器	杯	A	38	162	108	口縁部A形態	90	第4次2トレンチ SD402
34	須	杯蓋	B			180	口縁部B形態 内外面ロクロナデ 口縁部外面ロクロケズリ	20	第4次2トレンチ SD402
35		杯蓋	B				内外面ロクロナデ	20	第4次2トレンチ SD402
36	恵器	杯	B			88	内外面ロクロナデ 底部外面不調整	20	第4次2トレンチ SD402
37		杯	A	30	132	89	内外面ロクロナデ 底部内面中央部に仕上げナデ 底部外面にへら起し痕	40	第4次2トレンチ SD402
38		皿	E			115	内外面ロクロナデ	5	第4次2トレンチ SD402

単位(mm)

別表6-3 土器類計測表

番号	器種	器形	形式	器高	口径	底径	特徴	遺存率(%)	備考
39	須恵器	杯	B			73	内外面ロクロナデ 底部外面中央部不調整	20	第4次2トレンチ SD402飛鳥IV期
40		皿	E		108		内外面ロクロナデ	20	第4次2トレンチ SD402
41		杯	A		108		内外面ロクロナデ	5	第4次2トレンチ SD402
42		鉢	A		192		口縁端部を残し全面にヘラミガキ 内面および口縁部に墨または黒ウ ルシが付着	20	第4次2トレンチ SD402
43		甕				119	内外面ロクロナデ	5	第4次2トレンチ SD402
44	陶碗	中空 凹面碗		48	132	82	内外面ロクロナデ 底部外面ヘラケズリ 底部中央部穿孔	40	第4次2トレンチ SD402
45	土師器	杯	A	32	170	116	口縁部A形態 外面b手法, 内面1段放射暗文	40	第4次2トレンチ SD402平城宮III期
46	須恵器	杯蓋	B		155		口縁部A形態 天井部内面に摩滅痕	20	第4次1トレンチ 遺物包含層
47	土師器	皿	A		160		口縁部A形態 外面c手法, 内面ナデ調整	20	第4次2トレンチ 遺物包含層
48	須恵器	杯蓋	G		106		内外面ロクロナデ 天井部外面ロクロケズリ	5	第4次2トレンチ 遺物包含層 飛鳥I~II期
49		杯	H		98		内外面ロクロナデ	5	第4次2トレンチ 遺物包含層 飛鳥I~II期
50		杯	G				内外面ロクロナデ 底部外面にヘラ起し痕	40	第4次3トレンチ 遺物包含層
51		高杯					内外面ロクロナデ 体部外面下半にロクロケズリ	40	第4次3トレンチ 遺物包含層 飛鳥I~II期
52	灰釉陶器	碗				66	高台b形態, 胎土は硬質灰白色 底部内面一部に施釉	20	第4次4トレンチ 遺物包含層 折戸53号窯式
53	瓦器	碗			146		口縁部ヨコナデ 内外面ヘラミガキ 体部不調整	20	第4次2トレンチ 遺物包含層
54	須恵器	壺	B				内外面ロクロナデ	20	第4次1トレンチ 遺物包含層
55	土師器	杯	A		132	32	口縁部A形態 外面a手法	40	第4次2トレンチ SK411
56		杯	A		120		口縁部A形態 内面ハケ調整のちヨコナデ 外面e手法	20	第4次2トレンチ SK411
57		杯	A		130		口縁部A形態 外上方に開く口縁部 外面a手法	5	第4次2トレンチ SK411

単位(mm)

別表6-4 土器類計測表

番号	器種	器形	形式	器高	口径	底径	特徴	遺存率(%)	備考
58	土師器	皿	A		128		外面 a 手法	5	第4次2トレンチ SK411
59	黒色土器	椀	A		122		内面ハケ調整のちへラミガキ 口縁部外面ヨコナデ 口縁部外面に炭素付着	20	第4次2トレンチ SK411
60		椀	A	33	90		内面ナデ調整のちへラミガキ 口縁部外面上半に炭素付着	20	第4次2トレンチ SK411
61		甕			110		内面ナデ調整のちへラミガキ 口縁部ハケ調整のちヨコナデ	20	第4次2トレンチ SK411
62	須	杯蓋	B				内外面ロクロナデ	5	第4次2トレンチ SK411
63	恵	壺	L		37		内外面ロクロナデ 底部外面回転糸切り痕	20	第4次2トレンチ SK411
64	器	壺	L		94	80	内外面ロクロナデ 底部外面回転糸切り痕	40	第4次2トレンチ SK411
65	灰釉陶器	椀		48	154	59	口縁端部外反、高台 a 形態 胎土は硬質灰白色 刷毛塗りによって施釉	20	第4次2トレンチ SK411黒笹14号窯式
66		水注				108	ロクロ成形、胎土は硬質灰白色 底部外面回転糸切り痕	40	第4次2トレンチ SK411黒笹14号窯式
67	瓦器	鉢			210		鉄鉢形、須恵器鉢 A に類似 口縁端部を残し全面にへラミガキ	5	第5次SB501 第1トレンチ 遺物包含層
68		鍋			312		内面および口縁部ヨコナデ 体部外面はナデ調整 体部外面スス付着	20	第5次SB501 第1トレンチ 遺物包含層
69		羽釜			186	77	内面および口縁部ヨコナデ 体部外面ユビオサエ痕	20	第5次SB501 第1トレンチ 遺物包含層
70	土師器	羽釜			266		内面および口縁部ヨコナデ 体部外面スス付着	20	第5次SB501 第1トレンチ 遺物包含層
71	瓦器	盤			280		内面および口縁部ヨコナデ 底部外面不調整	5	第5次SB501 第1トレンチ 遺物包含層
72	須	杯蓋	B		168		口縁部 A 形態 内面および口縁部ロクロナデ 天井部外面ロクロケズリ	20	第5次SB501 第1トレンチ 瓦堆積層
73	恵	杯	B	39	130	94	内外面ロクロナデ 底部内面中央部に仕上げナデ	40	第5次SB501 第1トレンチ 整地層直上
74	器	皿	E		106		内外面ロクロナデ	5	第5次SB501 第1トレンチ 瓦堆積層
75	土師器	皿		10	86		口縁端部スス付着 いわゆるかわらけ	20	第5次SB501 第1トレンチ 瓦堆積層
76	瓦器	皿			120		内面および口縁部ヨコナデ 体部外面下半不調整	5	第5次SB501 第1トレンチ 遺物包含層

単位(mm)

別表6-5 土器類計測表

番号	器種	器形	形式	器高	口径	底径	特徴	遺存率(%)	備考
77	土師器	皿		20	110		口縁端部スス付着 いわゆるかわらけ	20	第5次SB501 第1トレンチ 遺物包含層
78				21	120	74	口縁端部スス付着 いわゆるかわらけ	20	第5次SB501 第1トレンチ 遺物包含層
79	鉛釉陶器	多口瓶					胎土は軟質黄白色 ユビオサエのちナデ調整 内面の一部に白釉	5	第5次SB501 第1トレンチ 瓦堆積層
80	須恵器	浄瓶					注口部のみ	5	第5次SB501
81	土師器	杯	A		140		口縁部A形態 外面a手法、内面2段放射暗文	5	第7次第1トレンチ 暗青灰色土層 平城宮I~II期
82	須恵器	杯蓋	B		166		内外面ともロクロナデ 天井部外面ロクロナデ	5	第7次第1トレンチ 遺物包含層 飛鳥IV期
83		杯	A	34	106	72	内外面ロクロナデ 底部内面に仕上げナデ 底部外面不調整	40	第7次第1トレンチ 暗青灰色土層 平城宮I~II期
84	須恵器	杯	A		114		内外面ロクロナデ	5	第7次第1トレンチ 遺物包含層 平城宮I~II期
85		杯	A		108		内外面ロクロナデ	5	第7次第1トレンチ 暗青灰色土層 平城宮I~II期
86		鉢			280		内面・口縁部はロクロナデ 体部外面にタタキ痕	5	第7次第1トレンチ 暗青灰色土層 平城宮I~II期
87	鉛釉陶器	長頸壺					胎土は軟質黄白色 内面および口縁部に緑釉、外面には白釉を施す。	5	第5次SB501 第1トレンチ 瓦堆積層
88		壺					胎土は軟質黄白色 外面に緑釉と白釉を施釉	5	第5次SB501 第1トレンチ 瓦堆積層
89		壺					胎土は軟質黄白色 外面に緑釉と白釉を施釉	5	第5次SB501 第1トレンチ 瓦堆積層
90	緑釉陶器						胎土は軟質黄白色 平高台、全面に淡黄緑色の施釉	5	第4次遺物包含層
91	陶	転用硯					須恵器鉢A、体部片 体部内面にスミの付着と使用痕	5	第3次SD01
92	硯	転用硯					須恵器杯蓋B 天井部内面中央部に使用痕	5	第5次1トレンチ 整地層直上

単位(mm)

(注記) 遺存率は下記のような基準を設け4区分に分けた。
 5%……細片のため全形の窺えないもの。
 20%……実測可能なもので比較的遺存率の悪いもの。
 40%……比較的遺存率の良いもの。
 90%……ほぼ完形のもの。

